

# phassa vol.3

無料で読める  
合同小説誌

今回のテーマは  
「超能力」

Banri

## 【phassa vol.3】参加者一覧

---

### ■文章作家

- ・ あやまり堂  
(パブー <http://p.booklog.jp/users/ayamarido>)
- ・ 案山子  
(Read Me47G <http://rm47g.cetasika.jp/>)
- ・ うっぴー  
(Read Me47G <http://rm47g.cetasika.jp/>)
- ・ 水貴朗  
(Read Me47G <http://rm47g.cetasika.jp/>)
- ・ yasuoman  
(ぐるぐる抹茶 [http://www.geocities.jp/greentea\\_circle/](http://www.geocities.jp/greentea_circle/))

### ■イラスト作家

- ・ 万里 (表紙担当者)  
(HP <http://nanos.jp/genesis00/> / pixiv <http://www.pixiv.net/member.php?id=1503370>)
- ・ ぷらなりあ  
(ぐるぐる抹茶 [http://www.geocities.jp/greentea\\_circle/](http://www.geocities.jp/greentea_circle/) / pixiv <http://www.pixiv.net/member.php?id=1060932>)
- ・ \*min\*  
(ぐるぐる抹茶 [http://www.geocities.jp/greentea\\_circle/](http://www.geocities.jp/greentea_circle/) / pixiv <http://www.pixiv.net/member.php?id=148410>)
- ・ 永峰タカヤ  
(blog <http://takaya15.blog.fc2.com/> / pixiv <http://www.pixiv.net/member.php?id=3166280>)
- ・ やなぎねこ  
(ジャンピー牧場 <http://ameblo.jp/jumpy-honeymilkv/> / pixiv <http://www.pixiv.net/member.php?id=1917489>)

## 【phassa vol.3】 目次

---

【phassa vol.3】 テーマ「超能力」

- 1 「大槻香織のパラノーマルな事件録 case1 エミッシヨナー」 著・水貴朗 絵・万里
- 2 「なぐさめの本草」 著・あやまり堂 絵・\*min\*
- 3 「アンダーザレインボ」 著・うっぴー 絵・永峰タカヤ
- 4 「ホムンクルスの名前」 著・案山子 絵・ぷらなりあ
- 5 「火炎羽LOVE」 著・浮草堂美奈 絵・折紙ジョニー
- 6 ~~「まいまい」 著・yasuoman 絵・やなぎねこ~~

※尚、yasuoman・折紙ジョニー・やなぎねこの作品はまだ完成しておりません。  
ですので後日の更新となります。ご了承くださいませ。

1 「大槻香織のパラノーマルな事件録 **case1** エミッショナー」 著・水貴朗 絵  
・万里

---





「こんばんは」

突如女性の声で呼び止められた美樹本は、足を止めて振り返る。そこには街頭の下に女性が立っていた。

肩口で切りそろえられたロングボブで、身長はさほど高くは無い。年齢は20代後半。ベージュ色のコートを羽織り、ポケットに手を入れて静かに立っている。

「何か？」

美樹本《みきもと》は怪訝な表情で女性を見る。

「お久しぶりです。美樹本さん」

「……？」

自分のことを知っている。以前担当した顧客だろうか。

大手銀行に勤めている美樹本のところには、毎日ローンを求めて人がやってくる。その内の一人だろうか。

ポマードで撫でつけられたロマンスグレーの髪形と、50代特有の小じわが、やり手の銀行員の雰囲気をごことなく感じさせる。

「遠藤です。遠藤美夏子《えんどうみかこ》。一度お会いしましたよね？ 融資の相談の時に」

その名前を聞いて美樹本は「ああ」と声を上げる。

「遠藤浩一さんの奥さんでしたか。どうも。ご無沙汰しております。申し訳ありません。お会いしたのが最初の一度だけだったので」

「いいえ。それよりも、お仕事の方は順調ですか？」

「ええ。おかげさまで順調ですよ」

「そうですか」

そう言った美夏子の口元がうっすらと笑う。

「そうそう。まだ紹介していませんでしたね。娘の佳奈《かな》です」

美夏子はそう言って一歩横に移動すると、その陰には可愛らしいポニーテールの少女が立っていた。

「こんばんは。佳奈ちゃん。はじめまして」

「はじめまして」

美樹本がしゃがんで佳奈に挨拶をする。

「おいくつですか？」

「5歳です」

美樹本の質問に無表情で答える佳奈。美樹本は美夏子の頭を撫でると、立ち上がる。

「利発そうなお子さんですね」

「ありがとうございます」

「ところで、こんな時間にどうなされたんですか？ お子さんにはあまり良くありませんよ？」

確かに、今は既に深夜の11時である。美樹本は仕事で遅くなることが多いため、別段珍しいわけではないのだが、子連れ的女性という珍しさ。

それも繁華街やコンビニがあるような道路ではなく、線路をまたぐ陸橋の下だ。もよりの鈴川駅はもう終電も過ぎており、今から行っても無駄だ。一体なぜこんな時間にうろついているのだろうか。

「実は実家の方に二人で帰ってしまっていて。これから帰るところです」

「そうでしたか。でも、この時間でお二人では危険でしょう。タクシーでも呼びましょうか？」

「いえ。携帯電話を貸していただけませんか？ それで家の者を呼びますので。実は携帯電話を落としてしまって」

美樹本は納得したように頷く。

おそらく元々携帯電話で夫か誰かを呼ぶつもりだったのだろう。だが、帰宅途中で携帯電話を落としてしまったため、徒歩で帰っているところだったのだ。

タクシーを使わなかったのは歩いて帰れる距離だと判断したためだろう。

だが、迎えを呼べるのなら呼んだ方がいい。美樹本はポケットから携帯電話を取り出すと、美夏子に渡す。

「ありがとうございます。それと、もう一つ。お伝えしたいことがありまして」

「为什么呢？」

「主人が死にました」

その言葉を美樹本が理解するまで数秒掛かった。

「それは……」

突然の予想外の言葉に、美樹本は有体な単語しか出てこなかった。

「……ご愁傷さまです」

「……なんとも思わないんですね」

「いえ、大変残念に思います。まだお若かったのに」

そう言って目を伏せる。

その様子を美夏子と佳奈はじっと見る。

その視線に何か冷たいものを感じる。

「貴方がいなければ」

「なんのことですか？」

美樹本は首を傾げて尋ねる。

だが美夏子は 美樹本を静かに見るだけだ。

いや、それは睨んでいたのだ。

そして――

「これ以上貴方の犠牲者は出させない」

「なんのことか……」

美樹本がそう言った瞬間、自身の身体の変化に気付く。

「う……ぐ……」

身体が熱い。燃えるように。

「あ……が……」

慌てて自分の両手を見る。

あり得ないことが起きていた。自身の両手が、まるで火傷したように赤くただれ、しかも湯気まで放っているのだ。

少し冷えているとはいえ、運動もしていない人間の身体から湯気が出ることなどあり得ない。

もしそうなったとしたら、それは体温があり得ない程上昇しているということだ。

「あ……ぎっ！」

そして、すぐにその光景も見えなくなった。

美樹本の顔面から目玉が破裂して飛び出したのだ。

「あああああああああああああああいいいいいいいいいい……」

美樹本は闇の中で声を上げた。

それが、美樹本の発した最後の声だった。

早朝5時。こんな時間には滅多に人が来ない陸橋の下には、珍しいことに人だかりができていた。

朝早くに出勤する会社員や、犬の散歩中の老人、朝のジョギング中らしきジャージ姿の人物が、キープアウトと書かれた黄色いテープの領域を囲むように固まっている。

事件現場に集う人々。野次馬というやつである。

その野次馬に揉まれる一人の女性が、ようやく黄色いテープのところまでたどり着いた。そこで進入を監視している制服警官に敬礼をすると、テープを上げてもらい、立ち入り禁止の領域に入っていく。

「お、遅くなりました」

「全くだ。遅いぞ、大槻」

「す、すみません……」

女性はそう言って身を縮ませる。

大槻香織《おおつきかおり》。捜査一課に所属するれっきとした刑事である。

だが、周りでは彼女が刑事であることに一度は疑問を抱く。

少しタレ気味のくりくりとした目、若干癖のある亜麻色の長い髪、一般的な女性と比べても低めの身長。全体的に小動物のような雰囲気と童顔気味の顔、そして大きな黒ぶちの眼鏡のせいで、学生などに間違われることはあっても、二十

五歳の現役警察官だと思う人間はまずいない。

加えて――

「きゃあ！」

――見ているといらいらするほどのドジだ。これでよく警察官に、そして刑事になれたものである。

「おいおい。何やってんだよ」

先輩刑事の緒方政志《おがたまさし》警部補が、何もいないところでなぜか転んだ香織の腕を掴んで立たせる。

「す、すみません〜」

「ったく。ほら、とっとと済ませろぞ」

そう言うと緒方は香織に背を向けて歩き出す。

香織とは違い、こちらは刑事です、と言われれば誰もが頷くであろう容姿だ。角刈りの頭に角ばった顔、太い眉を気難しそうに曲げ、眉間に皺をつくっている男性だ。その顔には数々の事件の経験が刻まれているかのような、ベテランの雰囲気を漂わせている38歳の敏腕刑事である。

香織は緒方に付いていくと、青いブルーシートがあることに気付く。それは、大人一人が入っているかのように盛り上がっていた。

救急車が来ているというのに、ここにこうしてあるということは、このブルーシートの下にあるものは必然的に決まってくる。

遺体である。

「あの……見なきゃだめですか？」

「駄目だ。いちいち現場で吐いてたら胃がもたんぞ。慣れろ」

緒方はそう言うと、ブルーシートをめくる。

「ひううう！」

その遺体を見て、思わず香織は眼を閉じる。

「ひどいもんだ。一体どうやったらこんなことができるんだ」

さすがの緒方もその遺体の状態を見て顔をしかめる。

遺体はまるで釜茹でにでもあったかのように、顔面の肉が真っ赤にただれていた。それだけではなく、場所によっては肉が無くなって頭蓋骨が露出している。眼球も破裂したのか、目の周りには乾いた体液らしきものがこびりついている。

「あ、あ、あの。もう、いいですか？」

「……まあ、いいだろう。検死に回してみないとどうも分からん。火で焼いたにしては、服が燃えていないし、油やガソリンの臭いもしない。身元は持ち物からすぐに分かったがな」

「うう……。またお肉が食べられなくなりました……」

「肉が駄目なら米でも食え」

「警部補は食べれるんですかぁ？」

「当然だ。これよりひどい遺体を何度も見てきているからな。ともかくだ。俺はこの遺体を検死に回して、遺族に話を聞いて来る。お前はこの周辺で聞き込みだ。何か分かったら連絡する」

「は、はい」

香織は敬礼をすると、遺体から逃げるように走り去って行った。

「とは言ったものの……」

香織はさっそく途方に暮れた。

勢いで鈴川駅まで来てみたものの、誰に何を聞けばいいのだろうか。

遺体が発見された陸橋の真下は、駅前のロータリーに繋がる地下道になっている。朝や夕方ならば人通りもあるだろうが、深夜ともなるとほとんど人は通らない。

何人か地下道を通る人を捕まえて話を聞いてみるが、特に得られるものはなかった。

「どうすればいいんだろう……」

時刻は午前八時。聞き込みを行なおうにも、にわかに通勤・通学者が増え、それどころではなくなった。



香織は駅にある自動販売機でコーヒーを買おうと、もう少し現場の近くで聞き込みを行なおうと、地下道に向かって歩く。

地下道の入口は古いビルのすぐ隣にあり、周りには植樹された桜の木で囲まれているため、昼でも薄暗く、常に湿った空気で満たされている。

香織はその地下道を通ろうと、ビルの前を横切る。

「あ、そうだ。このビルの人達なら何か分かるかも」

香織は足を止めて引き返すと、ビルの前に立つ。

「.....何これ」

香織はその入口に張られている紙を見てきょとんとした。

紙には印刷された小さめの字で「超常現象研究所。不思議な出来事は気軽にご相談下さい」と書かれていた。

「うっわ.....胡散臭そう」

そう言いながら、香織はビルのガラス戸に手を掛け、中へと入る。

「人いるのかな」

中は薄暗く、人の気配は感じない。一階ロビーには受付らしき小さいカウンターがあるが、そこにも人はいない。

案内板を見ると、そこには超常現象研究所の名前だけがあった。

「二階か」

香織は階段を使って二階へと上がる。

階段を上がると、踊り場の扉には、超常現象研究所の張り紙があった。

香織は紙が貼られた扉をノックする。

返事は無い。

香織は再度ノックをするが、やはり返事は無い。

「いないのかな」

一応ドアノブを回してみる。

開いた。

香織は扉を開き、中を覗き込むように頭だけを入れて声を掛ける。

「あの.....捜査一課のものですが、どなたかいらっしゃいませんか？」

少し待ってみるが、やはり無人なのか、返事はない。

「それにしても.....」

香織は中の様子を見て呻く。

まず目に入ったのは壁。そこには様々なUFOの写真やら、謎のエイリアンの写真やら、新聞の切り抜きやらが貼り付けてあった。

さらに、目の前の大きな作業台らしき机の上には胡散臭い雑誌や怪奇現象、超常現象の本が乱雑に積み上げられている。

その周りにはどういふことが、可愛らしい女の子が書いてある箱も置いてある。上に、自作したらしき薄めの本、いわゆる同人誌も混じっている。

「.....なんか、あまり聞きたくないな」

香織は本能的に危険を察知し、帰ろうと扉を閉め掛ける。

「どちらさまでしょう」

「うひゃあ！」

驚いて振り返ると、そこには白衣姿の女性が無表情で立っていた。ブラウンのヘアに綺麗なブルーアイ。日本人離れした美女だ。

だが、身長はそれほど高くはない。香織と同じ155cm程度だろう。それ故か、白人美女にありがちの威圧感や近寄りたさはない。むしろ、その静謐な雰囲気は日本人形のそれだ。

「研究所に御用ですか？」

女性はとても透明な、綺麗な声で尋ねてくる。

「あ、ええ、ああと」

香織は何をどう言えばいいのか分からず、意味のない言葉を発する。

「博士なら奥にいます。ご案内しましょう」

「あ、はい」

女性は何か用事があると察したのか、扉を開けて香織を招き入れる。見ると、右手には野菜や肉が入った布製の買物袋がぶら下がっている。朝食の材料でも買ってきていたのだろうか。

中は二階を丸々使っているようだった。仕切りは無く、広い部屋の壁は本棚で埋まっている。

机の上の物はごく一部らしい。漫画、雑誌、同人誌、ゲームのパッケージやフィギュア。同じような本棚に色々な物が収納されている。

女性はさらに奥へと進む。奥には大きめのOAデスクが置いてある。さらにその奥には――

「博士。何をなさっているのですか？」

窓の前では、髪の長い白衣の男性が何やらポーズを取っていた。こちらに背中を向けて、腕を交差させて静かに立っている。

「博士」

女性は再度話し掛ける。

だが、男性はポーズを取ったまま返事をしない。

「……」

女性は買い物袋を置くと、手近にあった厚めの本を手にとると、つかつかと男性に歩みよる。

そして、何も言わず本を振りかぶると、後頭部に向かって振り下ろした。

ごっ

とてつもなく嫌な音が響く。

いきなりどつかれた男性は、バランスを崩し、前のめりに倒れる。そして、膝をついて後頭部をさすると、渋い声でようやく喋った。

「何をするのかね？ 木春《こはる》」

「呼んでも無反応でしたので」

「人を呼ぶ時に厚めの本で後頭部をどつくよう教えた記憶はないのだがな」

「今ので消えたのでは？」

「可能性は否定できんな」

男性は立ち上がると、白衣を直す。

「それで、何をしたらしたんですか？」

「うむ。カッコいいポーズの研究だ」

全く意味が分からない上に二人のやり取りについていけない香織だったが、女性は毎度のことなのか、特に何も突っ込まない。

「なかなかどうして白衣に似合うポーズというものはないな」

そう言いながら振り向く男性。

「う……わ……」

その男性を見て思わず呻き声を上げる香織。

それもそのはずだ。振り向いた男性の容姿は、先程の変なポーズからは想像も付かない程端麗だった。

切れ長の目、シャープで細い頬から顎のライン、細めの眉、流れるような黒髪。

芸能人でもここまで芸術的な美形はなかなかいない。女性である香織が思わず声を上げてしまうのは仕方がない。

だが、どうしても先程の奇行のインパクトが強すぎて、素直に彼を誉める気には慣れない香織だった。

「そちらは？」

男性が香織を見て女性に尋ねる。

「何か御用があるということで案内しました」

「あ……えと、あの、申し遅れました。私、捜査一課の大槻といい……。あ、あれ？ 警察手帳どこ行った？ あれあれ？ きゃっ！ やだ！ いたっ！」

警察手帳を探しながら持っていたメモ帳を落とす香織。それを拾おうと屈んだところで、頭を机にぶつける。

「いたたた」

おでこを擦りながらメモ帳を拾い、警察手帳をバックから取り出す香織。

それを見て男性は一言こう言った。

「ドジっ娘か」

「そのようですね」

「アピールではなく天然のドジっ娘はある意味天然記念物だな」

「？」

涙目で男性を見る香織。行っている意味がよく分からない。

「あの、ドジなのは認めますけど……。気にしてるので」

「気にする必要などない。ドジは短所ではない。むしろ長所だ」

「そうなんですか？」

「うむ。それに加えて長髪、タレ目、眼鏡。そして刑事。素晴らしい。君のような人物がまさかこの市にいたとは。ぜひ握手をして欲しい」

「はあ……。ええと、大槻香織です」

差し出された右手を握りながら香織は名乗る。

「よろしく。大槻刑事。私は――」

男性は香織の手を離すと、くるりと優雅に背を向け、先程のポーズをキレ良く決めながら名乗った。

「超常現象研究家にして未知の探求者、剣譲治《つるぎじょーじ》だ！」

譲治は「ぶわ」とでも効果音が出そうな動きでポーズを決め、そのまま停止する。

待つこと十秒。全く動かないので、香織の方から話し掛けることにした。

「えっと……。よろしくお願ひします。あの、こちらの女性は？」

「申し遅れました。私、譲治博士の助手をしております菊木春《きくこはる》と申します。よろしくお見知りおきを」  
丁寧にお辞儀をしながら名乗る木春。

「ところで大槻刑事」

「は、はい？」

「今のポーズはどうだった？ 狂気のマッドサイエンティストっぽく決めてみたのだが」

ずいっと顔を近づけてそんなことを尋ねてくる譲治。美形ならではの奇妙な威圧感がある。

「はあ……。ええと、かっこいいと……。思います」

実際、長身の美形であるため、適当なポーズを取っても様になってしまう。

「そうか。では、バリエーションの一つマッドサイエンティストのポーズとしてストックしておこう」

譲治は満足したように頷くと、OAデスクに座る。木春はいつの間にか姿を消していた。

「ところで、捜査一課の刑事がここに何か用かね？ 見ての通り、変な物が多いが違法な物はない」

「あ、いえ、少し質問がありまして……」

「今朝の事件のことかね？」

譲治の眼が鋭くなる。香織は一瞬気圧されるが、負けじと机に近寄る。

「そうです。何か御存じでしたか？」

「まあ、座りたまえ」

譲治に促され、香織はOAデスクの前に置いてある丸椅子に腰かける。そのタイミングを見計らったかのように、木春がティーワゴンを転がして給湯室から出てくる。

「粗茶ですが」

「あ、どうも……」

優雅な手つきで紅茶を淹れる木春。香織はその紅茶を一口飲む。

「あ、おいしい」

「恐れ入ります」

木春は続いて譲治にお茶を出すと、そのまま横に立つ。

「それで、だ。事件のことについてだったな」

「あ、はい。何か知っていることがあればお話ししていただけますか」

「残念ながら。事件のことは知っているが、それに関して特別なことは何も知らない」

讓治は大げさに肩をすくめる。

「失礼ですが、昨夜はどちらに？」

「ここでひたすらアダルトゲームをやっていたよ。昨日だけで攻略した女子は五人だ」

「アダ……！」

途端に顔を真っ赤にする香織。

「興味があるかね？」

「ありません！」

真っ赤な顔をしたまま怒鳴ると、咳払いを一つして香織は質問を続ける。

「その……ゲームをしている時に何か変わったことは？」

「何も。第一、事件現場は確かに付近だが、よほどの大声でもない限りここまでは届かない。怪しい人物も見えてはいない。いたとしても、少なくとも私は気付いていないよ」

確かに一晩中起きていたとしても、ゲームに集中していたのなら、怪しい人物が近くをうろついても気付かない。よほどの大音量の物音や悲鳴ならば気付いていただろうが、夜中にそんな音がすれば讓治で無くとも誰かが気付く。

「そうですか……」

落胆の表情を浮かべながらメモ帳を閉じる香織。と同時に、香織の携帯電話が音を立てる。慌てて電話に出る香織。

「はい。大槻です。あ、今聞き込みを……。分かりました。すぐに戻ります」

香織は電話を切ると、紅茶を一気に飲み干し、席を立つ。

「申し訳ありません。署に戻ります。紅茶、ありがとうございました」

バタバタと荷物を持って出ていく香織。その背中に讓治が言葉を投げる。

「大槻刑事」

「はい？」

「困ったらいつでも来るといい。力を貸そう。少々条件は付くが」

「……はあ。ありがとうございます」

香織はよく分からないといった風に首を傾げると、研究所を出て行った。

署の捜査一課のオフィスに戻ると、さっそく緒方警部補に書類を渡された。

検視報告書らしい。

「見なきゃ駄目ですかあ……？」

「駄目だ。嫌なら刑事をやめちまえ」

「うう……」

涙目になりながらも報告書に目を通す香織。

「被害者は美樹本則夫《みきもとのりお》五十二歳。三菱銀行鈴川中央支店の次長。家族は妻と子供が一人。逮捕歴無し」

「俺らで言うところのキャリア組だ。いずれは頭取だと言われていた男だ」

香織は頷くと書類をめくる。

「凶器は……不明、ですか」

「ああ。直接的な原因は重度の熱傷だ。脳の、な」

「脳の……」

熱傷とはいわゆる火傷のことである。医学上はⅠ度、Ⅱ度、Ⅲ度と程度によって段階を決められており、最もひどい熱傷はⅢ度の熱傷だ。このⅢ度の熱傷が全身の6割を超えると、高い確率で死亡する。

「そこに書いてある通り、脳が熱でとろけていたらしい。開頭したら中身が溢れてきたそうだ。死亡推定時刻は昨夜十一時から一時の間。目撃者は今のところ無しだ」

「うぐ……」

香織は口を押さえるが、それでも報告書に目を通す。



「内臓にもⅢ度の熱傷……？　どういうことですか？」

「分からん。熱湯を浴びせれば皮膚にⅢ度の熱傷を負わずことは可能だが、内臓までとなるとな。熱湯を飲ませりゃ胃や食道はそうなるが、頭蓋骨に覆われている脳がとろけるまでの熱量をどうやって被害者に浴びせたのか。監察医も首を傾げていた」

香織はさらに書類を見る。書類には見るに堪えない遺体の状態が写真付きで載せられていた。

「あれ？」

「どうした？」

香織は美樹本の所持品のリストを見てふと思った。

「携帯電話持ってない人なんですね。珍しい」

「……ふむ。今時の、それもエリート銀行員が携帯電話を持っていないのは少し引かかる。犯人が持ち去ったかもしれん。調べさせよう」

緒方はそう言って頷くと、香織の方を向く。

「ともかくだ。凶器は不明だが、これほどひどい殺しだ。怨恨の可能性が高い。だが、美樹本の妻に話を聞いても心当たりはないそうだ。そっちはどうだった？」

「駅周辺の人達からは何も」

「そうか。周辺の聞き込みは他の奴に任せて、お前は俺と三菱銀行に行くぞ。交友関係から洗う」

「はい！」

香織は返事をすると、報告書をバッグに閉まって緒方に付いて行った。

三菱銀行は大手の都市銀行で、この鈴川市では店舗はこの中央支店一店舗のみだ。地方の田舎都市には不釣り合いな程大きな店舗が一時話題になっている。

その店舗の奥の応接室に緒方と香織は通されていた。

目の前には少し中年太りの男性が座っている。三菱銀行鈴川中央支店の支店長だ。

「美樹本君が……」

「ええ。今朝早く、遺体で発見されました」

「そうですか……。捜査一課が担当しているということは……殺人ですか？」

「その可能性はあります」

そう言うとうな垂れる支店長。

「美樹本さんはどのような方でしたか？」

「真面目で優秀な男でした。支店内以外でも評価が高く、いずれは本店の頭取ではないかと言われていました。人柄も良く、家族思いでした。私も個人的に親交がありました」

「何か変わったところはありませんでしたか？」

「特には……」

支店長はそう言うとうな垂れる。

「では、質問を変えます。美樹本さんは誰かに怨まれていますか？」

「そんな！　とんでもない！　支店内で彼を悪く言う人間はいませんよ！」

「陰では分からないのが人間ですが？」

「それは……私が知らないだけなのかもしれませんが……」

「本当に何も心当たりはありませんか？」

緒方の鋭い視線に支店長は狼狽する。

「ありません！　自慢の部下です！」

「……そうですか。ありがとうございました」

緒方がそう言うと、支店長は退席する。

「真面目で優秀、か。それだけで怨むひねくれた人間もいるんだがな」

「はあ……」

「大槻、次の人間を呼べ」

そう言われて香織が連れてきたのは、美樹本の部下である窓口担当の若い女性だった。緒方は美樹本が死亡したことを簡単に説明すると、女性は明らかに狼狽する様子を見せる。

「美樹本さんが……」

「あなたは美樹本さんの部下でしたよね？ どうでしたか？ 彼の仕事振りは」

「……凄い人です。彼はローン担当でしたが、彼が来てからローンの契約件数が大分増えました。うちの支店には必要な人でしたのに……」

「ローン担当ですか。住宅とか？」

「はい。主に住宅や車のローンです。あとは中小企業向けの事業ローンが時々」

「なるほど」

緒方の眼が細くなる。

「ローンを組んだ顧客とのトラブルはありましたか？」

「……」

緒方がそう言うと、明らかに女性の眼が泳ぐ。

「あったんですね？」

「……はい。先月、美樹本さんが担当したローンの男性顧客に窓口で怒鳴られました。美樹本は外出していて不在だったので、私が対応したのですが」

顧客はひたすら「騙された」「銀行は詐欺師」と罵り、警備員に外へ連れ出されたのだ。女性は男性がなぜ騒いでいるのか理解できず、そのまま美樹本への報告もしなかった。

「もしかしたら……何かトラブルがあったのかもしれませんが」

「その顧客の男性の名前は？」

「聞く前に一方的に窓口で怒鳴り散らしたので……」

「そうですか。顧客リストにある可能性が高いですね。頂いても？」

「あ、はい。すぐに用意します」

そう言うと女性は席を立ち、十数分後に美樹本の顧客リストを印刷して持ってきた。

「これで全部です」

「ありがとうございます。ご協力感謝します」

緒方がそう言うと女性は退室した。

「さて……。大槻、手伝え。何か不審な点はないか、よく見るんだ」

「はい」

香織は顧客リストに手を伸ばす。リストは名簿のあいうえお順と日付順の二種類が印刷されていた。

あいうえお順のリストは緒方が持っているため、香織は日付順のリストに目を通す。

「怒鳴りこんできた男性というのは、先月の話ですよ？」

「そう言っていたな」

「先月というと……どれだろう。住宅ローンの契約と車のローンが一件ずつですね」

「大槻、先々月の契約はどんな内容だ？」

顧客が怒鳴りこんできたということは、契約後に何か腑に落ちない点を発見したということだ。それが契約後すぐに分かるとは思えない。ある程度の期間が経ち、銀行を「詐欺師」と罵りたくなるような内容の発見があったと考えるべきだ。

「先々月は中小企業向けの事業ローンで2000万。車のローンで100万。住宅ローンが1000万です」

「どれもトラブルになるとは思えませんが……。話を聞いてみないとなんともな。まずはその中小企業の事業ローンを組んだ顧客を当たるか」

「はい。遠藤浩一さん、ですね」

「こっちのリストに住所が書いてある。近いな。行くぞ」

「はい！」

遠藤浩一の自宅は銀行から車で二十分程の住宅街にあった。小さめの町工場のような建物と隣接して自宅がある。

緒方はまず工場らしき建物に行く。

「……これは」

中からは人の気配はしない。それも当然だ。入口の張り紙を見ればすぐに分かる。

「倒産したのか」

この工場は今月の初め頃に倒産し、操業をしていないようだった。

緒方は念のため工場の入口の扉を押してみるが、鍵が掛っており開かない。

「自宅に行くぞ」

「はい」

二人はすぐ隣にあった遠藤浩一の自宅に行く。建物は真新しく、非常に綺麗だった。緒方は玄関に立つと呼び鈴を鳴らす。

「……」

だが返事は無い。

「留守でしょうか」

「……」

緒方は香織には答えず、玄関の扉のドアノブを回す。やはり鍵が掛っている。

「裏に回るぞ」

緒方はそう言うと、庭の方へ入っていく。そこでガラス戸に念のため手を掛ける。

「……大槻」

「はい？」

「すぐに応援を呼べ」

「え？」

緒方はそう言うと、拳銃を取り出し、グリップ部分でガラス戸を割る。

「ちょっと！ 警部補！」

「いいから応援を呼べ！ 救急車と鑑識もだ！」

怒鳴りながら緒方は割れたガラス戸に手を突っ込み、ロックを外すと土足で家に上がる。

香織は言われるがまま救急車を呼び、捜査一課に電話をすると、緒方を追いかける。

緒方が踏み込んだのはおそらく居間だ。十畳程の部屋に座卓とソファ、テレビが置いてある。

緒方はソファの陰で屈んで何かを見ていた。

「あの、警部補？ 何かあったん……。うっ！」

緒方が屈んで見ている物を香織も見た。見てしまった。

焼けただれ、眼球が破裂した全身火傷の――死体を。

「被害者は新田康史《にったやすし》。常総銀行のローン担当者だ」

「また銀行員ですか？」

香織は初動捜査と検視結果の報告を捜査一課のオフィスで緒方から聞いていた。時刻は既に夜だ。

常総銀行は鈴川市に店舗を数多く持つ、三菱系列の地方銀行だ。この市では最も身近な銀行と言える。

「死亡推定時刻は昨日の昼。つまり、こっちが一人目だ」

「新田康史を殺害した後、家を出て夜に美樹本を殺した、ということですね」

「そうだ。殺し方も同じ。全身、内臓に至るまでの重度の熱傷だ。だが、濡れてもいなければ服も残っている。全く同じだ」

熱湯や油を掛けて火傷を負わせたのだとすれば、遺体には必ず油や水が検出される。だが、検出されたのは本人の持つ水分だけだ。凶器も殺害方法も特定できない。家の中にも特殊な物は無かった。

依然として殺害方法は不明である。

「周辺住民からは何か聞いたか？」

「はい。やはり遠藤さんの経営する工場、有限会社遠藤部品はつい最近経営不振で倒産したようです。そして遠藤浩一さんは先週の頭に亡くなっています」

「なに？ 自殺か？」

「いえ。居眠り運転による事故です。電柱に衝突し、亡くなったという話でした」

「すぐにその事故の調書を交通課に問い合わせろ。他には？」

「えっと……隣人の話ですが、二か月前からよく遠藤浩一さんはどこかへ頻繁に出かけていたそうです。資金繰りが大変だったらしく……。そして先月からは会っても挨拶もできないほど憔悴していたそうです」

「先月というと、三菱銀行に怒鳴りこんだ時期か。やはり何かあるな。それと、遠藤浩一には家族がいたな？」

「はい。遠藤美夏子さんと佳奈さんです。写真もあります」

報告書には遠藤家にあった美夏子と佳奈の写真が貼り付けてある。まだ幸せだった時の写真だろう。三人とも満面の笑顔だ。

「……姿が見えないとなると、やはり遠藤夫人が鍵だな。明日、俺は遠藤夫人とその娘の行方を追う。任意で引っ張って話を聞かせてもらおう。お前は遠藤浩一の過去を洗え。今日は帰っていいぞ」

「はい」

香織は敬礼をすると書類を持ったまま捜査一課を後にした。

翌日の朝、出勤すると捜査一課は騒然となっていた。

「あの、おはようございます」

香織は立ってどこかへ行こうとしていた緒方に挨拶をする。

「大槻、来たか」

「あの、何かあったんですか？」

「また死体が出た。昨日の二人と全く同じらしい」

「……っ！」

香織は驚愕の表情を見せる。緒方の表情も昨日以上に険しい。

「通り魔的犯行ではなく、これはれっきとした連続殺人事件だ。俺はこれから他の連中と現場に行く。お前は指示通り遠藤浩一を洗え」

「分かりました」

緒方は香織の頭がぐちゃぐちゃと撫でると、背広を肩に掛けて慌ただしく他の捜査員と一緒に出て行った。

「連続殺人事件……」

昨日の三菱銀行の美樹本則夫、常総銀行の新田康史、そして今朝見つかった死体。まだ詳しくは知らないが、殺害方法が全く同じということは同一犯による犯行の可能性は濃厚だ。

動機は不明だが、今後も被害者が増える可能性は高い。

それだけは避けねばならない。

「よし！」

香織は自分自身を奮い立たせると、オフィスを出て公用車を借りると、常総銀行に向かう。

新田康史が遠藤宅で殺害された理由がここにあるかもしれない。

香織は警察手帳を見せると、支店長を呼び、新田と遠藤浩一に関して質問する。やや細めの、気弱そうな支店長だ。

「新田が……」

「はい。昨日、遺体で発見されました」

「確かに、昨日無断欠勤して電話に出ないから心配はしていたのですが……」

「最後に見たのは？」

「一昨日の朝です。外回りに行くと言って出て行ったきり、直帰したものだ」

つまり、その外回り先が遠藤宅だったということだ。そして、遠藤宅に行き、殺された。

「あの、新田さんと遠藤浩一さんという方は何か関係がありましたか？」

「遠藤さん？ その方なら新田がローン融資の相談を担当しました。詳しい取引内容の書類をお渡ししますか？」

「お願いします」

香織がそう言うと、慌てたように支店長は書類を探しに行き、十数分して戻ってきた。

「これですね」



「ありがとうございます」

香織は書類に目を通す。遠藤浩一がローン契約を結んだのは一年程前。ローンの内容は住宅ローンだった。

「……8000万円？」

「え？ ええ。そう書いてありますね」

香織はその金額に違和感を覚える。

「8000万の住宅ローン融資はあるんですか？」

「ええ。時々ありますよ。大きな家だったり、土地が広かったり」

おかしい。香織はそう思った。

昨日行った遠藤家の家は、見た目は他の住宅と同じ大きさ、作りだった。おそらく高く見積もったとしても3000万から4000万だ。新築だとしても、だ。

とても8000万円も掛けた家だとは思えない。ならば、一体この金額の根拠はなんなのだろうか。

「この書類は頂いてもいいですか？」

「ええ。コピーなので。どうぞ。お持ち帰り下さい」

香織はローン契約書等の複数の書類をバッグに入れ、常総銀行を後にする。そしてその足で遠藤宅へ向かう。

遠藤宅はまだ立ち入り禁止のテープを張っており、所轄の警察官が入口に立って見張っていた。

香織は入口に立つ警察官に敬礼して中へ入ると、居間に置いてある筆筒や遠藤浩一の書斎を調べる。

「……あった」

香織が見つけたのは、新築した家の建築関係の書類だった。土地売買契約書に建築業者との契約書、そして見積書だ。

「……やっぱり」

見積書には建築工事費用として3200万円と書いてあった。

遠藤浩一が常総銀行から融資された住宅ローンの融資額が8000万円。だが、実際に建築に掛かった金額は3200万円。残り4800万円はどこに消えたのだろうか。

香織は書類を一通り読むと、書類を戻す。

どうということだろうか。

今回の事件は殺害方法といい動機といい、不明な点が多い。ただ殺すだけなら何もあんな殺し方をしなくてもいい。

よほど苦しめたかったのか、それともあの殺し方以外できなかったのか。今の段階では何も見えてこない。

香織は他に手掛かりがないか、本棚を探す。そこには五年前のサブプライムショック以降、みるみる悪化していく工場の実態が記載されていた。

おそらく遠藤浩一は必死だったのだろう。

方々に営業に回り、受注を取り付ける日々。だが、サブプライムショックの影響は大きく、得意先ですら次々と倒産していった。

香織は一通り本棚の書類に目を通す。特に捜査の進展になるような物はない。

続いて机の方を調べる。

「これは……」

机の上にはプラスチックのファイルが置きっ放しになっていた。

最も新しい受注関連のファイルのようだ。

中には遠藤部品が倒産するまでの克明に記されていた。その内容を見る限り、既に去年の暮れにはいつ倒産してもおかしくない経営状態だったようだ。取引している顧客はたったの三社。そのうちの一家電メーカーだったようだが、今年に入ってとうとうその大手も遠藤部品への受注をやめた。

それがとどめになったのだろう。この時のメーカーの担当者とのメールのやり取りまで印刷して残っている。

メーカーの担当者は資材部の猪川俊二《いのかわしゅんじ》という男らしい。会社を守ろうと必死な遠藤浩一のメールに対し、おざなりに返事を返してそれっきりだ。

香織は嫌な気分になりながらもファイルを机に置くと、緒方に電話をする。

「警部補。遠藤浩一についてですが、少し不審な点が。はい。分かりました。すぐに戻ります」

緒方の方もちょうど起きたばかりの殺人事件の現場検証が終わったらしく、戻るところだった。

香織は一度書斎の机に手を合わせてから遠藤宅を後にした。

捜査一課には緒方警部補と他数名の同僚が既に集まっていた。

「すいません！ 遅くなりました！」

「いや、俺達も今集まったばかりだ。さて、まずは今朝起きた殺しからいくぞ。被害者は杉田徹《すぎたとおる》四十二歳。わかば中小企業振興財団の会長だ。今朝早く、財団の人間が事務所に出勤した時に既に死んでいる杉田を見て通報した。死亡推定時刻は昨日の午後七時過ぎ。犯人は他の人間が全て帰ってから事務所で殺害したと思われる。一人暮らしだから今朝発見されるまで誰も気づかなかったんだろうな」

緒方は険しい顔で書類を読む。

「殺害方法は他の二件の殺しと同様だ。だが、殺害方法は依然として不明。防犯カメラは故障しており、犯人の姿は映っていない。以上だ。大槻、遠藤浩一の不審な点とは？」

「はい。遠藤浩一と死亡した新田康史との間に繋がりが無いか調べました。調べた結果、遠藤浩一は一年前に常総銀行から住宅ローンの融資を受けており、その取引の担当者が新田康史です」

「またローンか。それで？」

「気になるのはこの時のローンの金額です。遠藤浩一は常総銀行から住宅ローンとして8000万円の融資を受けています。ですが、遠藤浩一宅で見つけた自宅の工事費用見積書では金額は3200万円となっていました」

「計算が合わない。残り4800万はどこに行った？」

緒方は考え込む。だが、やはり今ここで議論しても何も進まなかった。

「だが、三人の被害者の内、二人は遠藤浩一に融資した銀行の人間だ。もう一人、杉田徹が遠藤浩一に繋がりが無かったか調べるぞ。それとやはり重要なのは遠藤浩一の妻の美夏子だろう。大槻、俺達が共通点を洗っている間、お前は夫人の行方を探れ。後で合流する」

「はい」

「警部補、一ついいですか？」

香織が返事をすると、同僚の一人、江原健介が手を上げる。

「どうした？」

「二人目……。いや、死亡した時期を考えると一人目の新田ですが、実はそのローンに関する書類を持っていました」

「なんだ？」

「遠藤浩一の住宅ローンの融資を受けた時に交わした諸々の契約書です。写しのようにしたが」

「……なぜこのタイミングでそんな物を？」

本来住宅ローンの契約書等の原本は銀行が保管し、顧客にはコピーした物を控えとして渡す。そして、それらはコピーといえども持ち歩いたりしない。顧客も銀行も。

それをわざわざ持って来ていたということは、その必要性があったということだ。

何が起きているのか分からない。

「これだけでは分かりませんが、この書類を持っていた新田が一人目の被害者だとすると、これが起爆剤になった可能性があると思います」

「確かにな。負債者である遠藤浩一が死亡したことでローンに関して何かあったのかもしれない。よし、江原は遠藤浩一のローン関係を全て洗え。大槻は夫人の行方を。他の奴らは俺と一緒にわかば中小企業振興財団を洗う」

「はい！」

その場にいた全員が返事をし、それぞれ駆け足で出て行った。

「とは言ってもなあ……。遠藤美夏子さんがどこにいるかなんて分からないし」

既に彼女の実家には緒方から連絡が行き、何かあれば連絡が来るはずだ。もっとも、匿っていたとするとそれまでのだが。

「家は二十四時間誰かが見張ってるし、子供を連れて野宿するとも考えにくいし……」

香織はぶつぶつと一人言を言いながら駅の方へ向かう。

「あ……」

心と横を向くと、昨日訪れた超常現象研究所のビルがあった。張り紙も昨日のままだ。

そういえば、昨日会った変な超常現象研究家は困ったら来いと言っていた。

死因も含め、今回は謎が多すぎる。博士と言われているくらいなのだから、それなりの頭脳と知識を持っているはずだ。何かアドバイスを貰えるかもしれない。

香織はそう思い、超常現象研究所の扉を開け、二階に上がる。

「あの、博士？ 譲治博士？」

研究所の扉をノックをして中に入るが、昨日と同じで返事は無い。昨日のように奥で何かポーズを取っているのかもしれない。そう考え、香織は奥へと進む。

そして奥からは声が聞こえてくる。

「ああん。そんな。駄目よ。焦っちゃ」

その声を聞いて香織はびくりと震える。

(こここここの声は……木春さん！)

奥からは木春の官能的な喘ぎ声と息遣いが聞こえてくる。

「もう、焦らないの。夜はこれから」

(やややややっぱり！ こ、これは！ この声は！ やばい！ お取り込み中！)

焦って引き返そうと身体を反転させる香織。その拍子に自分の足が交差し、派手に転ぶ。

「きゃあああああ！」

「む？」

さすがにこの音には気付いたのか、譲治と木春が香織に近づく。

「ごごごごごごめんなさい！ お取り込み中失礼いたしました！ 今退散しますので！」

「お取り込み中？ 確かに収録中ではあったが。退室する程の事はしていないぞ」

「へ？」

香織は真っ赤な顔のまま目を開けて二人を見る。

二人は昨日見た白衣のままだった。服がはだけているわけでもなければ、顔を紅潮させたりもしていない。

至って昨日のままだった。

「あ、あの、じゃあ、さっきの木春さんの声は？」

「ああ。彼女には同人ゲームのヒロインの声を担当してもらっている。まるで機械のような棒読みのエロ台詞がまた受ける人間には受けてね。こうして夏コミに向けて収録していたのだよ」

木春も無言で頷く。よく見ると、彼女の手には台本らしき本が握られていた。

「な、なんだ……。って！ 女性になんてことさせてるんですか！」

「ちゃんとギャラは払っている。等価交換だろう？」

「なんか等価交換って言えば何でも済むと最近みんな思ってますか！」

「何を言う。ちゃんと合意の上での収録だ。木春は嫌なことはしっかりノーと言える女だ」

「そうなんですか？」

「はい。ただ書いてあることをマイクに向かって言うだけです。それにもう慣れてます」

「はあ……」

普通の女性はある台詞を言わせられたら動揺すると思うのだが、もはやこれもいつものことなのだろう。

香織は立ち上がると、お尻を叩き、埃を落とす。

「それで？ 大概刑事。何か用事があったのではないのかね？」

「あ、はい。実は助言を頂きたくて。あの、博士は不思議な現象を研究しているんですよね？」

「その通りだ。この世のありとあらゆる不思議なことを探求している」

その割にはポーズを考えていたり、ゲームをしていたり、同人ゲームを作っていたりと、それらしいことはしていない。しかし、香織は突っ込みたいのを堪えて続ける。

「あの、実は今追っている事件が分からないことが多すぎて、少し博士の知識をお借りしたいなと」

「そういうことならば喜んで協力しよう。木春。お茶を頼む」

「かしこまりました」

そう言って優雅にお辞儀をする木春。まるで助手というよりメイドのようだ。

香織は讓治の前に座り、今起きている連続猟奇殺人事件の概要を説明する。

最初に発見された美樹本則夫、遠藤浩一宅で発見された新田康史二人が遠藤浩一のローンの担当をしていたこと、そして住宅ローンの金額と遠藤宅の建築費用が合わないことを隠さずに伝える。また、三番目の被害者、杉田徹と他の被害者達と共通点がないことも伝える。

「ふむ」

讓治は木春が炒れた紅茶を一口飲む。

「被害者達と遠藤浩一の繋がりはまだ洗っている段階です。分からないのは殺害方法です」

「ほう？」

讓治は好奇心に満ちた目で香織を見る。

「これを見てください」

香織は捜査資料――本来ならば門外不出なのだが――を見せる。そこには検視報告書と写真が添付されていた。讓治はそれを受け取ると舐めるように読む。

「ほう。ほうほう。ふむ。これは素晴らしい」

しきりに関心しながら一人言を言うと、捜査資料を閉じる。

「おええええええええ」

「よわ！」

そしていきなり吐いた。寸前で香織が床に置いてあった掃除用のバケツを置いたため、大惨事には至らなかったが。

「ふむ。しばらく肉はいらん」

吐いてすっきりしたのか、先ほどと全く変わらない様子で口元を拭く讓治。

「す、すいません。いきなりひどいの見せちゃって」

「いや。興味深い死体だったのは確かだ。全身、内臓、脳に至るⅢ度以上の熱傷。だが、服は燃えておらず、熱湯や油の痕跡はない」

「はい。捜査本部もみな首を傾げていて……。あの、こんなことができるんでしょうか？」

讓治は少し間を置くと、真剣な目で尋ねてきた。

「君は超能力は信じるかね？」

「……えっと、どうでしょうか。半信半疑です」

「そうか。だが、世の中は科学では説明のつかないことが数多く起きている。1966年、アメリカ、ペンシルベニア州で起きたベントレー事件を知っているかね？」

「い、いえ」

香織は首を横に振る。

「12月5日、ドン・コスネルというガス会社の男が、ガスの検針に来た際に奇妙な焼死体を発見した事件だ。焼死体の身元はジョン・ベントレー。検針に来た家の主だ。彼は驚くべきことに右足の脛から下のみを残して全身が消滅していたのだ。骨すら残さずな」

「しょ、消滅？」

考えられない。人体は確かに燃える。だが、水分が多く、骨もあるため、完全に消滅させるにはよほどの高熱を長時間与えなければならない。骨も残さずに消滅させることなどまず不可能だ。

「まだ不思議なことがある。ジョン・ベントレーの遺体の周りは、少し焦げている程度で燃えていなかったようだ。当然、家も無事。彼は超局所的な超高温に晒されて消滅してしまったのだ。燃焼促進剤無しで、な」

「そ、そんなことが……。都市伝説じゃないんですか？」

「アメリカの新聞には写真付きで載り、大騒ぎになった。最近でも、アイルランドで76歳の老人が暖炉の前で焼死しているのが発見された。当初は暖炉が出火原因だと考えられたが、それを裏付ける証拠が見つからず、公式に人体自然発火として処理されている」

「そ、それが、今回の事件と何か関係があるんですか？」

「直接的にはない。だが、私はこれらの事件はある超能力が原因ではないかと考えている。その超能力とは――」

そう言うと讓治は立ち上がり、白衣のポケットに左手を入れ、右手を突き出して宣言するように叫んだ。



「パイロキネシスだ！」

.....

研究室に静寂が満ちる。

「ここは、な、なんだってー！、と叫ぶ所だが」

「いや。知らないですし。パイロなんたら」

「知らないのか」

「知らないです」

「若き頃の長澤まさ〇と〇田亜希子が出ている映画は見たことはないかね？」

「見たことないです」

「そうか.....」

譲治は落胆したように俯くが、すぐに気を取り直し、生き生きと説明を再開する。

「では、説明しよう。パイロキネシスとは、念動発火や念力放火と呼ばれる超能力だ」

香織は黙って譲治の話を聞く。

「出火原因は不明。燃焼促進剤も検出されない。そして局所的な高温。人体のみの焼失。人体自然発火現象はパイロキネシスが原因と考えられる」

香織は頷くと、譲治に問い掛ける。

「まず、その能力が存在するとして、何者かがその能力で三人を殺した、ということですか？」

「そうとしか考えられん」

香織は少し考え込むと頷く。

「なるほど。ありがとうございます」

「.....君はすんなり受け入れるのだな」

譲治の問いに首を傾げる香織。

「普通は馬鹿にされた、ふざけている、等々言って怒ると思うのだが」

超能力で人を殺した、などという戯言《たわごと》を真に受ける人間などまずいない。ましてや、厳正な捜査で犯人を追い詰めなければならない捜査一課の刑事が、超能力殺人など、起訴できない殺害方法を肯定するわけにはいかない。

普通は馬鹿にされたと思って怒り出す。

「殺害方法は後で調べることができます。私の仕事はこれ以上殺人を起こさせないために、一刻も早く犯人を逮捕することです」

「なかなか広い視点を持っているな。大槻刑事。ドジっ娘かと思っていたが認識が甘かったようだ」

「.....ドジなのは否定しませんが」

口を尖らせて譲治を睨む香織。

「ともかく、あと分からないのは殺害動機です。この三人がなぜ殺されたのか、共通点があれば次の犯行も防げるかもしれせん」

「あるではないか。全員が遠藤浩一となんらかの金銭契約を結んでいる」

「金銭トラブル.....でしょうか？」

「その可能性は高い。まず一人目の被害者、新田康史は常総銀行の銀行員で8000万の住宅ローン関係の書類を持って殺されていた。二人目の被害者、美樹本則夫は遠藤浩一に事業資金の融資を担当していた。金額は2000万。三人目の被害者、杉田徹はわかば中小企業振興財団の会長。全員が何らかの形で遠藤浩一と金で繋がっている」

「は.....はあ.....」

一度説明を聞いただけでスラスラと被害者達のことを語る譲治。珍妙な言動とは裏腹に優れた頭脳の持ち主のようだ。

「ところで、この捜査報告書によると、美樹本の遺体からは財布やパソコンは見つかっているが、パソコンはどうなっていた？」

「えっと、壊れて起動しなくなっていました。科捜研がハードディスクから何かデータを拾えるか調べています」

「時計は？ デジタルか？ アナログか？」

「デジタルでしたが、壊れていました。あれ？」

香織はようやく気づいた。美樹本が殺された時の持ち物の不自然さに。

どちらも壊れているのだ。そんな物を二つも常に持ち歩いていたとは考えにくい。

「もう一つ。携帯電話はどこに行った？」

「持っていませんでした。今捜査本部でも携帯電話の行方を追っています」

讓治はそれ聞くと少しの間考え込むように黙り込む。

そしておもむろに香織に向き直る、真面目な顔で行った。

「一つ確認して欲しいことがある。遠藤浩一の現在の住宅ローンはどうなっている？」

「それは……江原さんなら分かるかな。電話してみます」

香織は住宅ローンを調べている健介の携帯に電話を掛ける。

『大槻か？ どうした？』

「あ、江原さん。お忙しいのに申し訳ありません。ローンのことを聞きたいのですが」

『それならさっき調べ終わって警部補に連絡したところだ。聞きたいか？』

「あ、はい。聞きたいです」

『俺のネタなんだからな。今度飯おごれよ。っと、住宅ローンの方から言うぞ。遠藤浩一が常総銀行から借りていた8000万の住宅ローンだが、結果的に言えば、無い』

「ない？」

香織は素っ頓狂な声を上げて聞き返す。

『そうだ。ないんだ。団体信用生命保険って知ってるか？』

「いえ。知りません……」

『だろうな。俺達みたいなアパート暮らしにゃ縁遠い話だからな。簡単に説明するぞ。団体信用生命保険ってのは、住宅ローンの負債者が何らかの理由で死亡した場合、住宅ローンをチャラにする生命保険だ』

住宅ローンは高額であるため、通常は長期に渡って返済を行う。そのため、その長い返済期間内に万が一のことがないとも限らない。銀行はそういったリスクを回避するために住宅ローンの融資の際、この団体信用生命保険、通称「団信」の加入を融資条件にする。このため、負債者が死亡または高度障害に陥ったとしても、本人に代わって住宅ローンの返済を行い、遺族に家を残せるようになる。

『遠藤浩一も当然、この団信に加入している。まだ手続き中だったが、すぐに住宅ローンはチャラになる。それともう一つ三菱銀行のローンだが、これはまだ残っている。担保にしたのは自宅だ。自宅には三菱銀行の抵当が付いているらしい』

「……」

つまり、せっかく住宅ローンは無くなったというのに、まだ借金が残っているということだ。動機があるとすれば、この辺りかもしれない。香織はそんなことを考えて黙り込む。

『分かったのはそんなところだ。そろそろ集合の時間だから俺はもう署に戻る。お前も戻れよ』

「あ、はい。ありがとうございました」

どこかうわの空でそう言うと電話を切る。

「どうだったね？」

「あ、はい。結果的に住宅ローンはその、団体信……」

「団体信用生命保険」

「そう。その保険で無くなる予定らしいです。そしてもう一つ、常総銀行からの借金はまだ残ったままで、家に抵当が付いている、と」

「思った通りだ」

讓治は格好つけたように立ち上がると、窓際に立つ。

「この事件の犯人はおそらく遠藤浩一の妻だ」

「ど、どうしてそう言い切れるんですか？」

「説明しよう！」

ぱっと目を輝かせて振り返ると、ホワイトボードを引っ張り、何かを書き始める。

「まず一人目の新田康が行った住宅ローン。まずはこれが始まりだ。この8000万の金額と建築費用の乖離。そして常総銀行は三菱銀行の系列だ。大槻君。これは目的外融資だよ」

「も、目的外融資？」

またしても聞き慣れない単語が出てきて慌てる香織。

目的外融資とは、名目とは違うことに対して融資をすることを言う。この場合、8000万の融資金のうち、3200万は名目通り住宅会社に支払われるが、残りの4800万は手元に残る。

「おそらくその残りの金額を事業資金か何かに回したのだろう。だが、五年前のサブプライムショックで急激に経営は悪化。それまでは住宅ローン名目の融資金でなんとかなったのかもしれないが、所詮は借り物だ。徐々に返済も滞り始める。そこで頼ったのがわかば中小企業振興財団だ。銀行はもう貸してくれんだろうからな。そしてこの選択は最悪だ」

「ど、どうしてですか？」

香織の問いに譲治はホワイトボードに書き込んでいた水性マーカーを置くと答える。

「わかば中小企業振興財団の会長、杉田徹は――詐欺師だ」

「え……」

「あるついでそういう情報も入ってくるんだが、その財団は最近活躍中の融資詐欺グループだよ。大胆にも、前の仕事から名前も変えずに同じことをやっているようだな」

香織は言葉を失う。

「手口はおそらくこうだ。わかば中小企業振興財団に出資をして頂ければ十倍までの金額を融資できます、と言われる。是が非でも融資が欲しいカモはこの謳い文句を信用する。少し金を渡して十倍の融資を受けられるなら、と金を用意する。おそらくこの金が三菱銀行の二千万だ。2000万払って20億の融資が受けられるなら、とカモはこの金を振り込む。だが、いつまで経っても融資してくれない。不審に思って事務所を訪ねるが、既に手遅れ。わかば中小企業振興財団は事務所ごと消えている」

よくある出資金詐欺である。

「な、なるほど。それなら杉田徹が殺害された動機になります！ お詳しいですね！ さすが博士！」

「いや。この漫画に書いてあった」

カクンと首を下げる香織。譲治の手には、新クロ○ギとタイトルが振ってある漫画本が握られていた。

「ともかく、遠藤浩一の転落はこういう筋書きだろう。これならば杉田の殺害動機も説明がつく」

「はい！ なんだかこの事件、見えてきたような気がします！ ありがとうございます！ 博士！ さっそく署に戻ってこのことを知らせ、遠藤夫人の捜索をします！」

香織は満面の笑みでそう言うと、水を得た魚のように元気に研究所を後にした。

「……やれやれ。彼女はこの事件の本質にはまだ気づいていないか」

「そのようですね」

「この事件の背景はもっと悪意で満ちている。でなければこのような殺し方はしまい。さて、木春。すぐにアレを用意して欲しい。あの殺害方法は……私の推論ではパイロキネシスとは違う、異質なものだ。このまま無策で犯人と対面すれば――」

譲治はブラインドに指を掛け、その隙間から元気に走り去って行く女刑事を見下ろすと、静かに告げた。

「――彼女は死ぬ」

署に戻った香織は、大急ぎで捜査一課のオフィスに入る。

「戻りました！」

「おう。お疲れ」

「大槻。さっきの電話で何か分かったのか？」

既に緒方警部補の部下が集まっていた。健介も既に戻っている。

「警部補。この事件、おそらく犯人は遠藤浩一の妻、遠藤美夏子です」

緒方の顔つきが険しくなる。

「根拠は？」

問われた香織は先ほど譲治に聞いた内容を説明する。

「なるほど。確かに杉田が詐欺師であることは俺も調べてきたし、俺もその推測に異論は無い。だがな、大槻。お前、大事なことを見落としてないか？」

「え？」

香織は首を傾げる。

「その説明だと、銀行員である新田と美樹本を殺害する動機にはならない。違うか？」

「……あ」

香織は手で口を押さえる。

杉田徹が詐欺師で、その詐欺により金を騙し取られたため、遠藤浩一は自殺。その復讐と考えれば確かに杉田徹の殺害動機の説明にはなる。

だが、新田と美樹本は銀行の融資を担当しただけだ。殺されるような理由はない。

「あの……えっと……それは……」

しどろもどろに説明しようとする香織の頭を緒方が軽く叩く。

「だがまあ、実際に遠藤浩一は三菱銀行の窓口で暴れているし、遠藤夫人は重要参考人だ。お前の推理はいい線を行っている。殺害動機が死んだ遠藤浩一の復讐だと考えると、次に狙いそうな人間を探せばいい。大槻、何かあるか？」

大槻はこれまで見てきたことを思い出す。

「あ」

「何か思い当たるか？」

「遠藤部品が倒産した原因の一つになった大手家電メーカーの受注の停止。この関係者というのはどうでしょう？」

「なるほど。逆恨みしてもおかしくは無い。誰か分かるか？」

「はい。資材部の猪川俊二という人物が担当者です。彼とのメールのやり取りを印刷して綴じてあるファイルが遠藤浩一の机の上に置いてありました。遠藤夫人が読んだと考えると……」

受注停止の命令は彼本人の意思ではないのだろうが、結果的に遠藤浩一を追い詰め、詐欺に掛かってしまう遠因となったのには違いない。

遠藤夫人もそのやり取りのメールを見たのだとすれば、猪川俊二が狙われる可能性は高い。

「よし！ 大槻は俺と来い！ 江原、お前は銀行員二人の殺害動機だ。遠藤浩一が銀行に怒鳴り込んでいるということは、何かトラブルがあったはずだ。そちらを洗え」

「「はい！」」

大手家電メーカーである常盤《ときわ》製作所の鈴川事業所は鈴川駅から車で10分程の所にある。ここは主に洗濯機や掃除機等の生活家電の設計・製作を行っている事業所だ。その生産台数は月に1000台前後。ねじ一本でも受注が来れば、月に千個以上の大口受注となる。

だが、その受注を切られた中小企業は大きなダメージを受ける。それだけで倒産もしかねない。

「だが、大手もこの不況には痛手を受けざるを得んな。誰が悪いというわけでもないんだがなあ……。さて、定時は過ぎてるが、残業でもやっててくれればいいが」

常盤製作所、鈴川事業所の近くに車を停車し、正門にいる守衛の所へ行く。

「何かご用ですか？」

守衛の一人がガラス戸を叩く緒方に気づき、近寄る。

「警察のものですが」



警察手帳を見た守衛の顔色が変わる。

「この資材部に猪川俊二さんという方はいますか？」

「ええ。いますよ。まだ帰ってないんじゃないかな」

「どちらの建物で？」

「ここを真っ直ぐ進んだところの建物ですよ。しかし一日に二度も尋ねられるなんて。不思議なこともあるものです」

緒方はその言葉に顔をしかめる。

「二度？ どういうことですか？」

「いえね、ついさっき子連れ的女性が猪川さんを訪ねてきたんですよ。家族かな、と思って猪川さんと呼んだんですよ。まあ、家族じゃなくて友人みたいでしたが、そのまま資材部の事務室まで連れて行きました」

「大槻！」

「はい！」

緒方は血相を変えて香織を呼ぶと走り出す。香織もそれに着いて行く。

今の守衛の話が本当なら、その女性はおそらく遠藤美夏子だ。まだ彼女に逮捕状は出されていないし、指名手配もされていない。

当然、ニュースでも名前は出ないため、猪川は彼女が連続殺人を繰り返していることも知らない。まさか平日の会社内で殺人を犯すとも思えないが、今の美夏子に常識は通用しない。

このままでは猪川は殺される。

緒方と香織は資材部のある建物に全力疾走した。

猪川俊二はまだ若い資材部の部品調達担当者である。大手家電メーカーといえども、全ての部品を自社で製作しているわけではない。既存のメーカーが作っている部品や、外注に作らせた方が安く入手できる可能性がある。

猪川の仕事も、外部からいかに安く部品を入手するか、という仕事の主である。特に不景気なこのご時世、どこも金がない。高く売りたいメーカーばかりで、頭を抱える毎日だ。

そんな忙しい猪川に客が尋ねてきたという連絡を受けたのはつい先程のことだ。

正門まで行って見ると、見覚えのある人物が立っている。

遠藤部品の社長夫人、遠藤美夏子とそのご令嬢だ。

元得意先の家族が尋ねてきたというのに、このまま帰すわけにもいかず、猪川は資材部にある応接室の一室に美夏子を通した。

「ご主人のことと……御社のことは大変申し訳なく思っております」

猪川は美夏子にコーヒー、美佳にオレンジジュースを出すと、開口一番そう言った。

「私も上司には受注を止めないようにとお願いはしたのですが……。当社としても製造コストの削減に躍起になっているところでして……。遠藤部品さんではなく、中国のメーカーから部品を仕入れることに決定してしまっただけです」

美夏子はその説明を黙って聞く。

「大変申し訳ありません」

猪川は深々と頭を下げる。

何か文句を言いに来たのは目に見えている。遠藤部品が倒産した原因は、常盤製作所からの発注がなくなったことも原因の一つだ。

そのことに関して、猪川は申し訳なく思う気持ちもあるが、上からの命令ではそうするしかない。

逆恨みされても困る。だが、会社で喚かれたり騒がれたりしても困る。頭を下げて帰ってくれるならそれでいい。

「猪川さん」

頭を下げている猪川をじっと見ていた美夏子が、不意に猪川に声を掛ける。

「私は別にあなたを責めに来たわけではありません」

その言葉に猪川は頭を上げ、美夏子を見る。そこには、妖艶に笑う女の顔と無表情な少女の顔があった。

そして美夏子は笑いながら告げる。

「私は、あなたを殺しに来たんです」

「え？」

猪川は間の抜けた声を上げると同時に、右手に奇妙な熱を感じる。熱を発する物など触っていないにも関わらず。

「え？ え？ え？」

猪川が見ている間に、右手の甲はまるで火傷でもしたかのように赤くなり、熱は徐々に痛みが変わる。

「あっ！？ ああ！？」

何が起きたのか分からず、猪川は右手を振り回し、できの悪いダンスのように応接室内を動き回る。

「ひいああああああああ！」

そして、徐々にその得体の知れない熱は猪川の全身を冒し始める。

何をされているのか、自分がどんな状態なのか分からない。

ただ一つ言えるのは、この状態がこのまま続けば、自分は死ぬということだ。

「た、助けて！ 助けて！」

猪川は熱に犯されながらも応接室の扉を開け、資材部の部屋へと飛び出し、床に倒れてのたうち回る。。

数人の社員が猪川の様子に気づき、立ち上がるが、何が起きたのか全く分からず、呆然となる。

その背後には、猪川を追いかけてきた美夏子が、床を這いつくばる猪川を笑いながら見下ろしている。

「あなたも夫を殺した人間の一人。だから殺します。恨むなら、夫の会社への受注を切ったこの会社を恨んで下さい」

美夏子がそう言った瞬間――

「遠藤美夏子！」

資材部内に怒号が響き渡る。

「警察だ！ 動くな！」

そう言って警察手帳を開いたのは、大柄のいかつい男だった。

香織は我が目を疑った。

猪川の状態が、例の三件の焼死体と同じ状態になっている。真っ赤に焼けただけれた皮膚が全く同じなのだ。

しかし、火の気は全く無い。煙もない。譲治の言う通り、超能力でも使わなければ決して不可能だ。

「遠藤美夏子！ 両手を挙げて背中を向ける」

緒方警部補も何らかの凶悪な凶器を持っていると判断し、即座に銃を抜いて警告する。

だが、美夏子は応じず、静かに緒方を睨むだけだ。

「傷害……いや、殺人未遂の現行犯で逮捕する。話は署で聞こう。抵抗すれば……」

その先は美夏子も分かっているはずだ。

警察官が銃を抜き、発砲することはほとんどないが、周囲の、猪川の人命のために美夏子を撃つ必要があると判断されれば、警察官とて撃つ。そして、緒方はその覚悟を持っている警察官だ。

「なぜ銃を向けるんですか？ 私は丸腰ですよ？」

「何？」

「凶器は何一つありません。何も持っていない、無抵抗な人間に銃を向けるんですか？ お巡りさんが」

「……猪川に何をした？」

「何も。応接室で夫が生前お世話になりましたと挨拶をしたら、突然苦しみ出しました。救急車を呼ぼうとしたところ  
です。銃を下ろして下さい」

「……ちっ」

知恵が働く女だと緒方は思った。

ここで焦ってボ口を出してくれれば、そのまま連行もできたのだが、目の前の女は緒方の想像以上にしたたかだ。

美夏子が犯人だという決定的な証拠もなく、美夏子本人にそう言われれば、緒方は引き下がらざるを得ない。

とうの猪川も混乱して何が起きたのかも分かっていない。

いや、それ以前に重傷だ。早く処置をしなければ死ぬ。

「大槻、救急車を呼べ」

「は、はい！」

香織は携帯電話を取り出すと、救急車を呼ぶ。

「では、私はこれで失礼します。行きましょう。佳奈」

いつの間に現れたのか、美夏子の足下には5歳程の少女が無表情で立っていた。美夏子は佳奈と呼ばれた少女の手を握ると、非常口に向かって歩き出す。

「待て！ お前には聞きたいことがある！ 署まで来てもらう！」

「任意同行ですか？ 拒否します」

「お前は他の三件の殺人事件の容疑者でもある！ 一緒に来てもらうぞ！」

「.....」

美夏子は振り返ると、緒方を睨む。

「——っ！ 警部補！」

その瞬間、香織が緒方に体当たりをし、床に倒す。同時に、緒方の背後にあったパソコンのディスプレイが奇怪な音を立てて停止する。

「ほう。面白い能力だな」

緒方と香織が呆然とそのディスプレイと見ていると、香織達の背後に白衣の男女二人が立っていた。

「じょ、譲治博士.....？ どうしてここに？」

「やあ。大槻刑事。悪いが君を尾行させて貰ったよ。面白い事件をこの目で見たくなってね。守衛には科捜研から来たと言ったらすんなり通れた」

「な、なんだ？」

落ち着きを取り戻した緒方は、立ち上がると譲治を見る。

黒いストレートヘアをなびかせて、白衣のポケットに手を突っ込むと、悠々と美夏子に向かって歩く。。

美夏子は譲治をまるで射殺さんばかりの目で睨んでいた。

「その能力で三人を殺したのかね？」

「.....」

美夏子は答えない。

「今の壊れたディスプレイで君の能力の正体がはっきりと分かったよ」

「！」

美夏子は歯を剥き出しにするほど唇を歪める。

その瞬間、隣にいた木春が、譲治の前に出て、手に持った何かを目の前に広げる。途端に放電したかのような音が響く。

「美佳！」

美夏子はその混乱に乗じて美佳を抱きかかえると、非常口に向かって走る。

「ま、待ちなさい！」

香織は美夏子を追いかけようと走り出すが、木春が腕を掴んで止める。

「こ、木春さん！ 何を！」

「行けば殺されます。我々の話を聞いて下さい」

「.....」

香織は相変わらず無表情だが、腕に力を込める木春に何かを感じ、追いかけるのをやめる。

「やれやれ。導電性のネットが一発で焼けてしまった。極めて強力な能力を持っているな」

そう言いながら譲治は先程木春が広げた物をつまみ上げる。

それは網だった。メッシュ状に編んだ、目の細かい網だ。所々が焦げ、穴が開いている。

「おい。大槻」

「警部補、無事ですか？」

「ああ。お前のおかげでな。この二人は？」

「捜査協力者です。何かの博士号を持っているとか.....」

「剣譲治という。よろしく」

譲治はそう言うと、焦げたネットを丸める。

「.....まあいい。大槻、この二人に話を聞いておけ。俺は救急車まで猪川を運ぶ。おら！ ぼーっとしている奴！ 手を貸せ！」

緒方は、何が起きたのか全く分からず呆然とする資材部の人間に声を掛け、重傷の猪川を担架に乗せて出て行った。

残された香織は譲治に話し掛ける。

「あの、博士。さっきのはやっぱり超能力なんですか？」

「うむ。紛れもなく超能力だ。それもかなり珍しい」  
譲治は嬉しそうに笑いながら焦げたネットを眺める。

「どんな能力なんですか？」

「.....信じるのかね？　こんな話を」

譲治は訝しげに香織の方を見る。当然だ。いきなり超能力だ、などと断言されても、はいそうですかと受け入れられる人間は少ない。

だが、香織は譲治をまっすぐ見て頷く。

「超能力で逮捕はできませんが、あんな危険な人物を野放しにもできません。教えて下さい」

「.....いいだろう。だが、情報料は頂く」

「お、お金ですか？」

「そのような物はいらん。私は金は余っているのな。私が欲しいのは.....君だ」

「え.....」

香織は自分の身体を抱え込むようにして一歩引く。

「そ、そんな.....。こ、困ります。は、初めては好きな人にとって決めていますし.....」

「うむ。マニュアル通りの勘違いありがとう」

「博士は今作っている同人ゲームの声優を欲しています。私が声色を変えてのリリースもそろそろマンネリ化して売り上げが落ちていますし」

木春が無表情にそうフォローする。

「あ、ああ.....そうなんですか。分かりました！　下手かもしれませんががんばります！」

「よし。では交渉成立だ。できれば時間がある限り毎日来てくれ。かなりのボリュームなのな」

「はい！」

香織は力強く頷いた。

だが、この約束のちほど香織に悲劇をもたらすとは、本人は全く分かっていなかった。

捜査一課からの応援と鑑識が駆け付け、現場検証が終わった頃には既に深夜になっていた。

香織は緒方と一緒に、現場近くの駐車場に停めた車の中でサンドイッチをかじっていた。

「超能力.....ねえ。そいつぁ起訴の材料にはならんなぁ」

そうぼやきながら緒方はコーヒーを一口飲む。

「緒方警部補は.....前も思いましたが、頭ごなしに否定はしないんですね」

「.....否定はしたいさ。超能力じゃあ逮捕状も出せないからな。なんらかの凶器を用いた傷害罪の現行犯で引っ張るしかない。.....猪川に対する殺人未遂や三件の殺しの立件ができるかどうかはわからんがな」

緒方はそうぼやくと、サンドイッチを包んでいたビニールをゴミ箱に捨て、ハンドルを握る。

「とりあえず、捜査に当たっている捜査員と所轄には、凶悪な凶器を所持している可能性があるから近づくな、連絡しろとは言っているが」

「.....あの人、次はどう動くんでしょうか」

「猪川殺しが失敗に終わったからな。猪川を殺しに来る可能性は高い。そっちは江原が見張っている。徐々に身動きは取れなくなってきているはずだ。それよりも」

緒方は後ろの後部座席をルームミラーで見て溜め息をつく。

「なんでこの二人は当然のように後ろに乗っている？」

「こんな面白いことに首を突っ込まずにはいられんよ」

後部座席では足を組んで偉そうに座る譲治と手を膝の上に置いてじっと座っている木春がいた。

「あ、あの、彼らの知識はこの捜査には必要だと思って.....」

取り繕うように香織が説明する。

香織は一通り譲治の話聞いた後、もう帰宅していいと言ったのだが、面白そうだからと言って頑として帰らない二人を仕方なく同行させることにした。

実際、遠藤美香子の能力を最も理解しているのは彼であり、事件の根本に気づいたのも彼だ。

彼の知識は捜査を有利に進める。

「――っと」

緒方は音が鳴り出した携帯電話を取り出すと、電話に出る。

「江原か？ どうした？」

『警部補！ たった今、遠藤宅を見張っていた所轄から連絡が！ 遠藤美香子が現れたそうです！』

「何！？」

緒方はそれを聞くや否や、エンジンを掛けると、電話をしながら発進する。

「すぐに行く！ 江原、お前の方が現場に近い！ 行って所轄の警官の無事を確認しろ！ 絶対にあの女には近づくな！」

『分かりました！』

香織はその様子で大体の事情を察する。

「遠藤美香子が自宅に現れた。奴め、どういうつもりだ」

「……見張られているのは分かって戻ったのだとすると、何か大切な物を取りに行ったか」

「あるいは諦めて娘と心中でもする気か……。どっちにしろ、奴を止める！ 大槻、いいな？」

「はい」

香織は唇をきつく結んで頷いた。

遠藤宅の近くにきた緒方と香織は、車を乗り捨て、先に到着している江原と合流する。

江原は、倒れている制服警官を抱き起こしていた所だった。

全身、赤くただれている。

襲われたのだ。

「まだ息があります！」

「救急車を待ってはいられん！ 江原、病院にこのまま運ぶぞ！」

「分かりました！ って、犯人は！？ 拳銃を奪ってますよ！？」

江原は驚いて緒方を見る。

「心配いらん。大槻一人で十分だ。そうだな。大槻」

「はい。遠藤美香子を止めます」

香織はそう険しい顔で言うと、眼鏡を外し、遠藤部品の工場の方へ歩いて行く。譲治と木春も当然のように香織についていく。

「あんな凶悪な奴に一人で！？ 無茶ですよ！ せめて俺が！ っていうか、あの二人は誰ですか！？」

混乱する江原を諭すように緒方は言う。

「落ち着け江原。いいんだ。あいつがなぜ捜査一課にあのドジっぷりで配属になったか知ってるか？」

「え？ いえ、知りません」

「俺が引っこ抜いたんだよ。上に無理言ってな」

緒方は制服警官を担ぎ上げると香織が入って行った入り口を見て言った。

「あいつはドンパチ担当なのさ。俺とお前じゃむしろ邪魔だ」

その言葉に江原は言葉を失った。

遠藤部品の工場内は暗闇で満たされていた。

窓から入ってくるのは月明かりと街灯のわずかな光のみ。

数メートル先も見えない。

「遠藤美香子さん。いるのは分かっています。貴女は……私を誘ったんじゃないんですか？」

「そうよ」

暗闇から声が聞こえる。

「貴女達に用があったの。逃げるにしろ、隠れるにしろ、貴女達を殺さない限り私達は逃げられない。そんな気がしたから」

「当然です。貴女のような人は野放しにできません」

香織はゆっくりと暗闇を歩く。

そこそこ広めのスペースに旋盤やフライス盤などの工作機械が数台並んでおり、全盛期はそれなりの従業員と作業量があったことを伺わせる。

売却した工作機械があったアンカーの跡も残っており、徐々に衰退していったことがここからも分かる。

「遠藤美香子さん。大体の事情は察しました。ご主人は.....銀行と詐欺師、両方に騙されたんですね？」

美夏子は答えない。だが、香織は続ける。

「杉田徹の仲間が自供しました。三菱銀行の美樹本とは、グルだった。そして美樹本と最初に貴女が殺した新田康は、かつて上司と部下の間柄。そこから博士が導き出してくれました」

「それほど複雑なことではない。すぐに分かった」

譲治は落ち着いた口調で事件の真相を語る。。

「最初に事業資金の融資を要請した美樹本に、遠藤浩一は新田康を紹介され、新田は住宅ローンの名目で8000万円を融資する。そのうち3200万円を住宅に実際に使い、残りを事業資金に回す。いわゆる目的外融資だな。だが、返済さえできていればそれで問題はなかった。ところが、4年前のサブプライムショックで経営は悪化。再び美樹本に相談に行き、そこで紹介されたのが、わかば中小企業振興財団の杉田徹。しかし、杉田は最初に出資金が用意できなければ融資はできないと言い、美樹本に相談しろと言う。そして、美樹本は家を担保に2000万円を貸し出す。遠藤浩一はそれを持って杉田の所へ行き、2000万円を杉田に渡す」

そうして杉田が融資をせずに姿を消せば、借金だらけの被害者ができあがる。

「.....それにより被害者が自殺でもしてくれるなら団信により常総銀行はローンの分の金を受け取れる。三菱銀行は担保の家を差し押さえられる。詐欺師は2000万円の儲けを得られる。銀行も詐欺師にもおいしいところばかりだ。銀行は業績にも繋がり、契約を取れた新田と美樹本は評価もされる。被害者以外は全員ハッピー万々歳。むしろ被害者には死んでもらった方が好都合。誰が書いたかは知らないが、反吐が出るほど見事な遠藤浩一破滅のシナリオだな。これが三人を殺した動機だろう？ 遠藤美香子」

銀行と詐欺師が共謀し、カモをはめる。珍しいことではない。だが、見抜くことも難しい。

誰も思わないからだ。銀行が詐欺に荷担するなど。

そうして生まれた悲劇。

それが今回の事件の発端であり真相だ。

「そうよ。その通りよ。あの時、新田に団信のことを聞いた時、全て分かったわ。夫は詐欺師共に騙された。そして美樹本の携帯には杉田の番号がしっかり登録されていたわ」

「私も耳を疑いました。まさか銀行が騙すなんて。でも、仲間が裏を取った結果、事実だと分かりました。遠藤美香子さん、貴女の怒りはもっともです。私だって頭にきています」

香織は暗闇の中、歩をゆっくりと歩を進める。

「ですが、貴女のやっていることを認めるわけにはいきません。貴女がやっているのは、殺人です。遠藤美香子さん。貴女を殺人の容疑で連行します」

「やってみなさいよ！」

叫び声と共に何かが動く気配がした。

遠藤美香子が工作機械の陰から突如躍り出て拳銃を香織に突き付けたのだ。

暗闇からの奇襲。しかも至近距離での銃撃。必殺の状況である。

美夏子は香織がいる方向に向けて引き金を引く。この距離でこのタイミングならば、身体のだこかに当たりはする。素人の美夏子でも銃の使い方くらいはさんざんドラマで見ている。

銃口からマズルフラッシュの光と共に弾丸が発射される。

「!？」

だが、マズルフラッシュの光の中に見えるべき姿が無かった。

そして、気づいた時には香織に拳銃を持つ手を掴まれていた。

「四方投げ」

そのまま後方に転倒する美夏子。

何をされたのか全く分からない。

「ほう。柔術かね」

感心したように譲治が頷く。



柔術。日本古来の武術の一つで、柔道の前身になった古式武術だ。武器を持つ相手を制することを目的に発達した、実戦武術だ。

四方投げとはその柔術の一般的な技の一つで、相手の手を取り、捻りながら持ち上げることでバランスを崩させ、後方に倒す技だ。

見た目からは想像もつかない香織の技のキレに、美夏子は自分が何をされ、どういう状態にされたのか理解できない。ようやく気づいた頃には、床に組み伏せられ、銃を奪われていた。

「そ、そんな……。あのタイミングで避けるなんて！」

「君は気づいていたのではないのかね？」

入り口付近にいる譲治が暗闇に向かって問い掛ける。

「気づいたからこそ抹殺しようとしたのでは？」

「普通じゃ無いってことだけよ！ 銃弾を避けるなんて……」

「なるほど。どういう能力かまでは把握できなかったのか。ふむ。能力者同士は何らかを感じ取るが、詳細までは分からないということか。なら、教えてやろう。彼女の能力は限定的な未来予知だ」

「頑張っても三秒先まで、ですが」

「！」

愕然となる美夏子。三秒先までの未来を視認する未来予知能力。それならば、美夏子が銃撃してくることも三秒前に気づく。

格闘技を実戦レベルで使いこなせる人間にとって、三秒先など勝負がついていてもおかしくはない時間だ。

香織は美夏子の銃撃を悠々とかわし、反撃するのに最良の位置を取ったのだ。

「香織君。彼女には常に地面を見せたまえ。おそらく彼女の能力は視界の範囲内のみだ」

言われた香織は、美香子の頭を掴み、視界に入らないように押さえる。

「くっ……」

「君の能力はほぼ把握している。その効果範囲も含めて。君の能力……それは」

譲治はゆっくりと近づきながら得意気に美香子の能力の正体を言い放った。

「極めて高出力かつ指向性を持ったマイクロ波だ」

「……」

美香子は答えない。その沈黙が肯定を表している。

「香織君に写真を見せられた時にすぐに分かった。赤くただれた皮膚。破裂した眼球。内臓や脳に及ぶⅢ度の熱傷。そして破損した電子機器。全て強力なマイクロ波に晒された結果だ」

マイクロ波とは比較的波長の短い電磁波のことである。比較的短とはいえ、その範囲は広いが、譲治が言っているの波長12.2cm、周波数が2.45GHz付近の電磁波のことだ。

その周波数のマイクロ波は非常に一般的な家電製品に使われている。

電子レンジである。

電子レンジはこの周波数帯のマイクロ波を加熱物に照射し、水分子を振動・加熱する。これを人間に照射すればどうなるか。

人間の身体は水の塊と言っても過言ではない。

強力なマイクロ波を照射されれば、体液が急激に沸騰し、熱傷とともに毛細血管が破裂。皮膚から体液が噴き出す。当然、内部がほぼ水でできた眼球は真っ先に沸騰して破裂する。さらにマイクロ波は遮る物が無い場合、物体の内部にまで到達し、内臓に重度の熱傷を引き起こし、電子機器は金属が放電を起こして焼ける。

これらの特徴は殺された三人と猪川、所轄の警官の状態に共通している。

「マイクロ波をどのように発生させているのかは分からんが、君の能力は極めて危険だ。封じる必要がある」

譲治はそう言うと、香織と向かい合うように立ち、美香子を見下ろす。

窓からわずかに入ってくる光が照らしたその表情は、まるで実験動物《モルモット》を見るような冷たい、感情の込められない表情だった。

実験中の科学者が、冷酷に実験動物の行く末を見つめる顔とは、おそらくこうなのだろう。

「ふ……」

だが、組み敷かれる美香子の口が歪む。笑っているのだ。

「ふふふふ……」

この状況で笑っている美香子に驚き、香織が押さえる手に力を込める。

「貴方達は一つ勘違いをしているわ」

勝ち誇ったように美香子が言う。

「確かに三人を殺したのはその能力よ。マイクロ波だというのも正解。でもね……」

工場内に足音が響く。

小さな、耳を澄まさなければ気づかない程小さな足音だ。

まるで小さな子供が歩いているような。

「私は一言も、その能力が私のものだと言ったことはないわ」

「……！ いかん！ 香織君離れる！」

「佳奈ああああ！」

美香子が叫ぶ。

気づけば、香織の視界には、5歳程の少女が無表情にこちらを睨んでいた。

「！」

そして、咄嗟に美香子を離し、工作機械の陰に隠れる。

次の瞬間、強烈な放電現象が発生する。

香織はようやく気づいた。

なぜ美香子は警官から拳銃を奪ったのか。

なぜ暗闇から能力を行使して香織を襲わなかったのか。

単純な理由だ。

能力を持っていたのは、美香子ではなく娘の佳奈の方だったのだ。

理由は不明だが、美香子は能力を持っていないため、拳銃で香織を襲ったのだ。

「美香子さん！ 貴女は……！ 自分の子供に人殺しをさせていたんですか！」

香織は工作機械の陰から叫ぶ。

マイクロ波は金属に照射された場合、内部の自由電子を加速させ、放電を起こす。だが、大半のマイクロ波は反射、あるいは渦電流となってアースに流れる。

譲治が導電性のネットで防御できたのはこのためだ。

とっさとはいえ、金属体の陰に隠れたのは正解だ。

譲治も工作機械の陰に隠れている。

「美夏子さん！ どうしてこんなことを！ 佳奈ちゃんがしたことは……人殺しなんですよ！」

「佳奈と約束したのよ！ お父さんの仇を取るって！ 佳奈の能力を使って！ 佳奈と一緒に私達を破滅させた奴らを皆殺しにするのよ！」

美夏子は薄ら笑いを浮かべながら叫ぶ。

「そうよ。私達はあいつらに破滅させられた。夫も、家も、仕事も失った。でも……あの男は……新田はそんな私達をどこまでも侮辱した！」



あの日、新田康が尋ねてきたのは、遠藤浩一が事故で死んでから一週間のことだった。

「団信……？」

「ええ。団体信用生命保険です。ご主人はそれに加入しているので、この家のローンはそれでなくなりますよ。それをお伝えしに来ました」

「ど、どういうことですか？」

美夏子は混乱し、新田に聞き返す。隣には佳奈がソファに座っている。難しい話は分からないのか、退屈そうに足をブラブラさせている。

「ですから、ローンは団体信用保険で無くなりますよ。大丈夫です」

「で、でも、そんな制度があるなんて……。じゃあ、夫はまさか自殺……」

「それは私共にも……」

新田は困ったように首を傾げる。

「でも、ご安心下さい。ローンは無くなりますよ。あとは三菱に借りている2000万円を返せば、この家に住み続けられますよ」

「……え？」

美夏子は不思議な言葉を聞いたかのように目を見開く。

「どういう……ことですか？」

「え？ 三菱にこの家を担保に2000万円を借りていらっしゃいますよね？」

「そ、そうですが……」

「ご主人が亡くなってそうそうこんなことを言うのは心が痛いのですが……。もうじきこの家は差し押さえられます」

美夏子は愕然となった。

確かに三菱から借りた2000万円はこの家を担保にしている。しかもその金は詐欺師に奪われてしまった。

夫の保険金は葬式と、知り合いから借りた借金の返済と、従業員達の退職金に消えてしまった。

とても返せない。

それは――夫である浩一が残してくれたこの家を奪われるということだ。

「そんな！ そんな馬鹿な話！」

美夏子は新田の肩を掴む。

「この家が無くなったら、私と佳奈はどうなるの！ 夫が命を懸けて残してくれた家を奪うっていうの！」

「お、奥さん！ 落ち着いて！」

「それに、どうして貴方がそんなことを知っているの！ 貴方は三菱銀行の人間じゃないのに！ なぜ！？ どうして！」

」

美夏子は新田の肩を掴んで激しく揺さぶる。

「あーもううっせー」

突如新田が態度を変えて美夏子の髪の毛を掴み、引っ張ると投げ捨てるように床に倒す。

「あんたはさ、騙されたんだよ」

立ち上がって美夏子を見下ろしながら、冷たくそう言い放った。

「美樹本さんにさ。あの人の考えた計画なんだよ。全部。住宅ローンも、2000万円も。杉田さんも美樹本さんの知り合いだ。あんたの旦那のおかげで俺は銀行の評価が上がった上に美樹本さんから報酬が降りる。感謝しているよ」

「騙……された？」

美夏子は唇を震わせてその単語を反芻する。

「そ。ぜーんぶ計画通りなんだよ。悪く思うなよ？ 騙される方が悪いんだからな」

新田が下卑た笑いを上げる。

「騙……された？ 騙……された。騙……された！」

美夏子は突如立ち上がると、テーブルに置いてあった果物ナイフを取り、新田に斬り掛かる。

「よくも……！ よくも！」

「あぶね！ 冗談じゃねーぞ！ こらあ！」

だが、所詮は女。新田に腕を掴まれ、仰向けに組み敷かれる。

「そう怒んなよ。そんなにこの家に住みたいんだったら俺がなんとかしてやるよ」



美夏子は憎しみに満ちた目で新田を見る。

「ヤラせろよ。週一回くらいでいいからさ。そしたら、俺が美樹本さんに口を聞いて2000万はなんとかしてやるよ。いい話だろ？」

卑しい、下卑た笑いを浮かべながら、新田は美夏子の胸を揉む。

「や、やめ……！」

「せっかくだからよ。佳奈ちゃんにも性教育してやろうぜ。もう少し大きくなったら俺が調教してやるよ。はははははははは！」

新田は笑いながら美夏子の服を破く。

一児の母だが、美夏子はまだ二十代だ。新田よりも若く、器量もいい。新田のような下衆な男の欲望の対象になるのは仕方のないことだ。

「やめて！ やめてえ！」

だが、子供の目の前で凌辱されるなど、絶対にあってはならない。美夏子は足をばたつかせ、必死に抵抗する。

だが、足を絡まされ、両腕も新田の右手に押さえつけられてしまった。

「すぐ気持ちよくしてやるって。楽しもうぜ、奥さん」

そう言って新田は美夏子の顔を舐める。

「いやぁ！ 助けて！ あなたぁ！」

「叫んでも誰も来ねーよ！ あっはははははは——」

新田が叫んだ瞬間、ぶちゅっという汚い音が響いた。

「はれ？」

新田は何が起きたのか分からず、美夏子から手を放すと、自分の顔の前に手をかざす。

美夏子も何が起きたのか分からず、茫然と新田を見る。

「あれ？ なんだ？ 何も見えねえ」

新田は、まるで目隠しでもされたかのように、空中で手を動かし、何かを掴もうとする。

見えていないのだ。

当然である。

さっきの奇妙な音は、新田の眼球が破裂する音だったのだ。

「あれ？ なんだよ！ なんなんだよ！ てめえ！ 何を——」

新田の叫びは途中で途絶える。

そして、次に新田の口から出たのは、悲鳴だった。

「い……ぎいいいいいあああああああああああああああ！」

顔が突如赤く腫れ、ただれ、叫び声を上げてのたうち回る新田。

美夏子は茫然とその様子を見る。

「お母さんにひどいことしないで」

そして、徐々に動かなくなる新田を、じっと見つめていたのは——

「佳奈……？」

一人娘の佳奈だった。

「あの時、新田が死んだ時に佳奈の能力に気付いたわ！ そして、この子と二人で復讐しようって誓ったのよ！ 一緒に、お父さんを嵌めた人間を皆殺しにしようって！ お父さんを助けなかった奴らを全員殺そうって！」

香織はその言葉聞いて、首を振る。

「だからって……。親だからって……。子供に人殺しをさせて！ そんなことが許されると思ってるんですか！」

「この子だって同じ気持ちよ！ この子はあいつらに父親を奪われたのよ！ 仇を取りたいに決まってる！」

「佳奈ちゃんがそう言ったんですか！」

香織は工作機械の陰から怒鳴る。

既に周りは、放電とそれに伴う熱によって火災が発生していた。洗浄用のアルコールに燃え移ったらしく、既に激しく燃えている。

一部木造の工場は、数分と待たずに火が回るだろう。

そうなる前に、この状況をなんとかさせねばならない。

香織は叫んだ。

「佳奈ちゃんが本当にそれを望んでやったんですか！」

「な、何を言っているの……。当然でしょう！ この子と私は一心同体よ！」

「佳奈ちゃんがそうしたいって本当に言ったんですか！」

「あ、当たり前じゃない！」

「佳奈ちゃん！」

香織は工作機械の陰から、身を乗り出し、両手を広げる。

「いかん！ 香織君！ 下がるんだ！」

譲治が叫ぶが、香織は隠れようとせず、真っ直ぐに佳奈を見つめる。

燃え盛る火が、可愛い少女を照らしている。

一方、突然の香織の行動に驚いたのか、佳奈は能力の行使をやめる。

「答えて。佳奈ちゃん。本当に……。本当に人殺しがしたいの？」

「……お母さんが誉めてくれるから」

「そう……。嬉しかったのね。自分の力を誉めてくれて」

佳奈が頷く。

「佳奈！ 何をしているの！ 早く殺しなさい！」

「貴方は黙って！ 私は佳奈ちゃんと話したい！」

香織が一括すると、美夏子はびくりと身体を震わす。

佳奈も、香織と話がしたいのか、まっすぐ見つめている。

「私もね……。貴女と同じ超能力者なの。誰にも言えなかった。佳奈ちゃんも、誰にも言えなかった？」

「……お父さんは知ってた」

「そう。お父さんはなんて？」

「使っちゃダメだよって」

おそらく、父親の遠藤浩一は、娘の能力が危険な物だと気付いていたのだ。

だから、戒めを懸けた。娘が誰かを傷つけないように。

「誰にも言わないで、誰にも使っちゃだめだって。でも、お母さんが泣いてたから……」

「そう。お母さんを助けたかったのね」

佳奈は再びこくりと頷く。

香織は、優しい笑みを浮かべると、ゆっくりと近づく。

「でもね、佳奈ちゃん。人に痛い思いをさせるのは、悪いことなんだよ？ お父さん、言ってなかった？」

「言ってた」

佳奈が頷く。

「でも……お母さんが……」

「佳奈ちゃん。佳奈ちゃんはどうしたいの？ お母さんの言うことを聞きたい？ お父さんの言うことを聞きたい？」

佳奈は口をつぐんで黙り込む。

「佳奈！ 何をしているの！」

美夏子が怒鳴る。だが、佳奈は下を向いたまま、動かない。

「佳奈！ 殺しなさい！ 邪魔する人間は皆殺すの！ そしてどこか遠い所で二人で……。いえ、お父さんと三人で！」

「貴女という人は……。まだ分からないんですか！ 佳奈ちゃんは……。佳奈ちゃんは自分が誰かを苦しめているって、一番分かっているんですよ！ 貴女は理解する能力のない子供に自分の理屈を押しつけて、自分の子供を殺人の道具にしたんです！ 佳奈ちゃんはそのことは望んでいないのに！」

「貴女に何が分かるというの！」

「分かります！」

香織は佳奈の前に達、膝をつく、そっと抱き締める。

「優しい子だっていうことだけは……。私にも分かります」

美夏子は啞然と抱きしめられる我が子を見る。



「か……佳奈」

「お母さん。私、もうこの力使いたくない」

その一言で、衝撃を受けたようによろよると後ろに下がる。

「美夏子さん。貴女はとっくに佳奈ちゃんの気持ちに気づいていたんじゃないんですか？」

「！」

香織の言葉に美夏子は身体を震わせる。

「だから……拳銃を奪って自分で私を殺そうとした。佳奈ちゃんにこれ以上殺させたくなかったから。本当は……こんなこと貴女自身も望んではいなんじゃないんですか？」

「黙りなさい！」

美夏子は唇を震わせて叫ぶ。

「能力者だということにはこの子が気づいていた！ でも何の能力かは分からなかった！ だから、確実に殺せる方法を選んだだけよ！ 佳奈何やってるの！ 殺しなさい！ 殺せえ！」

「……」

佳奈は俯いたまま黙り込む。

それは拒絶だった。

美夏子は佳奈の様子を見て溜め息を付く。

「そう……。なら、勝手にしなさい！」

「お母さん！」

美夏子は、香織と佳奈に背を向けると、工場の奥へと走って行った。

「お母さん！」

「だめ！ 佳奈ちゃん！ 危ない！」

火の手は既に天井まで達している。

「香織君！ すぐにここは崩れるぞ！ 脱出だ！」

香織は譲治に言われ、佳奈を抱き上げると、出口に向かって走る。

「お母さん！ お母さん！」

「佳奈ちゃん！ お母さんは後で助けるから！」

入口まで火の手が回る前にどうにか脱出する。

外には、応援を連れて戻ってきた緒方がちょうど走り寄ってくる所だった。

「大槻！ 無事か！」

「警部補！ 美夏子さんが……美夏子さんがまだ中に！」

「なに！？」

緒方は燃え盛る工場を見上げ、顔を歪める。

「くそ！ 消防隊はまだか！」

「お母さん！」

佳奈が香織の腕の中で暴れる。

「佳奈ちゃん！ お願いだから大人しく――あつ！」

まるで熱いものを触ったかのように、香織は佳奈から手を放す。その一瞬で佳奈は工場の中へ入って行ってしまった。

「佳奈ちゃん！ 佳奈ちゃん！」

「大槻！ 駄目だ！ やめろ！」

「香織君。もう遅い！」

緒方と譲治が二人掛かりで香織を押さえる。

「放して下さい！ 佳奈ちゃんが！ 佳奈ちゃんが！」

香織の叫びも空しく、工場はますます炎に包まれていった。

燃え盛る工場の二階の事務室。そこにある机に手を懸け、美夏子は手に持ったビデオカメラの映像を見ていた。

「ふふ……。この頃が一番幸せだったかな」

美夏子がわざわざここに戻ってきたのは、これを取りに来たためだ。

カメラが趣味だった浩一は、買ったばかりのカメラで娘をずっと取り続け、仕事場でも見たいと言ってカメラを手放さなかった。

ここは、浩一が事務を行っていた部屋、社長室だ。

「ねえ……。あなた。この頃から知ってたんですか？ あの子の能力」

美夏子は遠い目でビデオカメラの小さな液晶に映る夫に問いかける。

「貴方は……使うなと言った。私は使えと言った。初めてね。結婚してから意見が真っ向に分かれたのは。いつも考えることは一緒だったのに。……私は駄目な母親ね」

社長室の気温が上がり始め、床からは煙が立ち始める。

もうじき、ここも燃えるだろう。

愛する夫の残した物、全てを飲み込んで。

美夏子は、ビデオカメラを両手で包むように持つと、涙を流す。

「もう……貴方の元へはいけないけれど……せめてあの子を見守って下さい」

美夏子がそう言った瞬間――

「お母さん！」

小さな身体が飛び込んできた。

小さかったからこそ、火や煙の影響を受けずに済んだのだろう。だが、ところどころ服や髪の毛が焦げている。

「佳奈……。どうして……」

「お母さん。私、やっぱりお母さんと一緒にいる」

「佳奈」

美夏子は佳奈を抱き締める。

「ごめんね……ごめんね、佳奈」

「お母さん。佳奈はずっとお母さんと一緒だよ」

「……そうね。ずっと、一緒よ。お父さんとお母さんと佳奈は、ずっと一緒……」

二人は、燃え盛る炎の中、ビデオカメラの小さな液晶に映る家族の姿をいつまでも眺めていた。

燃え盛る工場を、涙を流した目で見ながら、香織は膝をついた。

「警部補……」

「……なんだ？」

香織は茫然とした表情のまま、隣で険しい顔をした緒方に問いかける。

「今回の事件……。悪いのは誰だったんですか？」

「……」

緒方は眉間の皺をさらに深くして黙り込む。

「騙した銀行と詐欺師ですか？ それとも騙された遠藤さんですか？ それとも……誰も救えなかった私達ですか？」

緒方は香織の隣に膝を付くと、肩に手を掛ける。

「全員、悪物だよ」

そして、呟くように言った。

「騙した方も、騙された方も、殺した方も、殺された方も、助けようとした方も、助けられな 皆、悪もんだよ。事件に正しかったことなんかそもそもねえんだ。皆が皆正しいなら、そもそも事件は起きねえし、警察もいらねえ」

香織は崩れ落ちる工場を見ながら、嗚咽を漏らす。

「だがよ。正しい人間なんざ、この世にはいねえんだ。だから、必要なんだよ。俺達みたいな悪もんがな」

「……はい」

香織は、ようやく到着した消防隊の消火活動をずっと見続けた。

その炎の中から、二人が助かる見込みは無い。

それでも、香織は見続けた。

それしかできることがなかったから。

事件はその後、3件の殺人事件と2件の傷害事件は、なんらかの凶器を持った遠藤美香子の犯行として、被疑者死亡のまま書類送検されて決着がついた。

工場の焼け跡からは遠藤美香子らしき遺体が発見され、歯の治療痕から遠藤美香子と断定。

警察は娘の佳奈の遺体も探したが、発見することはできなかった。

こうして、事件は幕を閉じた。

捜査一課の緒方も、連日の捜査で疲れたのか、今はオフィスでぼんやりとしている。他の捜査員も、増員が掛からない以上はすることがないため、各々雑談をしたり、書類を書いたり、暇を持て余している。

香織は、ずっと椅子に座り、何もせずにただ座っていた。

「大槻」

「はい……？」

覇気のない返事を返す香織。

事件のことがよほどショックだったと思える。

「あのすかした協力者の博士。礼は言ってきたか？」

「あ、いえ。報告書や何やらで全然」

「することが無いなら菓子折りでも持って行け。あの男、今後も必要かもしれん。コネ作っとけ」

「はあ……」

香織はよろよろ立ち上がると、バックを持って出口に向かう。

その途中、二度程机の角に足をぶつけていたが、それはいつものことなので、誰も心配はしなかった。

「大槻、大丈夫っすかね？」

江原が小声で緒方に耳打ちする。

「心配ならお前がなんとかしろ」

「い、いや、俺、女の子とそんなに喋ったことないの」

「だらしない奴だ。まあ、大丈夫だろ。あいつには初めてののでかいヤマだったからな。事件が起きたら無理矢理にでも立ち直らせる」

「緒方さん……。大槻には優しいっすね？」

「ばかやろ」

緒方はふんと鼻を鳴らすと、虫を追い払うように手を振った。

香織はぼんやりとしたままお菓子をいくつか購入し、超常現象研究所に足を運ぶ。

相変わらず研究所は無人のビルの中に目立たず存在していた。

「こんにちは～」

香織は二階の入り口を開ける。

「いらっしゃいませー」

途端に可愛らしい声が聞こえてきた。

「……？」

香織はきょろきょろと周りを見るが、声の主は見当たらない。

「何かご用ですか？」

再度した声の方を向くと、そこには五歳程の少女がワンピースを着て立っていた。

「か……」

香織はその少女を見て絶句した。

「……？」

少女はそんな様子の香織を不思議に思い、首を傾げる。

「佳奈ちゃん！」

その姿は、あの日の炎の中に消えた遠藤佳奈そのものだった。香織は突如叫びながら少女に近づき、いきなり抱き締める。

「生きてたのね！ 良かった！ 良かったあ！」

「あ、あの……」

少女はいきなり抱きついてきた香織に困惑し、声を掛ける。

「カナって誰ですか？」

「え？」

その言葉に香織は身体を離す。

「遠藤……佳奈ちゃん……だよな？」

香織の言葉に少女は首を横に振る。

「私、剣火煉《つるぎかれん》っていいです。譲治おじさんの親戚です」

「え？ え？ そ、そうなの？」

「どうした？ 火煉。お客さんかね？」

騒ぎを聞きつけたのか、譲治と木春が奥から姿を現した。

「は、博士！ こ、この子は？」

「ん？ 私の姪だ。火煉。この人は香織君とって優秀なお巡りさんだ」

「よろしく願います」

礼儀正しくお辞儀をすると、木春の所に駆け寄り、手を繋ぐ。

「で、でも、似すぎですよ？ 佳奈ちゃんに」

「私もそれには驚いているが、偶然だ。彼女はこの春から小学校に上がるんだが、両親が海外に行くことになってね。しばらく面倒をみることになった」

「はぁ……」

香織は納得のいかない顔をしながら頷く。

「ところで大槻刑事。また事件かね？」

「え？ いえ。今日はこの間のお礼に参りました」

香織はそう言うと、バッグから菓子の箱を取り出し、木春に渡す。

「ありがとうございます。お茶をお出ししますので、しばしくつろいで下さい。火煉さん。お手伝い願います」

「はい」

火煉は素直に返事をする、木春について給湯室に入っていった。

「わざわざ菓子を持ってきてくれるとはな」

「あ、えと、今後ともよろしく願います、の意味も込めて」

「……君はもう少し回りくどい言い方を覚えた方がいいかもしれんな」

「……はい」

香織は頷くと、空いた椅子に座る。

「あの……博士」

「ん？」

「超能力を使った事件って……やっぱり迷宮入りになるんですか？」

「ほとんどはそうだ。犯人を追いつめたとしても、超能力では起訴はできん。表沙汰にはならんよ。決してな」

「なら……どうすればいいんでしょうか？」

「ふむ」

譲治は居住まいを正すと、真っ直ぐ香織の眼を見る。

「超能力を使う人間は、大なり小なり、なんらかの不幸を背負う。超能力を得る代わりに、普通を失うということだからな。この世の中では、普通でない人間は大概不幸になる。超能力犯罪の大半は、そうした不幸が積み重なって起きた結果に過ぎない。酷なことを言うが、大槻刑事。事件が起きている時点で、超能力者は終わっている。人としてのな。普通の人間から見れば、超能力事件の犯人など、人間ではない。災害と同じさ。災害に対していちいち裁判を起こしたりはすまい？」

超能力という超常の存在は、一般常識の外にある。そこに一般常識でできた刑法や民法は適用されない。

猛獣や局地災害と同じなのだ。普通ではない能力で人を殺した場合、その人間はもう人間であることをやめることを選択したということだ。

人をやめるということは、もう人としての常識は通用しない。適用もされない。

たとえ死んでも、公にされることもない。

逃げて射殺された猛獣のように、結果だけは公にされるが、真相は誰にも分からない。

一部の人間を除いて。

「それでも、何かできることがあるかもしれません。私はそう思ってこの研究を続けている。いつか、超能力もただの特技程度の認識になると信じてな。大槻刑事。そう気にするな。今回は助けられなかったかもしれませんが、君のような人間は、超能力者《かれら》には必要なのだ。超能力者も人として見ることのできる君がな」

香織は超能力がとてつもなく強力なわけでもなく、かといって普通の人間として優秀なわけでもない。だが、それ故に超能力者であるが故の苦しみと、凡人であるが故の苦しみ、どちらも理解ができる。

手を取ることも差し伸べることもできる。

そういう人間も必要なのだ。

香織は、ようやく本当の笑顔を浮かべ、頷いた。

「さて、報酬の件だが」

「.....なんでしたっけ？」

「もう忘れたのか。情報を提供する代わりに私の製作するゲームに声優として参加するという約束だ。それが私への報酬だったのでは？」

「あ」

香織は今の今まで本気で忘れていたのか、手を叩いて頷いた。

「そういえば、確かに約束しました」

「では、さっそく収録させて貰おう。デバッグの期間を含めると、今月中には全て音声を収録せねばならん。これが台本だ」

香織は台本を受け取ると、中身を見る。

「私は誰の役をやればいいんですか？」

「君にそっくりのドジっ娘眼鏡キャラの `紗英、だ。ヒロインの一人なのでな。それなりのボリュームがある」

香織は「紗英」と書かれているキャラクターの台詞を読む。

「なっ！」

途端に顔を真っ赤にして立ち上がった。

「な、なんですかこの台詞！」

香織は慌てて台本の表紙を見る。

そこには黒い文字で `エロメイドシリーズ3 ご主人様.....すごく.....大きいです.....、とあからさまにR18なタイトルが書いてあった。

「うむ。シリーズが好評なのはいいが、声優が木春一人ではさすがに限界でな。君に参加してもらえたのはまさに僥倖。さあ、さっそく収録だ！」

「む、無理です！ こ、こんなエッチな台詞言えません！ 嫁入り前なのに！」

脱兎の如く逃げ出そうとした香織の前にお茶を汲みに行ったはずの木春が立ちはだかる。

「心配はございません。すぐに慣れます」

そして、がっちりと香織の肩を掴むと、信じられないパワーでずるずると収録装置のあるところへ引きずって連れて行く。

「いやああああ！ 助けて下さいいいい！」

「今年の夏は暑くなりそうだな。ふうーはははははははははは！」

高笑いする譲治の白衣の裾を小さい手が引っ張る。

「おじさん。あのおねえちゃん.....」

「気になるかね？」

火煉はこくりと頷く。

「あのお姉ちゃんはとてもいい人だ。友達になるといい」

火煉が嬉しそうに、照れくさそうに笑うと、暴れる香織の所へ走り寄って行く。

「.....ふむ。記憶は完全に消したつもりだったのだが」

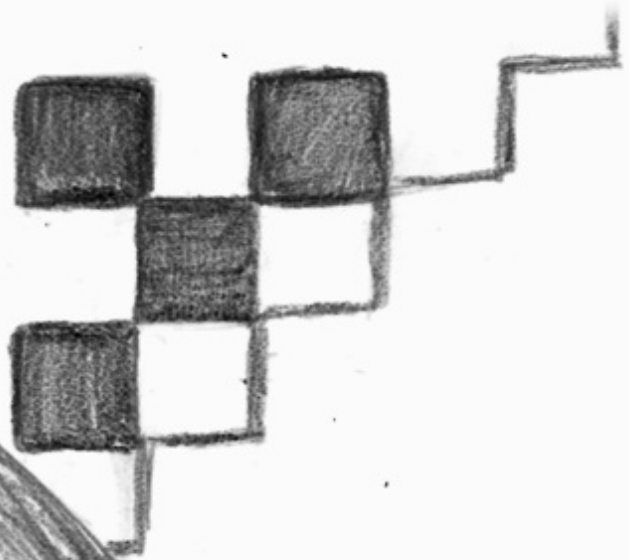
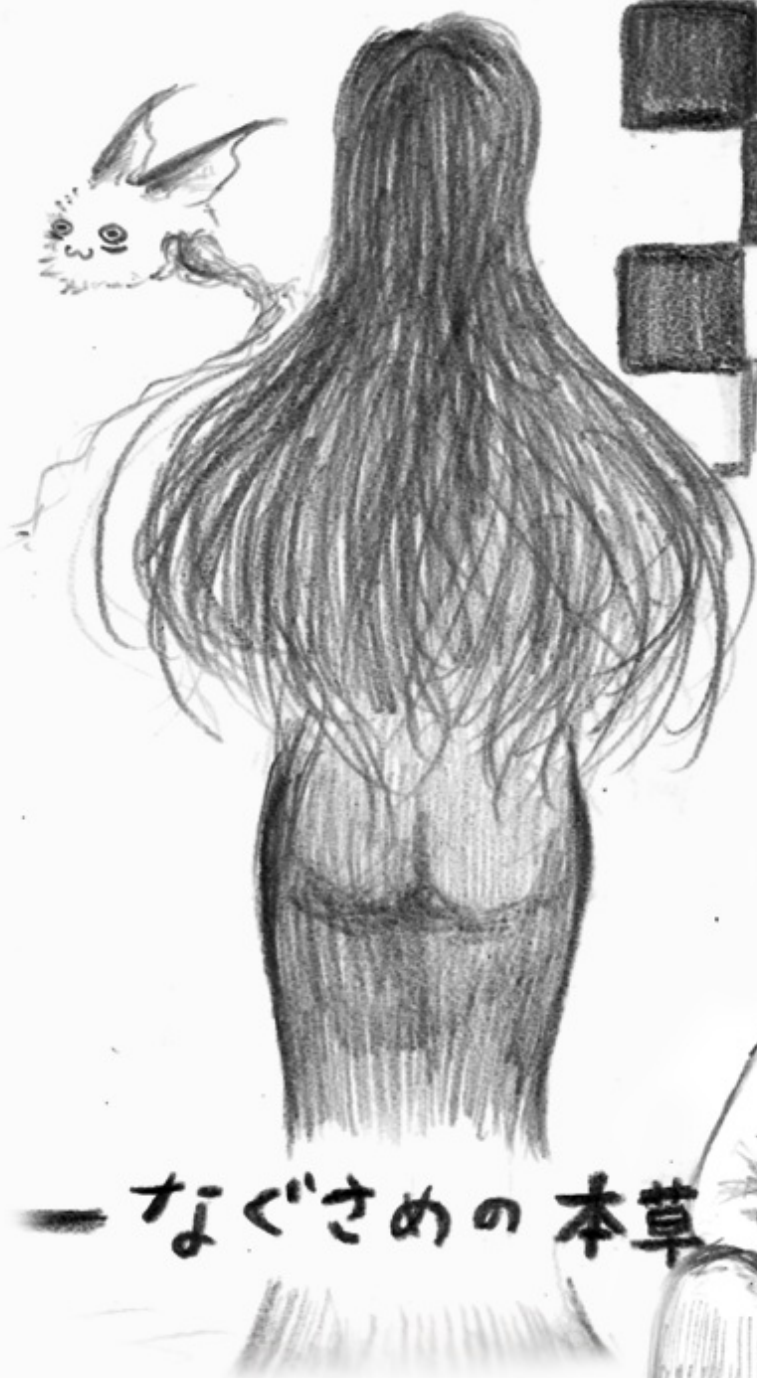
その後ろ姿を眺めながら不思議そうに首を傾げる。

「全く。これだから.....」

そしてにやりと笑いながら、ゆっくりと三人の元へ歩き出す。  
「人間は面白い」







— なぐさめの本草 —



## 一、魔女と少年と、異郷の錬金術師

---

行き過ぎる人が思わず振り返るようなすごい美女が、尻を振りながら、トゥーロン市街を出て薄暗い森の中の、一軒の小店にやって来た。

魔女である。

とはいえこの時代、この地域のこと。

「魔女だ」

などと言われればたちまち町中騒然として、狩られ、火焙り刑に処されること明白なので、魔女はそのような事実は露ほども漏らさない。

イレーヌ。

それがこの女の名である。職業は不詳。著述業兼銀行家だと自称している。

長い黒髪と銀のカチューシャ。

黒のドレスで身体の線を強調するほか、目立った装飾はないが、それでも、むせかえるような色香を放っている。全身からこぼれでる色香が、何よりの装飾だといえた。

ギ。

とドアをきまして中へ入ると、店番をしていた十四、五歳の子供が、

「あっ」

といって、慌てて奥へ引っ込んだ。

イレーヌは、にこりと笑いながら、つづいて出てきた若い店主を見つめて、

「教育がなってないのね、ネストル」

といった。

だがネストル、と呼ばれた店主は、少年を背後に庇いながらそっけなく、

「要件は」

と言うだけだった。

暗い表情である。美しい顔立なだけに、いっそう陰鬱に見える。

「いつもと同じものをくださる？」

「具体的に言ってくれ。覚えていない」

「生命の水、蜂蜜……それから今日は、眠り薬ももらおうかしら。近いうちに私、遠くへ行く予定なの」

「四十五スーだ」

ネストルは背を向けて、棚の引き出しから、いくつかの瓶を取り出し、調合を始めた。

かれは北から来た錬金術師である。医者とか薬師と呼んでも良いかもしれないが、そこまで近代的でない。さまざまな調合薬を売って生活している。

「ユーク。火を」

「あ、はい」

少年があたふたとアルコールランプなどの支度をするが、魔女の視線に怖じたか手をすべらせて、

がちゃん、

とランプを床に落としてしまった。ガラス片が散って、透明な液体が木の床へ広がる。  
イレーヌは、まあ、と言わんばかりの嘲笑を浮かべて、  
「あらあら。やっぱり使えない子ね。ねえネストルー—どうしてこんな子を飼っておくの？　こんな、悪魔の子を」

「……」

ぎゅっと、肩に力を入れてうつむく少年。  
だがネストルはやさしく肩を撫でながら、  
「奥で本を読んでいなさい。私が片づけるから」  
「でも、先生」  
「良いから。ガラスで指でも切ったらどうする」

「はい、わかりました」

ユーク少年は、ちらりとイレーヌを見てから、あたふたと奥へ引っ込んで行く。  
女の子のような子供である。美しい瞳の青がおびえたように震えるので、いっそう可憐に映る。

「憎いほどかわいらしい子。とても悪魔の血を引くとは信じられない」

「……生命の水、眠り薬。蜂蜜はその棚にあるやつを持って行くと良い。頭痛薬は品切れだ」

「あら」

カウンターへ並べられた小瓶を、ひとつひとつ籠へしまいながら、イレーヌはじっと、上目遣いにネストルを見つめる。

「この街ではあなただけね、ネストル。いつまでも私の魔法が効かないのは」

「三十五スーだ」

「それにまだ若いのにあんな悪魔の子を飼うなんて、どういうつもり？　女は嫌いなの」

挑むような視線を送るが、ネストルは無言のまま表情も変えない。

「ねえ、ネストルー—」

金貨銀貨をとりまぜ、カウンターへ置くと、すばやくネストルの手をとって、さらに瞳をのぞき込んだ。

「女は嫌いなの？」

「……離せ。血が濁る」

「ほらやっぱり魔法が効かない。ますますあなたの才能が愛しくなる」

言いながら、するりと、細くしなやかな指がネストルの首にかけられた鎖を引き上げた。

「でもこのネックレスをしている限り、女嫌いになったわけじゃないわね」

「やめろ。触れるな」

イレーヌは、再びふっと笑い、鎖を離すと、

「また来るわ。今度は頭痛薬をお願いね」

濃密な香りを残して、立ち去る。

その背中へ、

「その髪飾り」

と呼びかけた。

「何かしら？」

「そのカチューシャはやめてくれ」

「あら」

振り返ったイレーヌは、わざとらしく指で髪を揺らして見せると、

「気づいてくれたの。うれしい」

「二度と付けないでくれ」

「どうして——せっかく、死んだ奥さまと同じ型のものを探し出したのに」

「……」

「あなたが私のものになるまで、何度でも来るから」

ネストルの沈黙に、イレーヌは満足してうち笑み、そうして店をあとにした。

カチューシャは、ネストルの亡妻がいつもしていたものだった。

ヴァレリ。

死んで、もう五年になる。

ネストルのロケット・ペンダントの中では、彼女がカチューシャを付け、さびしそうに笑っているはずだった——それをあの魔女は再現し、見せつけたのである。

いやな女だ。

しかし、その肖像画の人の面影が、どこか、ユークという少年に浮んでいることまでは、さすがに知らないらしい。

ネストルは黙ったまま、割れたガラス片を片づけ始める。

## 二、追憶と逃避と、悪魔の子

---

1399年から1413年にかけて、ニコラ・フラメルというパリの学者が、  
「二十一葉の冊子」

と呼ばれる錬金術の奥義書を翻訳、出版した。

副題に、

「ユダヤのアブラハムの書。王子にして僧侶、占星術師、哲学者、神の怒りに触れてガリア中を  
さまよう人々の冊子」

と記されているが、作者そのものは「大いに学んだ者」とされているだけで、不明である。

ニコラはこの原書をスペインへの巡礼の途上、入手したとしているが、いずれにしてもこの書  
が世に出たことで西欧の錬金術は飛躍的な進歩を遂げたのであった。

ネストルは――。

むろんそれだけでなく、数多の書を読み込み、さらにニコラの弟子を称する老錬金術師クリス  
トフ・パリジノの薫陶により古今のあらゆる知識を身につけた。

彼は流れ者である。

昔は、今いるトゥールズよりずっと北、パリ北部ボーヴェという街に亡き妻ヴァレリとともに  
住んでいた。

ヴァレリ。

金髪のヴァレリ。

カチューシャのよく似合う、灰色の瞳を持った美しい少女は、師の孫娘だった。

十歳若く、ネストルは、ヴァレリが七歳のころから知っている。初めは、ヴァレリの家庭教師  
、というよりは子守だった。読み書きを教えたのもネストルだし、錬金術の初歩を教えて、師の  
助手に育てたのも彼だった。

成長するに従い、二人は「結婚」など意識しなくても一緒にいるのが当たり前、という関係にな  
っていた。

師のクリストフも、二人の関係に満足していたであろう。ネストルが二十九のとき安らかに死  
んだ。

「今度の実験がうまく行ったら結婚して、パリでお店を開こうか」

師の遺品を片づけ終ったとき、ネストルはそう言った。独立、という響きにいくらか昂奮して  
いた。

「二十一葉の冊子」が世に出て以来、錬金術師を名乗る者は急増していたから、師の名前も商売  
の助けにはならない。一人立ちするには、ネストル自身が何らかの成果を世に示す必要があつた  
。

高名なニコラ・フラメルは、金と銀の精製に成功している。

またイスラムの錬金術師ジーベルは、万物を溶かす液体――王水や硫酸を生み出した。

その他、数多の錬金術師が合金を生み出し、魔法の薬を調合し、生命の神秘を解き明かして  
いる。

ネストルも、うかうかとしていられない。

多少の切迫感と、何より、新妻となるヴァレリの後押しがあって、ネストルは研究の仕上げに没頭、同時にさまざまな技術を磨いて、師が亡くなってから二年後、ようやくひとつの結論を導き出した。

肉体の再活性化。

ネストルの最終目標は「人の不老不死」であり、そのための第一段階として、数百の薬品と特殊な光線——現代でいえば放射線である、を組み合わせることで彼は体組織を若返らせる理論を確立し、その臨床試験を開始、そうして、彼は妻を殺したのであった。

人体実験の失敗。

薬品が効きすぎたか、光線が強すぎたのか。

いずれにしても妻の肉体は無惨にただれ、崩れ、そして死……ネストルは耐えきれず、逃げた。

妻の亡骸を正視できず、ほとんど狂人となってパリ、トロワ、ディジョン、リヨン……と南下して行ったのである。

なぜ南だったのか？

前にヴァレリが、いつかプロヴァンスの日差しを見たいと行っていたから。地中海へ足を浸したいと言っていたから——だがはっきりと、そのことを思っていたわけではない。ただ死場所を求めさまよっていた。

さまようネストルは、決して街には入らない。街には人が大勢いる。妻に似た若い娘もいる。だが彼がサン・シェリ・ダプシェという街の近くへ来たときだった。

「悪魔！」

「悪魔がいたぞ！」

という、人の憎悪を聞いた気がしてふと街の方を振り返った。一瞬、自分のことだと思った。だが声は、森の小道をまっしぐらに駆けてくる少年へ向けられていた。ねずみ色の、ボロ布のような外套の裾を翻し、懸命に駆けてくる。瑕を負ったのか、額や腕から血をほとばしらせていた。

「あっちだ。うちの子の仇を討つんだ」

「悪魔だ、悪魔！」

「今日こそ撲ち殺せ！ 悪魔を殺せ！」

鋤や鍬、包丁などを握って駆けてくる人々のすさまじい表情。口を歪ませ、つり上がった眼に瞋恚の炎。

憎悪と狂気。

その人々が殺意を向ける当の子供は、と見た瞬間、

「ヴァレリ……？」

ネストルは我が眼を疑った。血濡れた少年に亡妻の面影を見たのだ。

「おじさん——助けてっ」

だが何よりネストルを驚かせたのは、抱きついてきた少年の額に白い角が二本、皮膚を突き破るようにして生えていたことであつた。



### 三、逃避と贖罪と、執念の魔女

---

「デモニアク……」

悪魔化している、とネストルは慄然とした。

体組織の変性について研究した間、角の生えた人間についても詳細に調べている。その知見からすれば、この少年の角は、瘤や骨の成長異常などではなく、まさしく「悪魔の力」が顕現したものに違いなかった。

非人間的な力の源。

ネストルの知る限り、この「悪魔の角」を持つ者は、何も無いところへ火をつけたり、途方もなく重い岩を持ち上げたり、不意に人を傷つけるとされ、一般の人間からは忌まれ、普通は殺される。

そんな忌むべき少年に亡き妻の面影を見たことは、ネストルに何か、あの世のヴァレリが一一むろん葬式もしていないから地獄へ墜ちたに決っているが、自分の前へ戻ってきたのではないかと錯覚させた。

「いたぞ、あそこだ」

「殺せ！」

「悪魔の子を許すな」

追いかけてくる人々の凄まじい形相と、自分へしがみつくと見比べてネストルは手を取り、森の奥へと逃げ込んだ。

救わなければ、という思いに駆られたのである。

それは、亡妻に対する贖罪とか追善のためともいえたが、最初はそこまで自覚的でなく、「自分なら救える。この少年の角を封じることができる一一」

咄嗟にそう思えたことが大きかった。研究者としての血が騒いだ。

それから半年かけて。

ネストルは、ユーグ、と名乗った少年とともに森の奥深くへ潜み、悪魔の角を封印することにあらゆる力を注いだ。

彼の理論によれば、ある程度小さくできれば、たとえ感情を昂ぶらせたとしても悪魔の力を押えることができるはずであった。

ただ、生まれつき角が生えていたわけではないというし、外見のせいで虐待を受け続けてきたことを考えれば、すくなくとも外皮から完全に見えなくなる程度にまで圧縮したかった。

それに何より、ヴァレリによく似た美しい顔を取り戻したい一一。

少年の顔を見つめ、瞳を見つめ、肌へ触れるうち、だんだんその思いが強まって来る。

そして当初の困難が過ぎて角が縮小してくれば、顔はいよいよ亡き妻を思わせ、薬草を求めて山野を走り、幾夜も続けて薬液の蒸溜を行い、呪文を唱え、神経をすり減らすような作業を繰り返す中で、自分は今ユーグという少年と対峙しているのか、それとも亡き妻と見つめ合っているのかと、夢うつつの間を漂うような気がしてくるのだ。

ユーグの方も、角が小さくなって行くことを実感するにつけ、ネストルへ感謝と、親愛の情をあからさまに見せる。

端的に言えば、可憐な笑顔。

その笑顔は、今にも朽ち折れ、死を待つだけだったようなネストルへ生きる希望を与えたのであった。

自分はこのために、この少年を救うため生き延びたのではないか。むしろ、ヴァレリがこの地へ来るよう、自分を導いたのではないか――とさえ思うようになる。

あまりに自分勝手な解釈とも言えるが、とにかくそう考えることで、確かにネストルは救われた。

……妻を殺し、現実から逃亡してきた錬金術師と、人間世界の地獄から逃れてきた少年。

互いの救いとなり、依存し合う関係となって、二人はやがてサン・シェリ・ダプシェ郊外の森を脱出。一ヶ月ほど後にはさらに南のトゥールズへ落ち延び、そこで郊外の空き家を借り受け、ささやかな薬品類を商う店を始めた――そういう次第だった。



平穩な生活。

傍らに信頼できる相手、愛情を注ぐ相手のいる生活。

二人ともが欲していて、何事もなければ普通に手に入るはずだった、そういう「普通」が、トゥールズ郊外でようやく見つかったような気がしていた。

だがここに。

五年ほど前のパリ市内においてネストルを見初めた女が、はるばるトゥールズまで足跡をたどり、現れたのである。

パリでは百歳のイレーヌ、と呼ばれていた妖艶な女。

ネストルに定まった人のいることを知ってなお誘惑し、挑みかかった挙句、手ひどく拒絶された、魔女……。

それがヴァレリの死を聞きつけ、今度こそネストルを自分のものにしようと、執念を燃やして追いかけてきたのである。

#### 四、日常と成長と、悪魔の蠢動

---

このごろユーグは、トゥールズの街へよく出かける。

はじめのころは、昔の人間不信というより恐怖があって、なかなか外へ出たがらなかったし、ネストルとともに店の外へ出るにも服を纏んだまま、決して傍を離れようとはしなかった。

それが今は、買物や届物を頼めば張り切って出かけられるまでになったから、ネストルとしては助かるし、自分の力で少年の心をそこまで癒やせたのだと思うにつけ誇らしかった。

もっとも、ネストルももう十四歳になる。

街でも田舎でも、普通は一人前に仕事を始める頃だから、ようやく一人で外出できるようになったぐらいで喜んでいられないが、それでも、街から帰ってきたユーグが息を切らせて頬を染めて、

「野菜、おまけしてもらったんです」

とか、

「帰りに花を摘んできました」

と嬉しそうに報告する姿は何ともいえず可憐で、微笑ましかった。

街で友だちも出来たらしい。

「街頭に出てた貼紙を読んであげました」

とか、

「名前の書き方を教えたらずごく喜んでました」

と自慢するようになった。

そう言うたびに、

「よく出来たね」

と頭を撫でたり、

「あまり人前で知識をひけらかしてはいけないよ」

諭しながら、たとえば裾についた泥を払ったり、蜂蜜ジュースをつくってやったりしたが、そうするにつけネストルの心は確かにあたたかくなった。

ユーグは、注いだ愛情にきちんと応えた。

教えたことはすべて覚えたし、いつか家のことや、薬草の調合の助手なんかもまともにこなせるようになった。そしてそういう純真な瞳が、まっすぐ自分を見つめているのが、ネストルにはこの上もなく幸せなことだと思われた。

「今年の復活祭は、一緒に教会へ行きましょう、先生。人形劇がやるそうですよ」

うららかな陽気が増えてくる三月半ば、ユーグがそんなふうにと誘った。

平穏な日々が送れるようになってからも、ネストルは教会へは行くことができていない。

ヴァレリをあんなふうにした自分が、どうして恩寵を受けられるであろう。仮に教会へ行けば無辺の慈悲を得られるのだとしても、自分が自分を許すことができない以上、どうしても祝福を受けるわけには行かない――そう思って、街へ立ち入ることさえ避けている自分だ。

ネストルは、一瞬、心を揺がせたが、

「教会には、おまえだけで行きなさい。私は仕事があるからね」

と、軽く頭を撫でながら微笑んだ。

けれどユーグのさびしそうな顔を見つめるうち、やっぱりそれではと思い直して、「その前に、久しぶりに二人で薬草摘みに出かけようか」と言った。

そのときの、ユーグの輝かんばかりの顔。

「本当ですか？」

「うん。新しい薬液をつくってみたいし、そろそろ、苺の花やいろいろな春菜が出ているはずだ」

「じゃあ先生、また僕がお弁当をつくりますね。バターはあったかな。卵もゆでて、持って行って良いですか？」

「慌てるんじゃないよ。なにも明日すぐに行くわけじゃないんだから」

「でも――あ、今度も丘向うの小川まで足を伸ばしても良いですか？ 魚はもう冬眠してないですよ。先生、魚がいたら、また捕まえてくれますか？」

途端にそわそわとして、はじけるような笑顔で話し始めたユーグを、ネストルは心から愛おしく感じた。あたかも、誕生日に花を贈ったときのヴァレリの感激ぶりや、結婚後に開くお店を二人で決めている時の亡妻の幸福のようだと思った。そしてそれ以上に、ユーグの笑顔が自分に掛け替えのないものになっていることを確信した。

あれこれ、自分の楽しみを数えながら、興奮を隠そうとしないユーグは、

「そうだ」

とネストルの方を向いて、

「ペリンも誘って良いですか？」

と尋ねた。

それはネストルが初めて聞いた、街の女友達の名であった。

「一緒に行ったらもっと楽しいと思うんです。良いですよ、先生」

咄嗟に――、ネストルは自分の表情が変っていたことに気づいて、驚くと同時に軽い自己嫌悪を覚えた。

嫉妬したのである。

## 五、祭典と困惑と、色情の魔女

---

ネストルは結局、野草摘みには出かかず、ユーグと、トゥールズの町娘ペリンだけで春の小川へ行かせた。

前日の夜、薬液の蒸溜が終らないのと、山羊が風邪気味なのを口実にして、

「私は行けないが、二人で楽しんでくるといい」

と伝えたと、ユーグは二度ほど、

「先生は行かないんですか」

と確かめたが、

「じゃあ、止めますー」

とは言わなかった。

むしろ目を輝かせて、

「それじゃあペリンと二人で、春の野草をいっぱい摘んできますね」

と、いっそう楽しげに翌日の仕度をするのだった。

当日の朝も、普段よりずいぶん早起きしてパンやチーズの仕度をする、表に少女の声が聞こえるなり、

「じゃあ行ってきます！」

と、元気いっぱい飛び出して行った。

ネストルは、顔を見せた少女に軽く会釈したけど、表まで見送る気にはなれなくて、薄暗い調合室から、

「気をつけて行っておいで」

と声をかけるのが精一杯だった。

窓から見れば外は馬鹿みたいに晴れて、すがすがしかった。

それから数日。

復活祭の朝も、やはりネストルは出かけることなく、意気揚々と街へ出かけるユーグの背中を見送った。

ただし、この日は迎えに来る者がいなかったから小屋の外まで来て、森の中をすこし歩いて、

「夜には雨が降りそうだから、早く帰るんだよ」

と、空を見上げて言うと、ユーグは何でもないことのように、

「雨が降ったら、ペリンの家に泊めてもらいます、先生」

と笑ったから、思わず、

「それはいけないー」

叱りつけるように言ってしまった。

驚き、目を丸くするユーグに、ネストルは口走ったことを悔やみながらも、強く、

「あまり人に関わってはいけない、ユーグ。おまえは自分の過去を忘れたのか。悪魔の角のことを忘れたのか。私が封印したとはいえ、完全に無くなったわけではない。いつまた角が生えるかもしれないんだぞ」

「でも……」

ユーグの、哀しそうな、今にも泣き出しそうな顔に、ネストルは激したことに強い自己嫌悪を

抱きつつ、引きつった笑顔で頭を撫でてやると、

「良いよ、おまえのことはこの私が分っているんだ。大丈夫、行ってきなさい。困ったことになったらこの私が助けてあげるから楽しんでおいで」

手を取り、街が見えてくるところまで並んで歩くのだった。

叱られたユーグはあからさまに意気消沈して、森の出口へ来るまでほとんど喋らなかったが、ネストルと別れ、祭のにぎやかさを見せる街へと駆け出すにつれ、うきうきと、昂奮を抑えきれない様子が背中越しにもはっきりと分った。

振り返らない背中。

凝然と見送り、森の小道、一人で陰気な家へと帰り着いたネストルは、自己嫌悪と、如何ともしがたい寂しさ、切なさを覚えて、しばらく何も手につかず、調合室の中を歩き回り、陳列棚を手荒く片づけたり、小屋の裏で過分な薪割りをしたりした。

角の呪いを解いてやったのは、この私ではないか――。

と思うにつけ、何か憤りめいた感情も湧いてくるのだ。

あきらかにユーグは自分を置いて、一人で別の世界へ行こうとしている。

(もはや私は不要だということか。だったら私は何のために、あんなに心血を注いで治療したのだ……)

つまりヴァレリのかわりに今や少年を愛していたのだ。

その愛すべき少年が、読み書きもできないような愚かな町娘に奪われようとしている……。

ネストルは知識人である。

自分の嫉妬を自覚するにつけ、これもユーグの成長だと喜ぶべきなのだとか、彼を自分と亡妻との子供だと見て、親として彼の自立を見守らなくては――と、幾度も自己を戒めようとしたが、できなかった。

どうしても、ユーグが奪われることに耐えられなかった。いつまでも傍にいて欲しいし、ネストル以外の誰にも心を開いて欲しくなかった。

日が暮れる。

と、音もなく雨が降ってきた。静かで、細かな雨。

演劇はまだ終わらないのだろうか。

昔ヴァレリと見た、パリのノートルダムでのキリスト生誕劇――きらびやかで荘厳でさえあった見せ物に較べれば、こんな田舎町の素人劇などたかが知れているではないか。

不快感を押えきれず、ネストルは蜂蜜酒を飲む。アルコールは苦手で、ワインは飲めないが、甘い蜂蜜酒ならすこしはいける。

かあっと胸が熱くなって、二杯ばかり飲めばもう意識がとろんとしてくる。

そのとき、表でドアがきしむ音。

「遅いじゃないか、ユーグ。濡れただろう」

ふらつく足で部屋を出てみれば、

「あら。すてきなご機嫌ね」

イレーヌが、口紅でまっかな唇を不敵に歪ませた。





## 六、愛惜と別離、逃避の果て

---

もとより魔女だ。

イレーヌが復活祭の日に教会へ出かけるというような殊勝さを持ち合わせるはずがないし、だいたい、街中のお祭り騒ぎが気に入らないのだろう。

それだから来た――いや、この女はもとよりネストルが一人で小屋に残っていることを知っていたから来たのである。それどころか、ユークのことでネストルが心乱れていることにさえ勘づいているのではないか。それだからこんな雨の夕暮れにわざわざ森まで来たのだ。

何のために。

何を求めてここへ来たというのか。

無論それは、ネストルを自分のものとするために、である――。

「だいぶ降ってきたわね」

イレーヌは濡れたスカートの裾をハンカチで押えながら言った。靴下を見せつけるように、わざと裾を高く持ち上げている。

この時代、女性は下着を穿かない。スカートの下から靴下を見せるだけで大きな誘惑となった。

「何しに来た」

ネストルは顔をしかめ、まずそうに、蜂蜜酒をまた一口含んだ。

「店は復活祭で休みだ。張り紙の文字も読めないのか」

「あら。別に今日は何か買おうと思って来たわけじゃないんだけど？」

「じゃあ何で来た」

「あなたに逢いに、よ」

イレーヌは艶然と打笑み、ゆっくり歩み寄った。それ以外に何があるの、と言わんばかりだ。濃密な香水が漂う。

花の匂いなどではない。何か動物的な、人の理性を麻痺させるに足る蠱惑的な香りであった。今日もあのカチューシャをつけている。

「でも久しぶり。ここへ来るのも」

イレーヌは薄暗い室内を見回して、

「二ヶ月かしら。私、しばらくトゥールズから離れてたんだけど、ここは変わらないわね、何も」

「……」

室内を行き来しながらテーブルの埃を撫でる魔女に、二ヶ月ぶりか――と不思議な気がしていた。つまりそれだけ他のことに気を回す余裕が無く、ユークのことばかり考えていたということになる。我ながら、すこしおかしかった。

「どこかへ行っていたのか」

と尋ねると、魔女はうれしそうに、

「あら。あなたから質問されるなんて珍しい。うれしい」

「別に興味があるわけではない」

ネストルは不愉快そうに立ち上がり、調合室へ入ろうとしたが、その背後へすばやく歩み寄り

「ボーヴェ」

と、魔女がささやいたのである。

パリ北部の小さな街。

大聖堂があって、師匠の墓のある街……。

立ちすくむ青年に、魔女はさらに口を耳元へ寄せて、

「あなたの奥様を連れてきたのよ、ネストル」

と、今にも耳朶を舐めそうにして言うのである。

ネストルは茫然として言葉もない。

「ひどいじゃない。もう死んでるとばかり思ってたら、生きてるだなんて」

「……」

「私はね、ネストル。あなたに私の魔法が効かないのは、よっぽど深く前の奥様を愛してるからだと思ってたの。魔力を超える意志の力、感情の力だなんて、すごく素敵な話だと思ってた。でも本当はそうじゃなかった。本当の妻は生きてて、あなたは単に、彼女から逃げただけだった……あなたはひどい男ね。自分の妻をあんなふうにした挙句、見捨てて逃げちゃうなんて」

「……」

「ね。魔法の失敗できれいな顔を焼いちゃったとき、どんな気持だった？ そのときあなたと妻は、喧嘩した直後だったでしょう？ とるにたらない喧嘩——ちがう。あなたの浮気についてじゃなかったかしら。それを指摘されたことに腹を立てて、でも実験はしなくちゃならなくて、そのせいで心の中にわだかまりがあって、実験中にも何だか意識が散漫としちゃって。それで気がついた時には、妻のきれいな、かわいらしい、愛すべき顔は無惨に焼けただれてしまった。そうでしょう、ネストル。そのあまりのおそろしさ、おぞましさに、あなたは逃げた。妻を見捨てて、浮気相手のもとへ走っちゃった」

「……やめろ」

ネストルはかすかに、喘ぐように言った。

「やめても良いけど。でも結局、その浮気相手には振られるわ、ボーヴェの街からは追放されるわで、さんざん。とうとうここまで逃げてきたってことよね」

「やめてくれ……頼むからやめてくれ」

「苦しそうね。良いわ、やめてあげる。別に私はあなたを苦しめようと思ってないから。むしろそういうあなたであっても別に構わないと思ってるから。そういうあなたであれば、かえって私のもんに出来るんじゃないかと思うから」

「妻は……ヴァレリは外にいるのか」

「いるわ。迎えに行く？」

促され、夢遊する人間のようにふらふらと店を横切って、ネストルは戸を開けた。

雨はまだ止まない。

むしろ次第に激しくなっていた。

梢から大きな水滴が、立て続けに落ちてくる。

「あなた」

と、声がした。

ぞっとして――声のした側を見れば、軒先、傘をさした女が、傘の先からはげしく水滴を垂らしながら、そこに立っていた。

傘に隠れて顔は見えない。

が、声にはたしかに聞き覚えがある。

忘れようとしても忘れられぬ声。

自分が「殺した」妻の声……。

「ヴァレ、リ？」

「あなた」

ずっと、傘が上がって妻の、青黒く焼けただれた無惨な面貌が見えた。

ネストルは目を背けたいのをこらえて、

「……どうして、おまえ。パリへ出ることで出来ないくらいの身体だったのに。もう、そんなに良いのか」

「あなたは……」

ゆっくりとした、かすれたような声。

ネストルは声を震わせて、

「あの魔女に連れて来てもらったにしても、たいへんだったろう。長旅なんてしたこともないのに。治療はどうした。お金だって、おまえ……」

と、ここまで喘ぐように言ったとき、ネストルは、ふっと血の気を引かせて声を上げた。

「違う。ヴァレリじゃない。これは人形――」

「シャルム」

刹那、醜怪な女の口が、呪言を唱えた。

両眼が光り、惑溺の魔法が発動する――動揺したネストルの心を、強烈な魔法が貫いた。

「あっ」

と言って、ネストルが目が眩むと同時に意識を奪われて足元の水たまりへ崩れた。ばしゃり、と倒れて動けない。

「上出来よ」

店の暗がりから出てきた魔女イレーヌが、すさまじい笑みを浮かべた。

それは魔女のつくった、人形に間違いなかった――。

## 七、妄執と愛欲と、再度の逃避

---

ここトールズでは知られていないが、イレーヌは過去の長い期間にわたって「百歳の魔女」と呼ばれていた。

実際の年齢を指して言うのではない——実年齢は、120を超えているはずである。

西欧よりは、東洋の知識。

すなわちパリからグラナダ、地中海を超えてラバト、チュニス、カイロ、アレppo、バグダット……と、各地をさまよう中で古今のあらゆる秘術を学び、生命の神秘を極めて、そして今、百歳を超える寿命と美貌を維持しているのである。

その奥義は深遠かつ単純——すなわち若い男を誘惑してむさぼり、舐め尽くして若さや精力を吸い取っては捨てる——。

だがそうした、

「魔女」

に似つかわしい行為の果てに今の彼女があることくらい、ネストルはとうに知っていたはずであった。

自分を執拗に狙うのも、強い恋愛感情からなどではなく、誘惑が失敗に終わったことを屈辱に感じた、魔女の意地のためであることも承知していた。

そして今やその欲するものは、ネストルの知識の総体——すなわち、魔女の誘惑に抗し得た、若き錬金術師の精神構造の秘密であった。それを手に入れることで、魔女はよりいっそう、人類を超越した魔力を得ることになるはずであった。

……そんなことを、朦朧とする中で考察しながらネストルは、ひたすら、おのれの迂闊さを悔やんでいた。ヴァレリの姿に己の前非をすべて突きつけられた気になり、恐れと悔悟、慚愧や己に対する憎悪で心乱れ、いっさいの防御を忘れて魔女の力をまともに浴びることになった。

だが同時に、今の自分がそれほどヴァレリへの追憶を抱いていたのかと、ネストルは意外でもあった。ヴァレリを見捨てて逃げ出したことを、自分がそれほど悔やんでいたのかと思うのだ。

妻は、殺してきた……のではなかった。

心の奥では、確かに、命ある存在として認めている。自分が救い得る存在として強く愛惜しているのがあった。だから、これほど心が乱れた。

(……だが、もう、おわりだ)

ネストルは、かすかな意識で己の服が剥ぎ取られ、呪文を体中に書き込まれ、何やらのおぞましい儀式の生贄にされようとしていることを自覚した。

魔女によって姦淫され、血に汚された拳句、記憶や感情は奪われるであろう。

魔女の欲するものは分っている。

そしてそれを奪うための儀式も、半ば以上、ネストルは承知していた——彼とて、人倫を越えた錬金術師である。人の持つ知識を剥ぎ取る術式がどれほどおぞましい結果をもたらすか、じゅうぶん理解できる。

ネストルは、暗い地平へ沈み込むような意識の中、ひとつひとつの記憶が薄布を剥がされてゆ

くように失われて行く感覚になっていた。

故郷の夕景。

ボーヴェ市では、巨大な聖堂の建設が始ったばかりであった。いつ終るとも知れない、途方もない建築作業。

それをのんきに眺める師匠や街の人たち。

目を転じれば、猥雑なパリ市街。薬種を購入して市場を歩けば、そこにびっくりするような化粧の売女がいて、慌てて逃げたりした……。

孤独な旅、森の中、ユーグの泣き顔そして笑顔。

脈絡なく種々の記憶が脳裏をかすめて、やがてすべての記憶が沈黙したところで、ネストルは、ぽかんと目を開けた。

「先生っー」

と、ユーグが抱きついてくる。

「先生、先生、大丈夫ですか。大丈夫ですか……」

首へしがみつき、泣きじゃくるユーグの頭を、ネストルは混乱しつつも、大丈夫、大丈夫だよ……と撫でて、ふと自分の頬へ当る硬質のものに気づいた。

「ユーグ。おまえ、角が……」

と言いかけて、あっと、声を上げた。

向うに魔女が仰向けに倒れているのだ。口から血を吐き、白目を剥いている。死んでいるのではあるまいか。さらにその隣では、頭を割られた木偶の坊が、ごろんと横倒しになっている……ヴァレリどころか人間にすら見えない、案山子みたいな人形だ。それを魔法で、ヴァレリに見せていたのだ。

「先生。僕、劇を見てたら急に胸騒ぎがして、気がついたら角が生えてて。それで先生の身に何かあったんじゃないかって思って、急いでお店に戻っただけどいないから、どうしたのかって探し回って。それでここへ来たら、怖い魔女が、先生を殺そうとしてるって思ったから、あとは夢中になって……」

人形を撲ち倒し、有り余る悪魔の力で魔女を殺した、そういうことのようにであった。

「先生。ぼく先生を助けようと思って、夢中だったので、あの、またこんなことになってしまっって」

「角は、街の人にも見られたのか」

「……はい」

「ペリン、という子にも」

「はい。悪魔だって言われて……もう僕は街に行けません。先生、僕はどうしたら……」

「そうか、わかった」

ネストルは、目覚めてから意識が以前と較べられないほど明瞭になっているような気がしていた。

ユーグの角が再生したのは、術者ネストルの意識が奪われたせいであろう。相互に依存する二人の意識が、術の力を超えたことになる。結果的に、それがネストルを救った。

「私の術も、まだ彫琢する余地がある」

ネストルはふたたび少年の頭を撫でてやると、

「トゥールズを出よう」

といった。また逃げ出すのか、とは思わない。

「遠い旅路だが、道々、おまえの角をまた封じてやれる」

「どこへ行くんですか」

「ボーヴェという私の故郷だ。そこに妻がいる。もう逢ってもらえないかもしれないが、逢いに行こう……ついてきてくれるか」

「はい、先生――」

ネストルは、この少年の悪魔の力を用いれば、あるいは妻を救うことができるのではないかと思った。

たとえ治療したとしても、逃げた過去が許されるものではないが、叶うことなら、妻とユーグと、ボーヴェの街でささやかな魔法具の小店を開けないかと思う。いかなる罵詈雑言を浴びようと、昔の妻を取り戻すために命を捧げれば良い。

そしてネストルは、もしそれが叶わぬことであったとしても、せめて己の罪を懺悔することくらいは神の前において許されるのではないかと、今はじめて教会に足を向ける気になった。

(了)

超能力者達がクーデターを起した。勝利したのも彼らだった。

丘に登る三人の少年と一人の青年が居る。

少年達は夕立に濡れた下草を気にせずずんずんと進む。

ようやく丘を登りきると、其処には少年達にとって見慣れた風景が広がっていた。

かつて青々と広がっていた森は焼かれ地肌を晒し、太陽の光を浴びてきららかだった湖は濁りタールを溶かし込んだかの様な泥沼と化し、何処までも高く蒼穹だった空はスモッグにより雲さえもくすませている。

更に目を凝らせばかつて美しくも煌びやかだった高層建築郡も、ただの瓦礫の山と化し無残な姿を晒している。

少年達はそんな見慣れた風景に目もくれずひたすら空を見上げている。

少年達の視線はあちらこちらに向かい忙しく動く。少年達は虹を見つけようとしていた。

少年達は皆同じぐらいの背の高さである。恐らくは同年代であろう。

青年はヒョロリと背が高く、細い体躯をしていて、何処か頼りない風貌をしている。

「どうだい？君達には、未だ虹が見えるかい？」

頼りない風貌の青年が、か細い声で少年達に尋ねる。

「ううん。全然見えない。けど、想像で見える」

一人は、屈託無い声と表情で。

「見えた、気がする。よくワカンネーや」

一人は、勝気な声で、ただひたすらに目を凝らして。

「見えない。見えるはずが無い」

一人は、冷たい声で。けれど、誰よりも焦がれるように。

三者三様青年の問いに答えた。

「そうか、僕にはもう……見えないようだ」

青年は空を見上げるのを止めうつむく。

青年の寂しそうな声に、先ほど屈託無く答えた少年が反応する。

「どうして、皆、虹が見えなくなったのかな？」

彼は、心底不思議そうな表情で青年へと目を向ける。

「君はどうしてだと思う？」

質問を質問で返されて、少年は考える。

「……大人に成ったから？」

先ほどと変わらず、屈託の無い表情で答えた。

「きっと、悪いヤツがヒトリジメしてるんだぜ」

目を逸らさず、凝らしながら少年が答える。

「違う。大気が汚れたからだ」

冷たい声にもかかわらず、焦がれた声で呟く。



やはり三者三様に答える。

彼らの答えに満足したのか、青年は静かに微笑む。

「君達は、僕にとっての……」

不意の突風が吹きすさび、青年の声は半ばからかき消された。

コンクリートの一部が崩落し廃墟と言って差し支えないほどにぼろい部屋にベッドが一つ。

そこで、一人の青年が目を覚ました。

「夢……か、ずいぶん懐かしい夢……だった気がする。ふぁーあ。覚えてねえや」

大きなあくび一つと共に、ぼりぼりと頭を搔く。

表情は緩みきったまま、ともすれば二度寝しかねない。

「……寝るか」

青年は、ずれた毛布を自身の上に掛けなおすと、そのまま目を閉じた。

「Z z z……」

青年は、目を閉じると数秒でいびきをかき始めた。驚くほどの寝入りの早さである。

一だが、その眠りは長くは続かなかった。

赤茶く錆び付いた扉が勢い良く開かれる。

飛び込んで来たのは、本来ならば人の良さそうな青年だ。

けれど、今その顔色は悪い。まるで、この世の終わりとも言わんばかりの顔をしている。

「おいおい！カズヤ！未だ寝てるのかよ！？起きてくれよお」

人の良さそうな青年はベッドで寝ているカズヤと呼んだ青年に歩み寄ると、遠慮なく肩を揺らして起こしにかかる。

「ほら！早く起きてくれよお！マジ、ヤバイんだ」

「……うるせえなあ！」

カズヤにしてみれば虫を追い払うかのように緩やかに振るった手が、鋭い裏拳の様に人の良さそうな青年の頬に叩き込まれる。

「イッテェ！？」

思わず尻餅を着き頬を抑える人の良さそうな青年。

その声でカズヤはベッドから上半身を起した。

「トウマか……ナンだよ？人が気持ちよく寝てるって時に」

目を擦りながら話すカズヤ。その顔は緩み、ともすれば三度寝しかねない。

そんなカズヤとは対照的に、トウマの方は走ってきた直後の上気した顔でまくし立てる。

「だからって、殴ることは無いだろう！？って、漫才している場合じゃ無いんだ。ヤツラが来たんだよお」

トウマと呼ばれた青年は、怒ったり、怯えたりと表情がコロコロ変わりながら危機を伝えようと必死だった。

「ああ？ヤツラあ？」

毛布も退かさず返事をするカズヤ。どうやら未だベッドから出るつもりは無いらしい。

「ハイリゲスだよ！ハ・イ・リ・ゲ・ス！ヤツラ、このスラムの取り壊しに来やがった」

トウマはわざと大きい声ではっきりゆっくり、聞き漏らすことが無いように言い切った。

「……………ンだと！？ヤベエじゃねえか！」

ようやく危機を理解したのか目を大きく見開き、毛布を跳ね除けるカズヤ。

「だから、さっきからヤバイって言ってるだろう！？」

トウマの声は、最早悲鳴に近い。

「ヤツラ今何処だ！？」

カズヤはベッドの脇に脱いでいたブーツを履きつつ尋ねる。

「もう目と鼻の先まで来る。逃げ」

「わかってる。トウマ孤児《ガキ共》の避難は？」

「スラムから出るように手配してある、ケド無事に避難が完了するまでには時間を稼がなくちゃならねえ。カズヤ。期待してるぜ」

「オウよ」

カズヤは最後に手甲を嵌めて不敵に笑った。

カズヤとトウマが外に出る少し前、外は緊迫した空気に包まれていた。

少しひらけた場所に大型バス程ある装甲車が陣取り、その周囲を鉄パイプや、角材、バールの様なモノを持った住民達を取り囲んでいる。

『こちらは、治安維持機構ハイリゲス。この土地は、共和国の物である。貴様ら不法占拠者い一刻も早い退去を要求する』

装甲車に取り付けられたスピーカーから、ノイズ交じりの高圧的なダミ声が発せられた。

「なんだと！こっちには先住権がある！」

「そうだ！そうだ！新政府の犬が！もっと他にやることがあるだろう！」

装甲車に一番近い労働者風壮年の男が声を上げる。

釣られるようにそこかしこから、声が上がる。

勢い付く住民達。それぞれ、鉄パイプや、角材、バールの様なモノを握る手に力が籠る。

『繰り返す。ココは、共和国の土地である。不法占拠を続けるというので有れば、強制執行も辞さない』

強制執行の言葉に、住民達に戦慄が走った。

「ま、まさ超能力者が来てるのか！？」

先ほど声を上げた壮年男性が半歩後ずさる。

「二十年前クーデター成功の原動力となった超能力者達。あいつらが、来てるって言うのかよ！？」

勢い付いていた住民たちは、今や冷や水を浴びせられたかのように静まり返っている。

自分達の居住地が奪われる恐怖と超能力者に立ち向かわなくてはならない恐怖。二つの恐怖に板挟みとなった住人達は退く事も、進むこともできず、にらみ合いを続けた。

『これ以上の勧告は無い。貴様らを犯罪者と認定した。強制執行を開始する』

独特の排気音と共に装甲車のバックハッチが開く、其処から現れたのは年若い一人の青年だ

った。

青年はハイリゲスの中でも特に一部の者にしか与えられない、超能力者専用の制服を一分の隙もなくキッチリと着込んでいる。

「こちら、シスイ。これより、不法占拠者の鎮圧に当たる」

たった一言。

インカムへ独り言の様に呟いただけで、住民たちは、クモの子を散らすように逃げ出そうとした。

「俺は、貴様達の逃亡を否定する」

シスイが呟くと、逃げ出そうとしていた住民達の足が止まる。

「あ、足が、動かない!？」

それだけでは無かった。上から、何かに押されるように、次々と地面へ膝をつく住民達。

「体が、重いっ」

住民達は四つんばいになっても自分の体重を支えきれず次々と、そのまま地面に押し付けられつぶれたカエルの様に地面にはりつく。

「や、止めてくれ。これ以上押されたら、折れちまううう」

その言葉に偽りは無い。押し付けられて居る住民達の中には、激痛のあまり気絶する者も居た。

「犯罪者がどうなろうと、知った事か」

そう呟いたシスイの周囲には、無力化された住民達が残された。

「鎮圧任務終了。引き続き周囲の不法建築物排除の任務に移る」

シスイがインカムに呟くと同時に、背後から声が掛けられる。

「オウオウ。ずいぶん派手にやってくれるじゃねえの。何デカイ顔してくれるんだよ? ああ!？」

シスイが振り返ると、其処にはカズヤとトウマが立っていた。

「カズヤか、スラムに住んで居るとは聞いていたが……トウマまで一緒とはな」

シスイは、苦虫を潰したような表情でカズヤとトウマに向き合う。

「オマエに言われたく無えよ。俺と同じ孤児だったのにハイリゲスになんか入りやがって」

ファイティングポーズを取るカズヤ。今にも飛び掛らんばかりだ。

トウマがカズヤとシスイの間に割って入る。

「お前らなあ。どうしてそんなに、敵意を剥き出しにするんだよお? 俺達はその人に育てられたいわば兄弟みたいなものじゃねえか」

「今は敵だ!」

「同感だ。まさかお前と意見が合うとはな」

お互い目を逸らさず、火花を散らすカズヤとシスイ。二人とも印象は大分違うが存外根っこの所は同じで似たもの同士である。

「やめろってカズヤ。なあ、シスイ。ココは昔なじみって事で、見逃してくれねえか?」

「無理だな」

シスイはトウマの言い分を一刀の元に切り捨てると、ファイティングポーズを取った。

「ヘッ。そうじゃなきゃな。よおし、このケンカ買った！」

「違うお前が売ってきたんだ」

緊張感が高まる。最早お互い相手のことしか眼中に無い。

「おい、止めろって……ああ。クソッ。オレは逃げるぞ！」

言うなり、トウマの姿がその場から消えた。

比喩ではない。最初から、その場に居なかったかのように消えたのだ。

これが、トウマの超能力。非連続存在《チェシャ猫》だった。

「勝手にしやがれ！これは、オレのケンカだ！」

「こちらシスイ。これより、敵対固体の鎮圧に移ります」

あくまで、冷静にインカムに告げるシスイ。

「スカしてんじゃねえ！」

怒号に併せて、カズヤが一直線に距離を詰め殴りかかる。

「相変わらず、単調な攻め手だ。俺は、貴様の攻撃を否定する」

だが、シスイに触れる直前で、カズヤの動きが止まる。

「クッ。こ、これが、お前の能力って訳かよ」

カズヤは必死に殴ろうとするが、その拳は、体はピクリともしない。

「そうだ、俺の能力は斥力。拒絶の力だ」

言うなり、カズヤに半歩近づくシスイ。

たったそれだけで、カズヤの体は大きく吹き飛ばされ、宙を舞った。

「グワァァァ」

「まだだ！俺は俺に作用する重力を否定する」 その言葉で、シスイの体は浮き上がり、吹き飛んだカズヤに追撃を仕掛ける。

足場の無い空中でカズヤが出来ることは防御を固めるだけだった。出来るだけ体を縮こまらせると同時に腕を十字に交差し、シスイの追撃の踵落しをブロックする。

踵落しによるダメージは軽減出来たものの、カズヤの体は運動法則に従いシスイの追撃で加速され、背中から勢い良く地面に叩きつけられた。

「く、くそう。一撃かよ、せめて一発殴らせろ」

ダメージは甚大だった。受身を取る事もできずに背中を強く打っていて、直ぐに動くことは不可能だ。

シスイは緩やかに、着地する。

「無理だな、お前は潜在能力は高いが、それだけだ。使えない能力など、怖くもなんとも無い」

「ヘッ。次は……負け、ねえ……」

そう言い残すと、カズヤはガクリと気絶した。

「こちら、シスイ。敵対固体の鎮圧完了。……いえ、ただのチンピラです。強制収監する必要も無いでしょう。はい。では、不法建造物破壊の後撤収します」

その日、スラムが一つ消えた。

「おい、おいってば。大丈夫かカズヤ」

「シスイ！殴らせろ！……ってトウマか」

地面にうつ伏せに横たわるカズヤ。その脇にはトウマがカズヤの手当てをしている。

彼らの周囲には建造物は無く、ただただ何も無い更地が広がっているだけである。

トウマは何処から持ってきたのか金だらいに水を張り、手ぬぐいを絞ってはカズヤ背中に当てていた。

「あのヤロウ、手加減しやがった！」

握り拳を地面に叩きつけるカズヤ。その表情は怒りがありありと浮んでいる。

「命有っての物種って言うだろう！？素直に引いて置けよ」

トウマはカズヤと何度も似たようなやり取りをしたのだろう、食傷気味に言い放つ。

「いいや！引かねえ！！引いてたまるか！！！！そうだ、こっちから乗り込んでる」

「おいおいおい！？なーに考えてるんだよ！？」

カズヤの表情には不適な笑みが浮んだ。

「良いから付き合えトウマ！」

治安維持機構ハイリゲス。その本部は元都庁が使われている。

超能力者達のクーデターで大きな警察や、消防、裁判所、学校などは焼かれ、潰され瓦礫と化した。

そんな中でハイリゲスの本部は、奇跡的に被害を免れ、クーデター後、力の象徴として治安維持機構の本部になっていた。

ハイリゲス隊長室。其処はかつて都庁室として使われていた部屋である。

室内にはシスイと威厳を漂わせる壮年の男性が対面していた。

「……報告は以上です。隊長」

シスイは、先日のスラム撤去作戦の結果をを上司であるハイリゲス隊長マーカスに報告していた。

マーカスは見た目四十歳前半で知的な風貌をしている。しかし、たるんだところは一切無く、今前線に出ても実力を遺憾なく発揮することをうかがわせている。

「良くやってくれたシスイ。二十年前我々が目指した新たな社会。能力ある者が、能力無き者を導く社会。その秩序継続の為にこれからも君の力を貸して欲しい」

マーカスは、壮年の特有の落ち着いた声でシスイを労う。

「勿体無いお言葉。これからも理想の為力を尽くします」

シスイは、更に背筋をシャンと伸ばし敬礼をする。

「それでは次の任務に移って欲しい。この後行われる入隊希望者の模擬戦の試験官を頼む」

「了解しました。それでは失礼します」

深々と一礼し執務室を後にするシスイ。その足で、模擬戦の会場となる訓練棟へと向かった。

ハイリゲスの訓練棟はムダに広い。と、言うのも現在超能力を抑える物質は見つかっておらず、狭い室内でなおかつ能力に制限をした訓練ではむしろ実践の感が鈍るという要望が出たためだった。

特に広い一階のエリア。通称グラウンドに、今回の入隊希望者十名が集められている。

そこでシスイが見たのは、ぶすっとした表情のカズヤとヘラヘラと手を振るトウマだった。

「何でお前が居る！？カズヤ！トウマ！」

「そう、つんけんするなよシスイ。カズヤも色々考えてんだって。そうだよな？カズヤ」

トウマは意味ありげに、カズヤに目配せする。

「おう、少しは力の制御を覚えようと思ってな」

カズマは不敵に笑うと握り拳を閉じたり、開いたりとしている。

早く暴れたくて仕方ないと言わんばかりだ。

「そうか。では、君達にはこれから模擬戦をして貰う。当然勝ち残った者が入隊だ。能力無き者に用は無い。組み合わせはこちらで決める。能力の使用は無制限。武器が必要な者はココにあるものを使ってくれ」

シスイがウエッポンラックの鍵を開けると、各種重火器、接近戦用の武具、スコープやバールといった日用品が用意されてた。

カズヤは防具の中から、鋼鉄で出来た手甲だけを選ぶと指示された場所に向かう。

其処には大柄なモヒカンがニヤニヤした表情で待ち構えていた。

「テメエが俺の相手か？」

「何だガキかよ、コレじゃ俺の入隊は決まった様なもんだな」

ゲヒャゲヒャと品の無い声で笑うモヒカン。

「ハッ、テメエこそ見掛け倒しじゃないことを祈ってるぜ」

カズヤは大柄なモヒカンを見上げてメンチをきる。

「笑わせてくれるぜ、お前なんざ、俺の鉄球で即オネンネだぜ」

モヒカン男は両手に持った鉄球を掲げる。

「さあ、始めようぜ。テメエが売った。俺が買った。だから、俺あテメエをボコる」

「ヒャッパー。死んでも知らねえぜ」

「それでは、試験開始！」

シスイの掛け声と共に、カズマとモヒカンの模擬戦が開始される。

「速攻だ！」

カズヤがモヒカン男に向かって一直線に突っ込む。

「バカが。俺の鉄球は、持って殴るだけじゃない。こういう使い方をするんだ！」

モヒカン男が両手に持っていた二つの鉄球がふわりと宙に浮き衛星の様にモヒカン男の周りを高速でまわる。

「ゲヒャゲヒャ、近づけねえだろう？でも、それだけじゃねえんだぜえ？ブレイクショットお！」

モヒカン男が叫ぶと、片方の鉄球が剛速球となってカズヤに襲い掛かる。

「遅えよっ」

カズヤは、突然飛び込んできた鉄球をひらりとかわし、更にモヒカン男に迫る。

「引っかけりやがったな。俺の球は二つある。前と後ろから挟み打ちだぜ！むううん」

モヒカン男が唸るとカズヤを通り過ぎた鉄球が空中で弧を描きカズヤの上背後から迫る。

背後からとは別にモヒカン男の周囲を回っていた鉄球がカズヤの正面から迫る。

「しゃらくせえ！！」

カズヤは走る勢いを殺さず、むしろ加速させる。と、正面に迫る鉄球を左ジャブで殴りつけ方向を逸らす。

「馬鹿な！？」

あっけに取られる、モヒカン男。

カズヤはその隙を逃さずモヒカン男の脇をすり抜けると同時に、モヒカン男の後頭部めがけて裏拳を放つ。

「ガッ！」

裏拳を喰らったモヒカン男は、体勢を崩す。

と、よろめいた所にカズヤを狙って飛んできた鉄球がモヒカン男の股間にめり込んだ。

「お前の球。確かに二つ有ったな」

カズヤは自分の鉄球を喰らい、悶絶するモヒカン男にトドメの踵落としを見舞った。

「まったく、カズヤは相変わらず容赦無いなあ。さてと、オレは戦闘系じゃない。けどま、上手くやるか。このペイントナイフ借りるぜ」

トウマは小ぶりのナイフを取ると対戦相手のところに向かった。

トウマの対戦相手は、細身の男だった。

ボロボロになったコートを纏い、手には長い刀を携えている。その様子は死神を連想させた。  
「オレッチの相手はアンタかい？おっかない顔しちゃって」

トウマが細身の男に話しかけるが、男は何も答えることなく、ただ、佇む。

「では、試験開始！」

シスイの掛け声と共に、トウマと細身の男の模擬戦が開始される。

先に動いたのは、細身の男だ。

声が掛かると同時にトウマに向かって走りこみ銀色の閃光が煌めいた。

「……一刀両断」

細身の男が刀を鞘に戻し、その場を立ち去ろうとする、が。

「……両断。されてないんだなあ、コレが」

「馬鹿な！？確かに手応えは有った」

聞こえるはずの無い声に細身の男が振り返る。

トウマは細身の男に対し手をヒラヒラと左右に振っている。その体に切られたハズの傷は一切ついていない。

「さて、次はオレッチの番かな」

トウマの姿が空間に溶け込む。

「透明化？それとも……ふっ、いずれにしても私の予知能力の前では同じこと」

細身の男は刀に手を掛けたまま、目を閉じた。その方が、より予知しやすいのだろう。

「其処だ！」

細身の男目が見開かれる。と、同時に銀色の閃光が細身の男の頭上で煌く。

トウマのペイントナイフを持った手だけが、男の居合いを受け止める。

「手だけ！？それでは、本体は、うわあああ？」

不意に細身の男の体が持ち上がる。その下にはどうやって潜りこんだのかトウマが居た。

「ハイ、残念でした～」

トウマは、細身の男の足を掴んだまま、後ろに倒れる。当然、細身の男も後ろに倒れる。プロレスのバックドロップだ。

細身の男は、まともに肩甲骨から落ち、暫くのたうち回っていたが、ギブアップを宣言するのだった。

その後も試験は続き結局、勝ち残ったのはカズヤとトウマの二名だけだった。

そして今、カズヤとトウマは新人研修として、個室でシスイの説明を聞いていた。

「おいおい。カズヤ？ココまでは良いけど、ココから如何するんだよお？」

シスイがハイリゲスの任務や諸般のルールを説明する中、小声で話しあうトウマとカズヤ。

「決まってるだろう。隙を見て、ヤツに挑む、そして勝つ」

握り拳を作り、嬉々として話すカズヤ。

「はあああ。結局何も考えて無いんじゃないか」

「以上だ。何か質問とか要望はあるか？」

シスイが、一通り説明を終わらせカズヤ達のほうを向く。

「いや、特にはネーッスヨ」

切り替え早く、反応するトウマ。



「何でも良いのか？」

怪訝な表情をするカズマ。

「ああ。出来ることならばな」

その答えに満足したのか、カズヤは唇の端を吊り上げて笑う。

「ソレならよう。シスイ、この前の続きをやろうぜ？」

カズヤが構える。

「止めてくれ。少なくとも任務以外ではお前達とは、戦いたくない」

敵意をむき出しにするカズヤに対しシスイは冷ややかだった。

「へえ、ズイブント、オヤサシイじゃないか。スラム生まれの癖にあちこちのスラムを潰して回っている。ハイリゲスのエリート隊員の台詞とは思えないね」

カズヤが挑発気味に言った台詞にシスイが強く反応する。

「あちこち潰し回っているだと？そんな情報聞いてないぞ」

「はあ？知らネエって、ンな訳ネエだろう」

カズヤは相変わらずケンカ腰で挑発する。

すぐさま襲い掛からんばかりだ。

「そう突っかかるなよ、カズヤ。情報の行き違いなんざ日常茶飯事だ。メシでも喰いながら情報交換と行こうじゃないの。モチロン、シスイの奢りでな」

軽口を言いながら、お互い引かない二人の仲裁に入るトウマ。

「奢りか、なら良いぜ」

カズヤから、戦う気が抜ける。

「グッ、仕方ない。ならば今日はオレの奢りだ」

一瞬何か言い足そうな表情をするも、よほど情報が欲しかったのか、シスイはアッサリと引き下がった。

ハイリゲスの執務室。

室内には二人の男が居る。

一人は、ハイリゲスの隊長マーカス。

マーカスは立ち上立ったまま、渋い表情をして窓の外を眺めている。

もう一人は、来客用のソファーにどっかりと腰を下ろし、足を机に投げ出してタバコをふかしている。着ているスーツはシンプルながら良い生地を使って仕立てられている。

『なるほど、確かにオレの知らない情報ばかりだ。それで、この信用度は？』

マーカスのパソンスピーカーからシスイの声が発せられる。

『おいおい、オレッチが足を使って掴んできた情報だ。間違いはねーよ』

『と、なると見過ごせないな』

紛れも無い盗聴だった。

「知られたようですねえ？それで、この件どう処理するおつもりですか？」

フー、とタバコの煙を吐き出し、マーカスを見つめるスーツの男。

その声は、男にしては甲高く聞くものに蛇を連想させた。

「ハッ。情報公開するとおびき寄せ、処分します」

スーツの男に対し敬語を使うマーカス。

敬語と立ったまま座ったままという関係から、スーツの男はマーカスより上位のものと察しがつく。

「おやおや、目をかけていた部下でしょうに。もっとも、これぐらい冷酷な判断が出来ないと隊長は務まりませんか。では、くれぐれもお願いしますよ」

スーツの男はそう言うと、ソファから立ち上がり部屋から出て行った。

「上位者たる貴方の手は煩わせません」

一人となった部屋で、マーカスが自分に言い聞かせるかのように呟いた。

「隊長。緊急の呼び出しということですが、一体何でしょうか？それに、オレだけでなく新人のカズヤとトウマまで」

食事から、数時間後。

訓練棟のグラウンドにカズヤ、トウマ、シスイの三名は呼び出されていた。

「うむ。実は真実を話そうと思ってな」

マーカスは含みを持たせて話す。

「真実？一体何なのですか」

シスイは思い当たる節を秘めながらマーカスに詰め寄る。

カズヤとトウマは少し離れたところで、二人のやり取りを見守っている。

「とぼけなくても良い。君は、君達は知ってしまったのだ。ハイリゲスの秘密を」

マーカスは淡々とした言葉で告げる。

「それでは、トウマが持ってきたハイリゲスがスラムを潰してまわっているという情報は真実だったと！？許せん！」

いきり立つシスイを尻目にマーカスは淡々とした表所のまま嘯を続ける。

「許す、許さないの次元ではないのだよ。これは。そして、秘密を知られたからには、生かしておく事はできない」

マーカスがパチンと指を鳴らすと、マーカスの背後から戦闘服を着込んだ能力無しの一般隊員達がなだれ込む。と同時にグラウンドの出入り口がシャッターで封鎖された。

シャッターと言っても特注品で五十センチもの厚さがあり、容易に脱出することは不可能だ。つまり、カズヤ達は袋の中のネズミとなった訳である。

「おいおい、コレ、マジやべーよ」

慌てふためくトウマ。

「完璧に巻き込まれたな。オイ！シスイこれはお前が売られたケンカだ！テメエでかたをつけやがれ！」

カズヤはそう叫ぶと、ファイティングポーズを取り、周囲を警戒する。

「言われるまでも無い！」

「お前達は後ろの二人を。シスイは私自らが対手をする」

マーカスの指示で一般隊員達がカズヤとトウマへと殺到する。一般隊員の武装は共通で市内戦に特化した、九ミリパラベラム弾を使用するサブマシンガンと拳銃、スタンロッドである。

二十名もの一般隊員。数だけで見れば十倍もの圧倒的な戦力差だ。全員でサブマシンガンによる弾幕を張られたらひとたまりも無い。

だが、カズヤは不敵に笑うと、隊員達に向かって走りこんだ。

「へっ、お前ら雑魚じゃ相手にならねえって事を教えてやるぜ。シスイ。後ろは気にするな、目の前の敵だけを集中しろ！」

相手が向かって来ることを想定していなかった隊員達は慌てふためき、肉薄されてしまった。

カズヤは近い隊員の顔面を手甲に体重を乗せて殴り飛ばす。

だが、多勢に無勢。隊員の一人が切り替え早くスタンロッドに持ち替えカズヤの背後背後めがけて振りかぶる。

振り下ろそうとした矢先、何かに掴まれ手が動かない。

慌てて手元を見る隊員。見たのは、空中から生えてる手であった。

「まったく、オレは、戦闘系の能力じゃネエって言っても仕方ないか。カズヤ、死角は任せろ！ほらほら、電撃の味はどうだい！？」

能力を使い、あるはずの無い場所から手だけを存在させ、隊員を無力化するトウマ。

二人は上手く死角をカバーしあい隊員達との戦闘を続けた。

一方、その頃、シスイはマーカスと拳で話し合いを始めていた。

「隊長。どうして私を騙したのですか！」

シスイが左ストレートを放つ。

マーカスは避けることなく、その一撃を身に受ける。

「騙してなどいない。考えが少し違っただけだ」

今度はマーカスの拳が、シスイの腹部に突き刺さる。

「貴方はそれを知っていて、言わなかったのでしょうか」

シスイはあえて自分から倒れこむと、地面すれすれで体を回転させ、マーカスの足首を狙った蹴りを放つ。

「そうだ。だがこれも理想の為」

バックステップで一旦距離を取るマーカス。

「オレの理想はこんなものじゃない！」

起き上がり、タックルを仕掛けるシスイ。

「ならば倒すが良い、この私を！ハイリゲスの能力者の頂点に立つ私を！」

同じくタックルを仕掛けるマーカス。

「オレは、貴方の攻撃を否定する！」

シスイが、自らの超能力を発動した瞬間驚くべきことが起きた。

マーカスの体は止まらず。むしろ勢いを増してシスイに当たってきたのだ。

「な、何！？」

後方にはじき飛ばされるものの体勢を立て直すシスイ。

「今のは一体？確かに俺は能力を発動させたはずなのに」

訝しがる、シスイに対しマーカスは平然としている。

「私の能力を忘れたのかね？私の能力は、電気を操る力。君の斥力が幾ら拒もうとも、帯電した私の拳は、帯電した君の体とクーロン力に従い引付け合う！」

マーカスの両拳から、バチバチと火花が飛び散る。

「くう、ならば距離を取れば！」

クーロン力は距離と反比例の関係にある。

近くなれば強まり、遠くなれば、弱まるのだ。そのことだけ考えれば、シスイの判断は待ちが  
って居なかった。

しかし、マーカスの方が一枚上手であった。

「甘い！轟けイカツチ！」

マーカスの右手より、電撃が発せられる。

それは、ジグザグな軌道を描いて、シスイに命中した。

「ぐわああああ！！」

電撃をまともに食らったシスイは、がっくりと両膝を突いてへたり込む。

辺りを焼ける臭いが包んだ。

「この程度が君の限界か？私の買いかぶりすぎのようだったな」

マーカスはその場を動かさず、二撃、三撃と電撃を打ち込む。

「ぐあああああ！くっ。俺はこんな所で、終わるのか？…いや、未だだ！」

電撃を受けた体は、痺れ。シスイが思うようには動かない。

「ずいぶん苦戦してるじゃねえか。助けは要るかい？」

シスイの後ろから、カズマのバカにしたような声が掛けられる。

「カズヤ。手を出すな！これは俺の戦いだっ！」

搾り出すように叫ぶシスイ。

「ヘッ。それを聞いて安心したぜ。オラオラ、どうした！もっとかかって来いよ」

カズヤとトウマの二人は良く戦っている。

向かってくる相手をいなし、致命的な一撃を与え、確実に戦闘不能にしていく。

しかし、それでもハイリゲス隊員の数も多く、とてもシスイの手助けは出来ない状態だった。

「俺には、夢がある」

痺れる体に鞭を打ち無理やり立ち上がろうとするシスイ。

「この汚染された世界を建て直し、誰もが虹を見られる世界に変えるという夢がな！そのために  
なら、この命惜しくは無い！！」

シスイはよろめきながらも立ち上がりファイティングポーズを取る。

「なーんだ、やっぱり昔から変わってなかったじゃねえか」

トウマが軽口を叩く。

その一言が更にシスイの心を奮い立たせる。

「夢だけで勝てるほど現実は甘くないことを教えてやる！生体電気信号増強《クロックアップ》  
」

マーカスの姿がシスイの視界から消える。

「な！？何処へ！？グッウツ！」

シスイの腹部に深々と突き刺さるマーカスの右ストレート。

マーカスは目にも留まらぬ速さで、シスイの懐に入り込み、一撃を加えたのだ。

「遅い！遅い！！遅い！！！」

左ジャブ、右フック、左ストレート。

シスイが、体勢を立て直す暇を与えることなくラッシュを仕掛けるマークス。

どれもコレもが生体電気信号増強《クロックアップ》によって強化された重い一撃だ。

シスイも何とかダメージを減らそうとガードを固めるが、焼け石に水。左ストレートを喰らい吹き飛ばされ地面に大の字に倒れた。

「ふう、惜しいな。後三撃だったというのに」

倒れたシスイに背を向けて言うマークス。

（三撃だと？こんな攻撃を後三回も切り抜けられるはずが……マテ。どうして、回数を決める必要が有る？）

何とか腹ばいに体をひっくり返し、四つん這いの状態から、立ち上がろうとするシスイ。

「ほう、まだ立ち上がるか」

震える脚に活を入れ、こみ上げる吐き気を押し戻し気力だけで立ち上がるシスイ。

「ああ、俺には、夢があるからな」

そして、不敵笑った。

「ならば、その夢打ち砕いてくれる」

五メートルの距離が、一瞬にして詰められた。

強化された回し蹴りが、シスイを襲う。

（1撃）

シスイは、脚で脚をガードするがパワーが違う。再び吹き飛ばされる。

シスイが吹き飛ばされている最中、マークスは強化された肉体でシスイに追いつき、手刀による一打をシスイの胸に加える。

（2撃）

床に叩きつけられ、ゴムの様にはねるシスイの体。

その口元からは、血が吐かれる。

マークスは表情を崩さないまま、シスイにトドメをささんとする。

「これでトドメだ、イカツチよ！わが身に！」

マークスの全身を電撃が包む。

倒れているシスイ目掛け、かわら割りの様に拳を振り下ろすマークス。

「ここだあ！」

シスイは渾身の力で振り下ろされる拳を打つ。

「シスイィィィ！」

カズヤの叫びがグラウンドに響く。

拳と拳がぶつかり合う。其処から発せられた、衝撃波であたりは白煙に包まれた。

暫くして辺りを包んだ砂煙が晴れると、其処には膝をつく隊長の姿があった。

カズヤ、トウマ動けないものの意識を取り戻した隊員達。その場に居る誰もが動きを止め、シスイとマークスの方を見ていた。

「やはりそうなのですね、マークス。いえ、隊長。貴方は圧倒的に有利だったのに打ち込む回数を決めていた。それは、体が能力に追いつかなくなる上限だから。違いますか？」

「ふっ。私を未だ隊長と呼ぶか……その通りだ。私の戦い方は背水の拳。最早私では君を止められない様だ」

マーカスの表情が柔らかくなる。

「ならば、全てを話そう。隊員諸君も聞いて欲しい。治安維持機構ハイリゲス。その独立性は失われた」

隊員達に戦慄が走った。

「誰が歪めたというのです？」

シスイが悲痛な声でマーカスに尋ねる。

「治安維持機構ハイリゲスを監督する者。上位者シュランゲ。ハイリゲスは彼の私兵と成り下がってしまった」

マーカスが弱々しく答える。

「隊長程の実力者が居ながら、どうしてそうなったのです！？」

「それは……」

其処まで言ってマーカスが一切の動きを止めそのまま倒れこむ。

「隊長！？」

慌てて、マーカスを介抱するシスイ。

マーカスの目に生气は無く、何の光も宿っていない。

「それは、私がお答えしましょう。彼が私を止められなかった理由。それは、彼が死人だからですよ」

グラウンドに蛇を連想させる声が響く。

「テメェ誰だ！？」

声の方を向くと、仕立ての良いスーツを着た男が立っていた。

「お初にお目にかかります。ゴミ虫ども。私が、ハイリゲスを監督する者。上位者シュランゲです」

慇懃無礼に話すシュランゲ。

「隊長が死人だと！？どういうことだ！」

シスイが食って掛かる。

「言葉通りの意味ですよ。彼は私の能力。黒幕《ドゥラートツィーア》で生きているように見せかけていたに過ぎません。もっとも、既に解除しましたがね」

やけにベラベラと喋るシュランゲ。

「おいおい、この流れヤベェぞ」

トウマがカズヤに耳打ちする。

カズヤもコクリとうなずく。

「察しが良い子は、好きですよ。これほどの実力があるのなら十分です。殺して私の駒として差し上げましょう」

シュランゲはにこやかな顔で答えるが、その目は笑っていない。

「げえ！？何て地獄耳！」

トウマが驚いた表情をする。

「駒だなんて冗談じゃねえ！」

「貴様に使われてたまるか！」

「ああ、やっぱりこういう展開かよ！ちきしょう！」

「ハハハ。それでは死になさい！黒幕《ドゥラートツィーア》！！」

シュランゲから黒い影が伸びて、動けない隊員達を覆う。

影に覆われた隊員達は、二度三度と痙攣すると何事も無かったかのように起き上がる。

その表情に生气は無く、虚ろな瞳がカズヤ達を捕らえた。

「シスイ！アイツは、俺がやる！」

カズヤは叫ぶと、シュランゲに向かって走り出す。

「おいおい、カズヤ！敵の真ん中に俺を置いてくなよ」

ワテンポ遅れて、駆け出すトウマ。

「冗談じゃない！ここまでやられて、黙ってられる……クツ、傷がッ」

胸を押さえてうずくまる、シスイ。

「おいおい。お前等、こんなときにケンカしてるんじゃないよ！シスイ。ココはカズヤの言うとおりだ！シュランゲはアイツに任せろ。それに、オレにはアイツを凌ぎきる戦闘力は無え！」

トウマもシスイに合流する。

「くっ、頼むぞカズヤ！」

シスイの脇を走り抜けるカズヤの背にシスイからの声援が送られる。

「任された！」

「ほう、突進して来ますか。この私とタイマンを張ると？能力を十分に使えないゴミに何ができるといいますッ？」

「歯あ食いしばりやがれ！」

カズヤが助走の勢いを乗せたパンチを繰り出す。

だが、シュランゲは余裕の表情を崩さず、構えすら取らない。

「グハァ！」

カズヤが吹き飛ぶ。

「ふー。遅いですよ貴方。まさか私の能力が死人を操るだけだとでも思っていたのですか？愚かですねえ」

シュランゲはいつの間にか点けていたタバコをふかす。

「コイツ！さっきのヤツより早え！？」

片膝をついて、カズヤは殴られた左頬を拭う。

「ええ。能力の応用と言うやつです。自分自身に能力を使い人間の制限《リミッター》を取り払う。そして、私の肉体は私の能力で痛みも感じず、疲れも知らず幾らでも稼働する。まさに完璧。究極です」

シュランゲは心底面白いという表情でカズヤを見る。

「ふざけんな！テメエ神サマにでもなったつもりかよ！！」

床を殴りつけ、その反動で立ち上がるカズヤ。

再び、シュランゲに向かって突撃を仕掛けた。

「ええ。そのつもりですよ。人の制限を超え、人の生死を操る。正しく神ではないですか」

当然のことを当然の様に言い放つシュランゲ。

その瞳が、自分以外は全てが塵芥に等しいと語っていた。

「見下してるんじゃないねえええ！！」

一気に加速し、トップスピードに乗るカズヤ。

「全く、度し難いゴミですねえ。能力を十分に使えない者が私に触れることが出来るはずないでしょう」

「決め付けるんじゃないねえ！」

カズヤの拳がシュランゲの頬を捉え、打ち抜いた。

「！？今。何をしたのです！ああっ、血！？私の顔に傷がッ！」

信じられないという表情をして、自分の手に付いた自分の血を見るシュランゲ。

「へっ、そうやって見下してるから油断するんだ。さあ、ケンカだ！オレが売った。テメエが買った。だからオレはテメエをボコる！」

カズヤはニヤリと不敵に笑って、シュランゲに殴りかかった。

「おのれ、おのれ！おのれッ！許しませんよ！」

シュランゲが初めて、ファイティングポーズを取る。と、向かってくるカズヤに人間が発揮できる限界を越えた速度でクロスカウンターを叩き込もうとした。

だが、カズヤはシュランゲの一撃を左の拳でいなした。

「ぐううっ」

直撃は避けることはできたが、いなした左手にはすっぱりと切り傷が刻まれていた。

「防いだ！？まさか、この私の動きについて来たと言うのですか！？そんな馬鹿な」

シュランゲの表情が驚愕へと変わる。

「今度はこちらの番だっ。右だ左だ、ボディだ。鼻だあああ！」

カズヤが脚を止めて、シュランゲを一方向的に打ち付ける。

「グハッ。ゲフッ。ちょ、調子に……」

「のってちゃ悪いかい！？」

その勢いのままひたすら殴り続けるカズヤ。

「ぎゃっ、ヒギッ。い、痛い！？痛いいい！！」

たまらず、カズヤとの距離をとるシュランゲ。

「なぜです？どうしてこんなに痛いのですか！？」

「殴られりゃ痛いのは当たり前だろう。テメエ、バカか？」

カズヤは当たり前の事を言い出すシュランゲを怪訝な表情で見る。

「バカは貴方でしょう！？私が言っているのは、私は能力で痛みを感じない体になったはずなのです。それが、今ではこんなにも痛い！一体貴方何をしたんです！？」

シュランゲに初めて、恐怖という表情が浮ぶ。

「ごちゃごちゃ抜かしてるんじゃないねえ！ンなこと、知るかああ！！」

距離を詰めて、殴りかかるカズヤ。

それに対し、シュランゲはカズヤの攻撃を人間が発揮できる限界を越えた速度で回避しようとした。

が、当たった。

「い、痛いイィィィ！？どうして、避けられないのです！？ま、まさか。私の能力が打ち消され



ている！？」

カズヤの攻撃をまともに喰らい、倒れたシュランゲ。痛みに悶え、ジタバタとものたうち回る。

「ゴチャゴ、チャウルセエエ！」

カズヤはシュランゲに馬乗りになり、マウントポジションからの、滅多打ちを仕掛ける。

「ヒィィィ。手、手が。あ、脚が。感覚が無い！？動かない！？」

カズヤの拳が、シュランゲの顔に殺到する。

カズヤの拳を喰らうたびに、シュランゲの頬が腫上がり、唇は切れ、歯が折れる。

「あ、貴方……無抵抗の人間を殴って……止めなさい！わ、私を誰だと思っているんですか！？」

ボコボコになった顔で叫ぶシュランゲ。

「テメエが誰だろうと関係ネエ！今はケンカの真っ最中だ！」

「馬鹿だ！貴方はッ」

「馬鹿で上等！！！」

一方的に殴り続けるカズヤ。

シュランゲの声がだんだんと小さくなる。

と、同時にシュランゲの能力に操られてシスイ達と戦っていたハイリゲスの隊員が一人。また一人と倒れていく。

「……嫌だ……死にたく無い。……死にたく無いい……」

シュランゲはそう言い残すと、それっきり動かなくなった。

「ハッ。情けねえ奴だったぜ。痛みから逃れて、他人の命を弄んだくせに、自分がピンチになったら命乞いとはな。とっくの昔に死んでるのに」

カズヤは心底つまらなそうに、シスイの方へ歩いていく。

シスイはシュランゲに操られていたハイリゲスの隊員達の様子を見てまわっていた。

操られた隊員達は全員絶命していた。

「すまない。俺がもっと強ければ……」

一人の隊員の見開かれた目を、そっと閉じるシスイ。

「シスイのせいじゃねーよ。それにアイツが自分で言っていただろ？死人を操る能力だ。ってな。あの時にこいつ等は既に死んでたんだよ」

トウマがシスイを慰める様に声をかける。

「それじゃ、帰るとするかトウマ」

「そうだなカズヤ」

帰ろうと出口に向かう二人。

「待ってくれ。カズヤ、トウマ」

呼び止めたのは、シスイだ。

「俺はハイリゲスを立て直す。その為にはお前たちの力が必要だ。頼む！力を貸してくれ！」

「……ガラじゃねーよ」

「だが！」

食い下がるシスイ。



「おい、ちょっとあれ見てみろよカズヤ、シスイ」

出て行こうとするカズヤを引き止めたのはトウマだった。

慌てたように、グラウンドの上部に取り付けられた窓を指差す。

「あ、アレはまさか!？」

「あ。ああ！見えるぞトウマ。アレが!？」

「そうだ！虹だ！！」

窓の外には、七色に輝く虹が彼らを見守る様に輝いていた。

了

深い森に囲まれた小高い丘の上に、木で造られた小屋がある。錬金術士ジョシュア・マーベリックはそこに一人で暮らしていた。彼の父親は彼がまだ幼い頃に家を出ており、母親は既に亡くなっていた。しかしながら、彼は名高い錬金術士であった父親の血を受け継いでおり、その技術を生業にして生活を営むことができていた。街に繰り出し仕事の依頼を受け、小屋で錬成し、依頼品を納品する日々。彼は錬金術を使うだけで楽しさを感じるような人間であったから、毎日に退屈を覚えることはなかった。

そんな日々の中、彼は一つだけ困っていることがあった。それは自分の身の回りの事に無頓着であることだった。洗濯物は一週間分ためるのは当たり前で、風呂にも二日に一回しか入らない。食事も一日に一食しかとらないこともあった。掃除するのも面倒くさがるため、彼の部屋はいつも汚れていた。錬金術によって生み出されたあらゆる物質が、そのまま床に放置されているような、そんな始末である。

ある日ジョシュアは、とある錬金術士仲間から届いた一通の手紙を受け取る。手紙の内容は、ホムンクルスの錬成に成功したというものだった。

ホムンクルスとは、錬金術士によって生み出される人工生命体のことで、ジョシュアも聞いたことくらいはあった。生まれながらにしてあらゆる知識を身につけ、その姿は人間の赤子よりも小さいという。しかもフラスコの中でしか生きられないということを知り、彼は「そんなところでしか生きられないなんて可愛そうだ」という理由でホムンクルスを錬成するのをためらっていた。加えて、生命を造り出すという行為自体が、もはや神の領域であり、人が触れては行けない禁忌なのではないか、という思いもあった。

そんな先入観を持っていたジョシュアであったが、手紙を読み進めていくうちに、少しずつ気持ちが揺らいでいくことに気が付いていた。

“私は完全なるホムンクルスの錬成に成功した。遂にかのパラケルススの偉業に達したのだ。否、私はそれさえも超えたと自負している。いま、私の目の前で、ホムンクルスは自らの足で歩き、自らの手で私の仕事を手伝ってくれている。こんな成功事例が過去にあったらどうか”

ジョシュアは手紙の内容に驚愕していた。これではまるで人間のようだとさえ思った。さらに手紙の内容を読み進めていくうちに、ホムンクルスの錬成に必要な素材まで明記されていることがわかった。

“文通を通して色々と情報提供をしてくれた君には、お礼としてこのホムンクルスの錬成方法と素材について伝えたいと思う。これを用いてホムンクルスの錬成に挑むか否かは君次第だが、私は君ならば必ず成功させられると確信している。ぜひ私と共に、この深い喜びを感じていただきたい”

ジョシュアの心は揺れていた。好奇心を刺激されたということもあるが、正直なところ今の彼にとっては自分以外の手が欲しかった。身の回りの世話をしてくれる人が必要だった。それをホムンクルスに求めるのもおかしな話ではあったが、今から嫁探しを頑張るよりも、錬金術によってホムンクルスを作るほうが近道のような気がしたのだ。

「よし……やるか！」

そう決意したジョシュアは、早速ホムンクルスの錬成に取りかかる準備を始めた。

必要な素材は、精液と数種類のハーブ。ジョシュアにとってはそれらの素材を用意するのはさほど難しくはない。蒸留器の中に素材を入れ、あとは毎日血液を適量入れ続ける。こんな簡単な方法で本当にホムンクルスができるのかどうかは怪しいところだったが、ジョシュアは友人の手紙の内容を信じて続けることにした。

「ホムンクルスが生まれるとしたらどんな子が良いだろう……」

ジョシュアはそんなことを考えるようになっていた。そもそも、男女の区別はつくのだろうか。それすら怪しいところだったが、人造人間だとはいえ、どちらかの性別をもって生まれてくるのは間違いはないだろう。そうで

なければ明らかにそれは人間とは呼べない。

「もし生まれてくるとしたら、やっぱり可愛い女の子がいいなあ」

ジョシュアも年頃の男だった。今まで彼女とまともに過ごしたこともない彼にとって、可愛い女の子との生活など、もはや夢のようだった。

「俺の言うことなら何でも聞いてくれて、素直で、気配りができて……なんか上目遣いでのできこんでくるよ  
うな、そんな可愛い子だったら最高だなあ」

そんな幻想を抱きつつも、ジョシュアはホムンクルスの錬成に明け暮れる日々を送っていた。

十日目の夜。ジョシュアはいつものように自分の血液を蒸留器に入れた後、椅子に座って居眠りをしてしまった。徐々に根気が必要な錬成に疲れてしまったのだろう。

彼はゆっくりと夢の中へ落ちていった。

\*

――幼い頃の記憶。

「こら！ ジェシーったらまた部屋散らかしっぱなしで！ 毎日少しずつ掃除しないとダメじゃないか」

「いいんだよーこれが一番過ごしやすいんだ。だいたい、毎回後片付けしたって、どうせまた使うんだから、手が届く場所にあったほうがいいじゃん！」

「まったく屁理屈ばかり言うようになって……ほんと、誰に似たんだか」

「そんなことよりお腹すいた！ ご飯まだ？」

「後片付けしないとご飯作ってあげないんだからね！」

「えーそんなのないよー。僕の話ちゃんと聞いてたの？」

「はいはい。文句を言う暇があったら、さっさと部屋片付けること！」

「ったく、しょうがないなー」

どこにでもある、母親と息子の情景。

だが――その大切さは、その暖かさは、

ずっと後にならなければ気付くことは難しい。

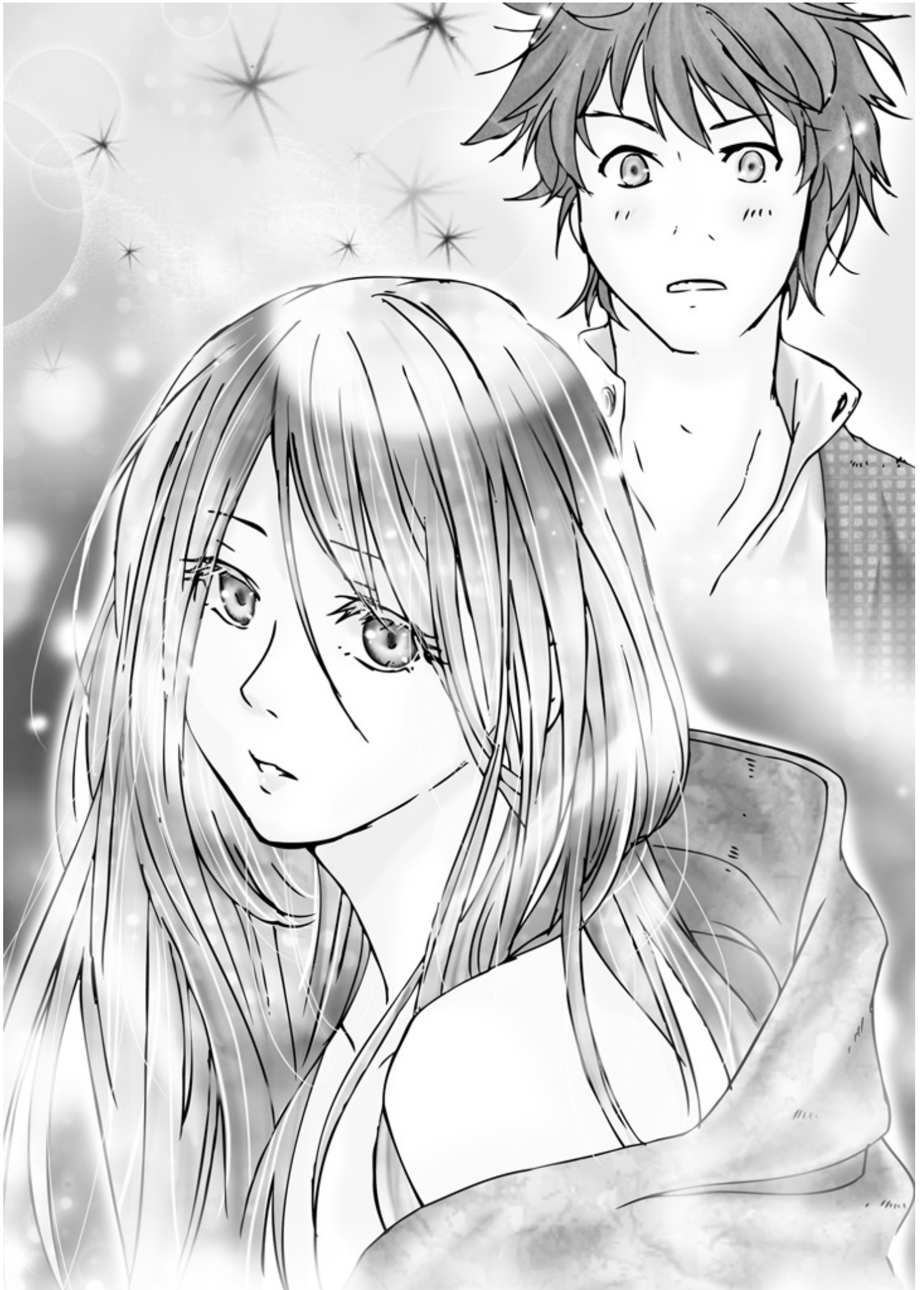
\*

ジョシュアは地面から突き上げてくるような衝撃で眼を覚ました。彼の視界がとらえたのは、部屋の中に充満している白い煙だった。

「な、なんだ！ か、火事か？」

慌てて飛び起きたジョシュアだったが、特に部屋の中に火の手は上がっておらず、小屋が焼けているわけではなかった。とはいえ、火の無いところに煙は立たずということわざの通り、どこかに煙の発生源があるはずだった。ジョシュアは手で煙を払いながら、その場所を探すために眼を凝らす。すると、その徐々に開けた視界の先にあったのは、割れた蒸留器の破片と、白い肌。

「な――ま、まさか」



思わず絶句してしまうほど、真っ白な肌。銀色の髪は腰の辺りまであり、きらきらと光を放っている。その身

を両手で抱え込むようにして横たわっていた。

「これが……ホムンクルス、なのか？」

ジョシュアは静かに近づいて、その白い肌に触れようとした。

彼の指先が触れた瞬間、ホムンクルスは跳ねるように反応しその身を震わせる。

「うっ。そうだよな……ホムンクルスとはいえ、今の状態は生まれたて赤子のようなものだし、肌がとても敏感なのかもしれない。とはいえ、とても見た目は子供には見えないな」

髪の長さ、やわらかそうな身体つきから、このホムンクルスは女性と判断していいだろう。ジョシュアは少し緊張しているようだった。とりあえず彼は近くにあった毛布をホムンクルスにかけてあげることにした。

「しばらくはこのままにしておくか。それにしても、まさか本当に出来てしまうなんて。しかも女の子だし……あと名前はでしょうか……」

まるで自分に娘でもできたかのように、ジョシュアは次々と考えを巡らせていた。

次の日の朝。ジョシュアは目覚めてすぐにホムンクルスのもとへ駆け寄った。

「まだ目覚めてないのか？」

ジョシュアはホムンクルスにかけていた毛布をはがそうと、ゆっくり近づいた。するとホムンクルスが中でモゾモゾと動きだした。そして毛布を自分の身体に巻きつけるようにして、顔だけをあらわにさせる。座ったまま毛布から顔だけを出して、ジョシュアのことを上目遣いで見つめていた。

「か……可愛すぎる！」

ジョシュアの頭の中であらぬ妄想が駆け巡る。

(このシチュエーションは完全に俺が望んでた通りの展開じゃないか。ここで俺が「俺の事がわかるかい？」とか言えば、「はい。貴方が私のマスターですね？」とか返ってきて、「マスター寒いです。早く私に服を着せてください」とか言ってきたりして、「馬鹿者。ここにお前の服が用意してある。自分で着なさい」とかちょっと強がっちゃったりしたら、「も、申し訳ありませんマスター。失礼いたしました。あの、その……できれば向こうを向いてもらえますでしょうか？ 少し、恥ずかしいです……」なんて言ってきたりなんかしちゃったりして――)

自らの欲望丸出しの妄想に耽っている最中、ホムンクルスは毛布を身に纏ったままその場に立ち上がり、ジョシュアの前まで移動して彼の目の前で立ち止まった。

「おっ。お、俺の事がわか――」

ジョシュアが妄想通りの手順で話しかけようとしたところで、彼はホムンクルスにおもいきり平手打ちされたのだった。

\*

――幼い頃の記憶。

ジョシュアは幼い頃に一度だけ母親にぶたれたことがあった。

それは、近所に住んでいた女の子にいたずらをして、泣かせたときだった。

「私は、女の子を泣かせるような息子に育てた覚えはないよ！」

そのときのジョシュアの母親は、彼が今まで見たことのないような形相で怒っていた。さすがのジョシュアも泣き出して、女の子はそんな彼の姿を見て泣きやんだという。

だが、ジョシュアは母親にぶたれたショックで泣いていたわけではない。

ジョシュアは幾晩と、自分の母親が泣いている姿を見たことがある。母親が泣いている理由はよくわからないが、それがもし父親のせいで寂しい思いをして泣いているのだとしたら。父親はぶたれるべき相手であり、でももうここにはなくて、だから母親はそんな女性を泣かせるような男が許せなくて――。

そんなどうしようもない考えがジョシュアの頭の中で渦巻いて、ただよくわからなくて、彼は泣くことしかで



きなかった。

\*

ホームクルスがジョシュアをぶったのは、いきなり肌に触れてきたことと、ただ毛布をかけただけで放置されたことが理由だった。

生まれたばかりでありながら言葉を発し、身体を動かすことにおいても何の支障もない。まさに完璧な出来だった。外見上も特に変わったところはない。ただ一点、ジョシュアにとっては誤算というか、見間違いだったのはその性格である。

「マスター。食事を済ませたのなら早く街へ行く支度をしてください。ずっとそこに居られたら片付かないです」

「わ、わかったよ……」

ジョシュアが望んでいたのは、彼の言うことならなんでも素直に聞いて、気配りができて、といった自分に都合の良いものだった。だがこのホームクルスはまるで世話焼き女房のように、何かとジョシュアの行動に対して干渉したがる傾向にある。ジョシュアはすっかり彼女の尻にしかれているような状況だった。かろうじて主従関係と言えるのは、ホームクルスがジョシュアのことをマスターと呼ぶことくらいだった。

「あっ、マスターまた洗濯物をぬぎっぱなしでこんなところに放置して。すぐに洗濯場に持って行ってくださいっていつも言ってるじゃないですか」

「ああーすまない。次からは気をつけるから」

とはいえ、実はジョシュアが当初目的としていたことは一通り叶っているのだった。なぜならホームクルスは見事にジョシュアの身の回りの世話をこなし、食事に掃除に洗濯、全て完璧だった。

「黙ってやってくれれば何も言うことないんだがな……」

「マスター、何か言いましたか？」

「いっ？ いや、何も言ってないよ」

ジョシュアが真っ当な人間にさえなれば、ホームクルスも何も言わなくなるということに、彼が気付くのはまだ先の話だった。

ジョシュアがホームクルスと生活するようになって二週間が過ぎた。

さすがのジョシュアも、毎日ホームクルスから口うるさく言われるのが耐えられなくなったのか、やや真っ当な人間に改善されつつあった。時間が空けば掃除を率先して行うようになり、食事もホームクルスを手伝うようになって「マスターそれは私の仕事ですから」とか言われてしまうくらいに成長していた。

ジョシュアは朝食を済ませたあと、郵便物が届いてないか確認するためにポストをのぞきに行った。するとポストの中には一通の手紙が入っていた。ジョシュアはその場で封を切って手紙を読む。そこにはこう書かれていた。

---

親愛なるジョシュア・マーベリック殿へ

ご機嫌麗しゅう。我が魔術院では貴方の来訪を心からお待ちしております。風の噂によれば、貴方がホームクルスの錬成に成功したと聞いています。できればすぐにでもお話を伺いたいです。今はかの東方技術管理局、別名シャングリラと呼ばれた組織も解体していますが、ロストテクノロジーの流出を恐れるが故に異端審問組織が結成されているという話もあります。ホームクルスの錬成は人体錬成に繋がる禁忌《きんき》であることは、高名な錬金術士であったお父上の息子である貴方なら知らないはずがないでしょう。とはいえ、貴方の類稀《たぐ



いまれ》な知識と素質を、このまま黙って失うのは当院でも望まぬところです。是非とも、ロンドンまで一度足を運んでいただけないでしょうか。チケットを同封しておりますので、都合の良い日にでもお越しください。我々はいつでも、貴方の来訪を歓迎しております。

魔術院カルディナ 対外交渉局 局長 マルティナ・アインハルト

p. s. 一ヶ月を過ぎてもお返事をいただけない場合は、当院の魔術師を派遣させていただきます。

---

「……魔術院、だと」

ジョシュアの表情が一瞬引きつった。

「マスター？ 如何なさいましたか？」

ホームクルスが心配そうにジョシュアに話しかけてきた。ところがジョシュアはホームクルスに構うことなく部屋へと戻っていった。

「……マスター」

いつもなら問いただす彼女であったが、何かを察しているのか、ただ黙ってジョシュアの後姿を見送っていた。

ジョシュアは部屋に戻った後、何度も手紙の内容を読み返していた。

「魔術院カルディナ……親父が行って、帰ってこなかった場所」

ジョシュアの父親であるレイナード・マーベリックは、かつてパラケルススの再来とまで言われた世界最高の錬金術士だった。彼は父親のことについてはほとんど知らない。彼がまだ幼い頃に家を出て以来、何年経っても帰ってこなかったのだ。母親に聞いても「お父さんは遠いところで一生懸命お仕事をしているんだよ」と言うばかりで、詳しいことは何も言ってくれなかったという。父親が魔術院という場所に行ったことについては、母親が亡くなった後、ジョシュアが錬金術として一人前になってから知った事実だった。

「何故いまになってこんな……」

ジョシュアにはわかっていた。すべては自分がホームクルスを錬成したことが原因だと。神の領域であり、禁忌《きんぎ》であるとわかっていながら、彼は手を出してしまった。いったいどこから情報が漏れたのかはわからないが、それだけ魔術院が強大であるということだろう。たとえホームクルスを連れて逃げて、おそらく逃げ切れはしない。ジョシュアはそう考えていた。

いっそホームクルスを手放す、ということも考えたが、ジョシュアにとってそれも無理な話だった。彼女の存在は、今の彼の生活においてかけがえのないものになっている。恋人とか伴侶とかそういった感情ではない、家族のような、そんな暖かさを感じていたのだった。

「どうする……どうする――」

ジョシュアはずっと部屋に閉じこもり、考え込んでいた。

そんな彼の姿を、ホームクルスは部屋の扉のわずかな隙間越しに見つめていた。

「マスター……」

彼女は気付いているだろうか。

ジョシュアのことを心配そうに見つめる、その理由を。

\*

ホームクルスは小屋の地下室に来ていた。

そこには多くの武器が並べられている。

ツヴァイハンダーにグレートソード。どれも大剣とよばれる両手で持つ剣だ。

なぜこんなところにこのような武器が並べられているかはわからない。  
だが、ホムンクルスはそれらの武器を懐かしそうに眺めているのだった。  
「マスターに万が一のことがあったら、私は――」  
その瞳は、そこに並べられた剣のように鋭いものだった。

——幼い頃の記憶。

「ジョシュア。もし自分よりも強大な敵に立ち向かうことになったら、決して自分から攻め込んではいけないよ」

「えー。ヒーローはどんなに相手が強くて、自分から立ち向かっていくものでしょ？」

「そんなのが通用するのは物語の中だけさ。現実はずっと慎重に、相手の情報を徹底的に調べ尽くした上でないと、簡単に勝つことはできない。だから、もし相手の正体もわからず、力量も測れず、勝ち目がないと悟ったなら、じっと準備して待ちうけることさ」

「なんか、かっこ悪いなー」

「馬鹿だねジョシュアは。この世の中でもっともかっこ悪いのは、自分の不手際で大切な人を失ってしまうことなんだ。これは絶対に忘れるんじゃないよ？」

その頃のジョシュアは、なぜ母親が自分にこんな話をしてくれたのか理解できなかった。

\*

ジョシュアが住む小屋は広い森に覆われている。

街へ続く道は整備されておらず、人が踏み歩いたことで出来た道しかない。場所によっては獣道のようになっており、この森を通るのは今となってはジョシュアくらいしかいなかった。

そんな森の中で、ジョシュアは必死に作業をしていた。

「攻性防壁の錬成など久しくやってなかったが……どうだろうな。普通の人間であればこの程度のトラップだけでも森を越えられないが、何せ相手は魔術師だっていうしなあ」

魔術院からの手紙を受け取った後、ジョシュアはロンドンに行くことなく、一ヵ月後に派遣されてくるであろう魔術師を追い払うことにした。そのために彼は森にトラップを仕掛けているのである。それは原始的な仕掛けではなく、錬金術によって作り出された道具を用いたものだった。ジョシュアが言う攻性防壁とは、一見ただの木々にしか見えないものが、人の侵入を察知すると攻撃を加えるものに変化するという感知トラップのことだ。戦争があった時代、これらの道具を作っていたのが錬金術士であり、軍は彼らの力を戦争の道具にしていた。魔術などといったオカルトめいた力を用いるよりも現実的であり、“失われた技術《ロストテクノロジー》、などと言われた制御不能な道具を使うよりもリスクは低かった。ジョシュアの父親であるレイナードも、かつては戦争のために錬金術を行っていたという。ジョシュアは小屋に残されていた父親が残した書物の中から、攻性防壁の錬成方法を知ることができたのだった。

「念のため無限迷路の錬成陣も張っておくか。他にも捕縛用のトラップを仕掛けて魔術師を捕えて色々聞き出すのも手だな……」

「マスター。食事の準備ができました。そろそろ休憩しましょう」

「うわっ、なんだ居たのか」

「……私は、先ほどからずっとマスターの後ろにいました」

ジョシュアはホームクルスの存在にさえも全く気付かないほど、錬成に夢中になっていた。

「ふう……そうだな。まだ時間はある。根づめて自分を見失っては大事になるからな。ここはお前の言う事に素直に従っておくでしょう」

ジョシュアの言葉を聞いて、ホームクルスは少し微笑んだ。

「……あ」

「どうかなさいましたか？ マスター」 ホームクルスは首を傾げながら言った。

「あ、ああ。いや、なんでもない」 ジョシュアは少し照れくさそうにして、前を向いて歩き出す。

彼はホムンクルスが微笑む顔を初めて見たから驚いたのだが、何故かそれを彼女には悟られたくないと思ったのだった。

――そうして一ヶ月の月日が流れた。

魔術院からの手紙の内容が正しければ、そろそろジョシュアの元へ魔術師が派遣されてくる頃だった。ジョシュアは森のトラップ以外にも、万が一に備えて近接用の攻撃アイテムも錬成していた。相手がどのような魔術の使い手かわからないが、用心することに越したことはない。

ホムンクルスは、特にジョシュアがしていることに質問することなく、ただ黙って見守っていた。ここ数日はホムンクルスが家事をこなしていたのだが、それに対してジョシュアに文句を言うこともなかった。

「あとは待つだけが……この小屋まで来られたら、半分諦めたほうがいいかもしれないな」

ジョシュアは攻撃アイテムを作ったものの、まともにそれを人に対して使ったことがなかった。魔術師相手にどこまで通用するかといえば、ほとんど期待できないだろう。戦闘経験は明らかに向こうのほうが上だと、ジョシュアは確信していた。

ジョシュアはホムンクルスを眼で追う。彼女は食器を洗っているところだった。

「……今思えば、誰かの為にここまで真剣になったことは初めてかもしれないな」

ジョシュアは、ここ一ヶ月かけて準備してきたのは、全てホムンクルスの為なのだということに今更ながら気が付いたのだった。

\*

ジョシュアが住む小屋近くの街に、見慣れない姿をした者たちがいた。

正確には、一人と一匹。

紫のローブを纏い、フードを深くかぶっているため素顔は見えないが、しなやかな身のこなしと隙間から出ている紫色の長い髪から、性別は女性であることがわかる。手には先端に宝石を施した杖を持っていた。そのあまりにも目立つ格好から、書物などで眼を通したことがある者ならばみな口をそろえてその名をあげるだろう――この者は魔術師であると。

その傍らに四本足で歩いているのは、雪のように真っ白な毛並みを持つ犬だった。犬にしては体格がやや大きいため、狼と間違えられても不思議ではない。ただ犬にも狼にも無い、その真紅に染まった両目が、この世のものとは思えぬ雰囲気漂わせていた。

「主……そろそろ目的に辿り着くころではないか？」

白い犬が発する言葉は、魔術師の耳にしか聞こえていないようだった。

「落ち着いてキール。そんなことは私もわかっている。いくらあの憎たらしいマルティナの命令だからって、私はちっとも嫌な思いはしていないし、一刻も早く用事を済ませて新しい空間魔術の修行をしたいとか、ぜんぜんそんなこと考えてないから」

「……落ち着いていないのは主のほうではないのか？」

「何か言った？」

「いや……何も」

キールと呼ばれた犬は、黙って前を歩き出した。魔術師には頭があがらない様子がうかがえる。まるでお嬢様と従者のような関係を連想させる。この者達の間では、これまで幾度となく今のような会話が繰り広げられてきたのだろう。

「マルティナの情報によれば、この先にある森を抜けたところに、奴の小屋があるとのことだ」

「お願いだからその名前を私の前で口にしないで」

「……おいおい。先に口にしたのは――まあいい。早く行こう。わがままなお嬢様のご機嫌を取るのもう疲れた」

最後の方はほとんど魔術師には聴こえないほどのボリュームだったため、彼女から反感を買うことはなかった。

二人は街を抜けて、森に足を踏み入れた。

そこで最初に違和感を覚えたのは魔術師のほうだった。

「ちょっと待って」

「今度は何だ？ トイレにでも行きたくなったのか？」

「……この森、何かがおかしい」

「……」冗談が通じない状況であることを悟ったキールは神妙な面持ちで言った。「何があった？」

「い、色んな感情が渦巻いている。い、彩りに満ちた……何か、が――」魔術師の身体が小刻みに震えだした。明らかに異常な状態である。

「やめろ主。眼を開けるんじゃない。ソレはこの前さんざん酷使しただろう。今使ったら主の身体が持たない」

「はあ、はあ……はあっ、はあ――」

魔術師は目を閉じて呼吸を整える。いちど大きく息を吸って、しばらく止めたあと、ゆっくりと息を吐き出した。

「ふう……なんなこの森は。とりあえず、慎重に移動したほうがよさそうね」

「いっそ、全て燃やし尽くしてしまうか？」

「お願いだから二度とそんなこと言わないで」

「すまない……今のは俺が悪かったな」

キールは大人しく魔術師よりも少し先を歩く。彼は常に魔術師よりも少し先を歩いていた。それは魔術師が普段から眼を閉ざしているからだろうか。どんな理由で眼を閉ざしているのかはわからないが、あの状態では一人で歩くのもままならないだろう。キールは有事の際に確実に彼女の身を護れるように、周りの様子を伺いながら一歩一歩足を進めていく。

「そういえば、相手は錬金術士だったわね。この森に何か仕掛けていても不思議は無い、ということか。キール。私が空間掌握をする間、周辺警護は任せたわよ」

「言われなくても、もうしている」

「さすがね」魔術師はそう言って、杖を頭上に掲げた後、ゆっくりと自分の身体を中心にして大きく弧を描くように動かした。

「――空間座標特定。第一層の算術展開開始動……掌握。続いて第二層から第三層までの算術展開、併せて論理回路への魔術供給開始。外部駆動回路からの供給ライン接続」

魔術師が詠唱を重ねるごとに、彼女を中心として紫色の光の膜《まく》が森を覆っていく。その光は留まるわけではなく、素早く走り抜けていった。彼女はこの空間掌握の魔術を使うことにより、この森に施されているあらゆる情報を感知できる。それは人や物の位置や、現在地からの目的の場所までの距離などがわかるというものだった。より魔術を重ねがけすることにより、さらに詳細な情報までも知ることができるという。例えば物は物でも、自分達に危害を与えるものか否か、といったことまでもわかってしまうという。

「特に何かがあるような気配はないが……主、何か分かったのか？」

「ええ、いたるところにトラップが仕掛けられているわね。私が位置を教えるから、片っ端から破壊してちょうだい。あ、それと物理的なモノ以外も仕掛けられているようね。私達に通じる言葉でいうなら魔方陣みたいな」

「錬金術とはそんなこともできるのか。もはや魔術と変わらないのではないか？」

「等価交換という意味では魔術も錬金術も同じ。何かを成すためには相応の対価を要求される。どちらかという

と錬金術のほう物質的なものを必要とするのだけど」

「俺から言わせればどちらもおっかないものにしか聞こえない」

「貴方のほうがよっぽどおっかないけどね」

「……」

今度は魔術師のほうキールよりも少し前を歩くことになった。

\*

ジョシュアはテーブルの上に置かれた水晶体をじっと見つめていた。

「やはり慌てて作ったようなトラップではダメだったか」

その水晶体には、魔術師とキールの姿が映し出されていた。遠隔監視できる仕組みになっているようだ。森にはいたるところに情景をインプットする水晶体が仕掛けられており、今ジョシュアが観ている水晶体にアウトプットされる仕組みになっている。

「それにしても、まさか空間系の魔術を使う者が来るとは。もっと攻撃的な魔術師を想像していたが……なるほど、この犬が攻撃役ってことか」

先ほどから魔術師の指差す場所にキールが物凄い速さで移動し、トラップを破壊するといった場面が映し出されている。状況把握の魔術師に、攻撃役の犬。まさに隙のないコンビと言えた。

「これは分が悪いな……たしかに魔術師は一人だけど、犬がこんなにも強いなんてね」

ジョシュアは自室にあるコンテナの中にある道具をあさりながら、ぶつぶつと呟っていた。

「……とはいえ、あの犬さえ何とかしてしまえば、あの魔術師はほぼ無力だろう。たしかこの中に親父が残していたものがあつたはず……ん、これは」

ジョシュアはコンテナの中から、一冊のノートを見つけた。最初は父親が残した錬金術に関するメモかと思っていたが、中身を開いてみると、そこには日記のようなものが綴られていた。

まだ見ぬ素材を集める為に、母親と共に旅をしたこと。命が危険にさらされそうになった時には、母親が護ってくれたことなどが書かれていた。

「なんだよ……母さん、戦士だったのかよ……だったら、どうして——」

ジョシュアは涙目になりながらも日記を読み進めていく。

国同士の争いに利用されるさまざまな技術。ロストテクノロジーと呼ばれる不可思議の産物に対抗する為に注目されたのは、科学と魔術の融合により生み出された錬金術。錬成されて生み出されたモノは誰にでもノーリスクで使うことができたため、汎用性が高かったようだ。錬金術士は数えるほどしかいなかったが、その中でも『パラケラススの再来』と言われたレイナードは、戦争の道具として国に使われていたに等しい扱いだった。自分が生み出したものが多くの人を命を奪っていく。その現実に関心を覚めた彼を癒してくれたのが、ジョシュアの母親だった。

彼女は騎士の家に生まれ育ち、そのまま騎士として育てられ、幾度と無く戦場を駆け抜けていた。己の写し身である剣一つで戦ってきた彼女にとって、錬金術というのはとても信じがたいものとして認識されていたと日記には書かれている。そんな中で、錬金術が頻りに戦で使われるようになってから、彼女はレイナードと出会う。迷いながら悩みながら錬金術を続けているレイナードの姿をみて、彼女はこう言ったのだという。

「目先の事ばかり見ているから闇に囚われるんだよ。あんたのその技術の先に見える未来を考えたことがあるかい？ 私はいつも考えてるよ。自分のこの一振りの剣が、幸せな未来へと繋がっているってね。そんな風に考えたら、その重荷だって少しは軽く感じられるんじゃない？」

その言葉はレイナードにとって救いとなった。そして、やがて彼は彼女に強く惹かれていくようになった。彼女の励ましのおかげで、レイナードは戦争をなんとか乗り越えた。

国が共和国制となってからは争いも無くなったように見えたが、実は裏で静かに争いが続いていたことを、レイナードは知っていたようだ。戦争の道具として使われたあらゆる技術の獲得を狙って、今度は血が流れない戦いが水面下で繰り広げられていた。レイナードは自分がそれに巻き込まれることを恐れ、ひっそりと隠居生活を送ることにする。

そこには騎士を辞めた彼女も傍にいた。共和国制度を敷いた国にとって、もはや騎士は不要の存在になってしまったのだ。そのまま国に自衛団として働く者達もいたが、彼女はその道を選ばなかった。一人の女として、男性と結ばれ、子供を生み育てる普通の家庭に入る事を選んだのだった。

森に囲まれた小高い丘の上に小屋を立て、二人はそこでひっそりと生活することにした。レイナードの錬金術により生活に不自由することはなかった。

しばらくしてジョシュアが生まれ、三人で幸せな生活を続けていけるはずだった。

そんな中、レイナードの元に一通の手紙が届く。それは魔術院カルディナからの手紙だった。そこに書かれていたのは、レイナードの錬金術士としての力を魔術院は歓迎するといった内容だった。

簡単に言えば勧誘である。

表向きには戦争が無くなったとは言え、東方と呼ばれる技術者集団と魔術院との争いは続いていた。

また不毛な争いに巻き込まれるのかと、レイナードは恐怖に怯えた。手紙の末筆には、「すぐに返事をいただけない場合は、一ヶ月後に魔術師をそちらに派遣する」と記載されていた。

「なんだよ……これじゃまるで、俺のときと全く同じじゃないか」ジョシュアは魔術院が自分の錬金術士としての力を狙っていることを確信した。

父親がどのような手段を用いて一ヶ月後にやってくる魔術師に立ち向かったのか。ジョシュアはその事について記載されているだろうと期待して、日記の続きを読むことにした。

レイナードが行ったのは、驚くことにジョシュアがしたことと全く同じだった。

森に錬金術で作ったトラップを仕掛け、相手を待ち構えることに徹したとのことだ。これには、母親の騎士として培った経験によるアドバイスによるものだったという。

「そっか。そりゃ母さんの言っていたことは、いつも正しかったもんな。親父もそれを信じてみることにしたんだな」

そして、日記の最後のページにはこう書かれていた。

「もしこれをわが息子ジョシュアが読んでいたら、私はすでに君の近くにはいないだろう。加えて、少なくとも錬金術に興味をもち、自分のものにしていくことだろう。ジョシュアよ。錬金術を大切な人の為に使え。それが出来たなら、君は生涯幸福を掴めるようになる。願わくは、君の傍に、君を見守り続ける存在があらんことを」

全てを読み終えたところで、ジョシュアはそのノートを閉じた。

ここから先の出来事は、ジョシュアも知っているとおりの展開だ。父親は魔術院に連れて行かれ、母親はそれを止めることができず、魔術師との戦闘で深い傷を負ってしまった。

傷の治療が済んだ後、彼女はレイナードを助けにいこうとはしなかった。彼女は戦う力を、愛する夫を救うための力を持っていながらも、小屋に留まることを選択した。それは、息子であるジョシュアを育てるという大事な役目があったからだ。

そして、ジョシュアが立派に育ち、錬金術を学ぶようになり、一人前になった姿を見届けたところで、彼女はこの世を去った。

「くっそ。なんだよこれ」

ジョシュアの心は悔しさに満たされていた。結局のところ、大切な人のために錬金術を使うといていた父親でさえも、母親を守ることはできなかったのだ。

「俺は……俺は親父のようにはならない！ 大切な人に悲しい思いをさせるようなことはしない！ 絶対

にだッ！」

この世に絶対などといった理は無いと知りながらも、ジョシュアは湧き上がる感情を外へ吐き出すために、その言葉を使わざるを得なかった。



魔術師とキールは、いくつかのトラップを発動させてしまったものの、何とか森を抜けることに成功していた。

「……まさか同じ場所を行ったり来たりさせられるとは思わなかったな」

キールが毒づく、魔術師は嫌そうな表情を見せた。

「なによ。その“空間魔術師のくせに空間の歪みさえ感知できないのか？”とでも言いたそうな顔は。ええ、そよよ。ただの方向音痴よ。魔術に頼らなければ目的地にさえ辿り着けないわよ！」

「そんなことは言っていない。まったく主の被害妄想はどうにかならないのか」

「なによもう。ここまで来られたのは誰のおかげだと思ってるのよ。もう少し感謝してほしいのだけどっ」

魔術師は大分ご立腹のようだった。

「とはいえ、随分と消耗してしまったな。これであそこに見える小屋にとんでもない化物が潜んでいたら、さすがに俺でも厳しいかもしれないな」

「何を言ってるのよ。貴方に適う相手なんて、そうそういてたまるものですか。私達がどれだけ苦労して貴方を――」

「シッ。主、どうやら向こうからお出ましのようだ」

キールに言われて、魔術師は小屋のほうに目を向けた。すると一つの影が小屋の扉から出てくるのが見えた。

「こんな人気もない小屋へお客様がくるなんて珍しい。どのようなご用件ですかな」

ジョシュアは白々しく魔術師に言った。それに対し魔術師はうんざりした表情を見せた。

「残念ですけど、私は英国淑女が持ち合わせているような厳かなご挨拶はできないの。単刀直入に話をさせてもらうわ。貴方が錬金術士のジョシュア・マーベリックで間違いないかしら？」

「……人に名を訊ねる前にまずは自分の名前を名乗るくらいの礼儀も知らないのか？」

ジョシュアがそう言い放つと、キールは思わず笑いを堪え切れずに息を吹き出した。それを見た魔術師の表情が歪んでいる。

「くっ……。魔術院カルディナ第一魔術局の青柳美羽よ」

「アオヤギミウ？ 変な名前だな。東洋人か？」

「どうだっていいでしょう！ 名乗ったんだから、貴方も名乗りなさいよ！」

「ずいぶんとヒステリックな魔術師がきたものだな。ああ、俺がジョシュアだよ。んで、アンタは俺をどうしたいんだ？」

正直なところ、ジョシュアは少し拍子抜けしていた。もっとシリアスな展開になるかと思ってみれば、この美羽という魔術師があまりにも礼儀しらずのヒステリックお嬢様だったからだ。

「手紙が来ていたでしょう？ 魔術院からの誘いに素直に従ってれば、わざわざ私がここまでくることもなかったのに」

「要するに、俺を強引に拉致しにきたわけだよな」

「話が早くて助かるけど、別に拉致にしきたわけじゃないわ。貴方は強制的に魔術院まで来てもらうことになるから」

「そういうのを拉致って言うんだよ！」

このままずっとこのノリで会話が続くかと思うと、ジョシュアは嫌気がさしてきた。おそらく、美羽の傍にいるキールも同じことを思っているに違いない。

「一応言っておくけど、俺は魔術院に行くつもりは無い」

「そう……悪いけど、私がここに派遣されてきた時点で、もう話し合う余地も無いから。いくわよ、キール」

「本当に話し合いの余地が無いのかは疑問だが……主の命とあれば従うしかないか。それで？ 凍結解除してしまってもいいのか？ 相手は錬金術が使えるだけのただの人間のようだが」

「その必要はないでしょう。そのままの姿で戦いなさい」

「そのままって。見れば分かると思うけど俺、姿形だけみればただの犬なんだがな」

「？ おい、さっきから一人で何を言って……」

ジョシュアにはキールの喋り声は一切聞こえないため、美羽がずっと一人で話しているように見えているのだった。

いきなりキールがジョシュアに向かって飛び掛った。犬とはいえ、喉笛を噛み付かれたら命はないだろう。だが、さすがのジョシュアも、その身ひとつで小屋から出てきた以上、それ相応の準備はしていたのだった。「犬相手に後れを取るようなら、錬金術士の名が廃るってもんだろ。まあ、親父が残した遺産だけ」

ジョシュアは自分の足元に予め仕掛けておいた錬成陣を起動させた。すると、キールの身体の動きが徐々に鈍っていき、次第に身動きが取れなくなっていた。

「これは……捕縛の魔方陣？」

美羽は落ち着きを放っている。

「取った！」

ジョシュアはすかさずナイフを右手に持ち、美羽に向かって突進した。キールが動けないうちに魔術師を討つというのが、ジョシュアの作戦だった。いかにもシンプル極まりない作戦ではあったが、戦闘経験が少ないジョシュアにとってはこれが精一杯だった。

だが、ジョシュアが持つナイフが美羽に届く前に、火の線のようなものがジョシュアの前を走った。

「うわっ。あぶねえ！」

ジョシュアは一旦その場から離れるしかなかった。先ほどの火は、キールの口元から発せられたようだった。「……さすがは魔術師様が連れている犬だけあって、ただの犬じゃないってわけか。そりゃそうだな。まさかペットというわけでもなし、使い魔であれば動きを封じようが口から火くらい出すと考えるのが定石か」

一度限りといっても言いほどのジョシュアの作戦も、あっさりとは破算になってしまったわけだが、それでも彼は落ち込む素振りを見せなかった。

「キール。凍結解除を許可します」

「最初からそうすればよかったんだ」

美羽の言葉を聞き入れた途端、キールは突如として炎に包まれた。そして、そこに現れたのは、赤髪・赤眼・赤褐色の肌をもつ、人間の男の姿だった。身体には黒い紋章のようなものがびっしりと刻まれている。それを見たジョシュアは、流石に驚きを隠せない様子だった。

「……変身した？ いや、むしろそちらが本来の姿というわけか」

「さて、それはどうだろうな。まあ、お前が俺の本当の姿を知る前に、恐らくこの世から居なくなるだろうがな」

「キール。殺しちゃダメよ！ちゃんと生きてまま捕えないと意味ないんだから」

「わかっている。さて、どうする錬金術士。言っとくけど俺は強いぞ。さっきの火線はほんの挨拶代わりだ」

「なんとなく分かるよ。けど、俺も無残にやられるわけにはいかないんでね！」

ジョシュアの手元には、筒のようなものが3本握られていた。そして、それらをキールが立っている場所へと投げつけた。

「なにをするかと思えば……こんなもの！」

キールは片手から火線を放ち、投げつけられた筒を破壊しようとした。すると、その筒の中から真っ白な煙が噴出しだしたのだ。よく見ると、氷の結晶のようなものがキールの周りを展開している。

「くっ……これは」

さすがのキールも極度の冷気には弱いようで、またしても身動きが取れなくなっていた。

「四大元素を扱うのは魔術師だけだと思うなよ。錬金術においても基礎中の基礎なんだからな」

火を扱うキールを相手に、氷の攻撃で攻めるというのも、またシンプルな手段だった。

ところが、キールの身を包んでいた冷気は、あっという間に消えていってしまった。それは、美羽の空間魔術によって、別の場所へと冷気が転移させられたからだった。

「……もっとも、新しい空間魔術を習得すれば、貴方をまるごと魔術院へ転移させることも可能なんだけどね。」

これだから私は忙しいっていうのにどうして私を派遣させるかな……」

さりげなく物凄い事を言い放った美羽であったが、この状況では明らかにジョシュアが不利なのは間違いなかった。そもそも、現時点で二対一になっているのだから、人数だけをみても圧倒的にジョシュアに勝ち目は無い。錬金術による攻撃も、美羽の空間魔術によって邪魔されてしまっただけではキールに届くこともない。まさにジョシュアにとって万事休すの状態だった。

「さて、そろそろ諦めて大人しくしたらどうだ？ 今なら危害を加えないし、あの森のトラップについても水に流してやる。俺は紳士で通っているからな」

「うわーなにそれ嘘くさい」

「主は黙っててくれ！」

余裕丸出しの二人を前に、ジョシュアは本当に為す術がなかった。戦闘はおろか、錬金術で武器を作った経験もほとんど無い彼に勝機などあるはずもなかった。彼自身それはわかってはいたが、それでもあの森を越えられた瞬間、もう自分から立ち向かっていくしか方法はなかった。レイナードが残してくれたわずかな攻撃アイテムを使って、自分がホムンクルスを守るしかなかったのだ。

「そうだ、俺が、俺があいつを守らないと……」

ホムンクルスには小屋に居るようにと伝えてある。彼女にしては珍しく、黙って従ってくれたようだった。逆に潔すぎて怪しいなどと、ジョシュアはまったく疑いをもっていなかった。それだけ、自分自身の力でなんとかしようと思っていたのだ。

「ほら、大人しく来い」

キールがジョシュアに手を差し伸べる。そして、その手がジョシュアの肩を掴みかかろうとしたその瞬間、二人のもとに影が落ちた。

「……ん？」

ソレが空からやってくることに気付く前に、キールが差し出した片腕は見事に斬り落とされた。

「――は？」

キールは自分の片腕が斬り落とされたことよりも、今日の前に立っているソレに何より驚いていた。透き通るような白い肌に、太陽光が反射して輝きを放つ銀色の髪は、天使の羽を思わせる。そして、両手には自分の身長以上の長さがあるのではないかと思えるほどの大剣を持っていた。

「お、お前……」 ジョシュアは開いた口がふさがっていなかった。

「マスターには指一本触れさせないッ！」



軽々と剣先をキールに向けて言い放ったのは、小屋にいるはずのホムンクルスだった。

\*

そこから先の展開は、まさに驚きの連続だった。ホムンクルスはいつの間に覚えたのか剣の扱いは完璧で、その剣戟はキールを圧倒していた。キールは片腕を斬られてしまったこともあって、思うように攻撃ができないようだ。なんとか火線を放つも、ホムンクルスが剣を大きく振るうことによって生じる風の圧力によって消し飛ばされていた。

あの細い身体のどこに大剣を振り回す力があるのか。創り手であるジョシュアでさえ全く理解しがたいものだった。

ジョシュアは魔術師を狙うなら今しかないと思い、美羽のほうを見る。すると美羽は立ち尽くしたままだった。何かに恐れているのか、身体が小刻みに震えている。

「だめだ。このままではやられてしまう。紋章解放するにも体力が持たないか……。主！ 右腕の修復を頼む。……主？」

キールが必死に美羽に言葉を投げかけるも、彼女はまったく反応しなかった。なにかぶつぶつと独り言のようにつぶやいているだけだった。

「い、色が見える……本来あるはずのない、彩りの感情が。いや、むしろアレは——」

フードによって隠れていた美羽の目が、わずかながら露になっている。普段は眼を閉じているはずの美羽が、その紫色の瞳をホムンクルスに向けていた。

「眼を閉じろ主！ それ以上、紫忌眼を使ってはダメだ！」

「紫忌眼……だと？ まさか」

その聞きなれない単語は、ジョシュアにも覚えがあった。紫忌眼とは、かつて東方と呼ばれた技術者集団が管理していたロストテクノロジーの一つだ。その瞳は人の感情を色で視覚化することができるという。噂によれば、見るだけではなく人の感情を操ることさえも可能らしい。

「お前がその紫忌眼の使い手だと言うのか。だが、その視線の先は……ホムンクルス？」

ジョシュアはホムンクルスを見た。先ほどまでキールと激しく戦っていたというのに、汗ひとつかいていない。やはり彼女は人造人間であるということを思い知らされる。それだけに、美羽がホムンクルスに対して紫忌眼を発動させている意味がわからなかった。

「ホムンクルスに感情を視ているとでもいうのか？ そんなバカな……」

しばらくすると、美羽は瞳を閉ざして、落ち着きを取り戻した。そして、キールに向かって言い放った。

「キール。魔術院に戻るわよ」

「は？ 何を言っているんだ。まだ奴を確保してないぞ」

「その必要は無い。なぜなら、ここにはホムンクルスなど居ないのだから。とんだ茶番だわ。まんまとマルティナにしてやられたってわけね」

「……」キールは暫く黙っていたが、美羽があまりにも真剣な装いであることがわかってから、「了解した」とだけ言って、元の犬の姿に戻っていった。

「なんだ？ いったいどうしたっていうんだ」

ジョシュアはひとり困惑していたが、とにかく危機は去ったということを理解したとたん、腰が抜けたようにその場に座り込んでしまった。

「ジョシュア・マーベリック。勘違いしないで。私は別の目的が生まれたからここを立ち去るだけ。決してあなたに遅れをとったわけじゃないから」

美羽の強がりなのか余裕なのかどちらとも取れない発言に対して、誰も反応を示す者はいなかった。

「けど、一つだけ言っておくわ。貴方、ソレを大切に扱わないと、呪われるわよ」

「は？」

美羽は最後にとんでもない事を言い残して、その場を去っていった。キールが彼女の後に続いて歩いていく。

「マスター。ご無事ですか？」

ホムンクルスは両手に持っていた剣を置くと、ジョシュアの元へと駆け寄ってきた。

「ああ。もう、何がなんだかわけがわからんが、とにかく助かったようだ……な」

「マスター！」

ジョシュアは成れないことをしたことによる疲れも相成って、見事に気を失ってしまったのだった。

\*

――幼い頃の記憶。

ジョシュアは父親が地下室で毎日のように作業をしていることを知っていた。母親は「あぶないから近づくんじゃないよ」と言っていたが、好奇心旺盛な年頃のせいで、ある日のぞいてしまったことがあった。

そこでは、地面に大きな模様が描かれていた。無数の流れるような線がいくつも重ねられており、左右対称の紋様が地面に直接掘られている。その中心には、ジョシュアも良く見たことがある模様が描かれていた。太陽と月が寄り添っているようなその模様は、レイナードが身に付けているあらゆるものに描かれている模様と同じだった。それは服であつたり、指輪であつたり、ペンダントであつたり。まるでその模様がないと生きられないとも言えるかのような模様だった。

「完成だ。これで私や妻にもしものことがあっても、ジョシュアを一人にすることはしない」

ジョシュアは、レイナードが言ったことがいったい何を意味しているのか、さっぱり分からなかったが、それについて問いただしてはいけないと、なんとなく察してその場を後にしたのだった。

\*

ジョシュアが眼を覚ましたのは、美羽とキールが立ち去ってから二日後のことだった。

「あ、マスター。ようやく目を覚ましたんですね。本当に、本当によかった」

ホムンクルスが嬉しそうにジョシュアのことを見つめている。

「お前、俺が起きるまでずっとここに居たのか？」

「当たり前じゃないですか。ずっと心配していたのですから」

ジョシュアは美羽が去り際に残した言葉を思い出していた。「ここにはホムンクルスなど居ない」と言った彼女の、その真意についてなんとなく分かったような気がしていた。

しばらくして、ジョシュアは小屋の地下室へと降りて行った。夢の中でみた、父親が施していた紋様がどうしても気になったからであった。

地下室には大きな剣がいくつも並べられている。それは母親が使っていたものだと思ったのは、ずいぶんと大人になってからだった。ここにおいてある大剣を、ホムンクルスが見事に使いこなしていた描写が、ジョシュアの脳裏をよぎった。

地面に眼をやると、ホコリがかかっているように見えなくなっていたが、たしかに紋様が描かれているのがわかった。ジョシュアはホコリをはらって、その紋様を調べた。

「こ……これは、鎮魂の錬成陣！」

鎮魂の錬成陣とは、その名のとおり、魂を鎮める錬成陣のことである。この陣を敷くことによって、特定の魂をこの場所に留めておくことができるというものだ。それは人体錬成につぐ禁忌とされていた。レイナードは自分の、あるいは母親の死期を悟り、この錬成陣を施したのだろう。魔術院から派遣されてくる魔術師との戦いで、ジョシュアが一人取り残されてしまうことに、事前に対処していたのだ。

「まさか……ここに鎮められていた魂が、あのホムンクルスに宿っている、なんてことはないよな……」

ただし、その仮設はこれまでの出来事を繋げていくと、妙に辻褄があうのだった。  
「マスター。食事ができましたよ」 上の階からホムンクルスの声が聞こえてきた。  
「ああ、分かった。今行くよ」  
ジョシュアは黙ってその場を後にして、ホムンクルスの元へと向かった。

食事の最中、ジョシュアはふと思い出したかのように言った。  
「そういえば、お前の名前、まだつけてなかったな」  
「え？ 私はホムンクルスなので、名前なんて必要ないです」  
「そんなこと言うな。いつまでもホムンクルスという名前では呼びづらい。俺が名前をつけてやろう」  
「そうですか……マスターがそう言うなら。素敵な名前を考えてくださいね」  
「いや、実はすでに考えてあるんだ」  
ジョシュアは恥ずかしそうにしながら、その名前を口にした。  
「……いい名前ですね。どのような理由でこの名前を？」  
「べ、別に何だっていいだろ」  
「良くないですよ！ 名前には意味があるんですから。教えてもらわないと困ります」  
ジョシュアは、その名をつけた理由について、ずっと黙っておくつもりだった。  
それは自分が一人前の錬金術士になるまで、見えない場所からずっと見守ってくれていた母親の名前だったのだから。

—————Name of Homunculus. closed.

——物語は約三ヶ月前まで遡る。

空を見上げれば濃い雲が覆っている。世界中でもっとも蒸気機関が発達したと言われるこの地に、一際目立つ建物がそびえ立っていた。その中心にはビッグベンと呼ばれる大きな時計の塔がある。世界はこの時計が示す時間を基準に動いている。

その建物の一室で、ひとり筆をしたためている人物がいた。髪は白く、長い髭もまた白い。ゆったりとした椅子に腰掛けながら、サイドテーブルの上で手紙を書いていた。

「さて、どのように手紙を書けば、あいつはその気になってくれるかのう……」

そんなことをつぶやきながら、老人は筆を走らせていた。

そんなある日、老人の部屋に一人の女性が訪れた。

艶やかな漆黒の髪は肩の辺りまで伸びており、銀色のローブを身に纏っている。身体のラインは見えないが、ローブの上からでも細身であることはよくわかった。優雅な身のこなしは育ちの良さを醸し出している。

「翁、ご機嫌麗しゅう」

静かに腰を折り、彼女は老人に対して頭を下げた。

「これはこれは、対外交渉局長がこんな老いぼれのところまで、一体何の御用ですか。それに私の事を翁と呼ぶのはおやめください。私はこの通り、もう一線を退いた身なのですから」

「……何を仰いますやら。まだまだその眼光を閉ざすには早いですわ」

彼女は嬉しそうに微笑んで、彼の傍へと近づいてきた。近くにある椅子に腰掛ける。

「そういえば、ある錬金術士が完全なるホムンクルスの錬成に成功した、という噂が流れていますよ。ご存知でしたか？」

「……さあ、初めて聞きましたなあ」

「翁でさえ一度も成功したことがないと聞いていますけど、気になりませんか？ その錬金術士のことを」

「私はもう、錬金術を使うのは止めましたからな」

「……またまた」

彼女はまたしても嬉しそうに微笑んで、椅子から立ち上がり、彼の耳元に口を近づけた。

「詳しいことがわかり次第、その錬金術士をこちらに招こうかと思っていましてね。まあ、きっと向こうから来てはくれないでしょうから、当院の魔術師を派遣する予定です。最近、極東から引き入れた魔眼を持つ魔術師に任せようと思っています。彼女の魔眼は人の感情を視覚化できるらしいですよ。果たしてホムンクルスには感情が宿るのか。フフ、興味が湧きませんか？」

「……」彼は黙ったまま、彼女の言葉を聞いていた。彼が何の反応もしめさないのも、つまらなくなったのか、彼女はすぐに傍を離れて部屋を出て行った。

一人になった彼は、再び筆を走らせる。

「……好都合だな。紫忌眼を持つ彼女なら、ここへ連れてくるようなことはしないだろう。それに、完全なるホムンクルスの錬成など、この世でだた一人しか成功させられるはずがない。あとはその気になってくれるかが——」

筆を走らせる彼の指には、太陽と月が寄り添っている模様が彫られた指輪がはめられていた。

—————Letter from London. closed.